THE ENGLISH GRAMMAR

初等英文法の話

初等英語叢書第二編

特27
997

初等英語叢書第貳篇

THE ENGLISH GRAMMAR

初等

英文法の話

『英語研究』記者編著

THE EIGOKENKYUSHA
TOKYO

初等英語叢書目次

第一篇　初等英作文の話
第二篇　初等英文法の話
第三篇　對譯西洋幽靈の話
以上既刊

第四篇　對譯アラディンのランプ
第五篇　初等英語綴字の話
第六篇　第二英作文の話
第七篇　第二英文法の話
第八篇　對譯マンチョーセン男爵
以上近刊

第九篇　以下未定以上の順序も變更することあるべし。二三ヶ月目毎に二三篇宛發行の豫定。

初等英語叢書の序

世間に英語英文に關する編著は幾らもある。併し眞の初學者用のものは尠い。たまにあつても餘りに簡單て餘りにお粗末て餘りに俗受け專門のやうてある。眞に初學者の爲めを思ひ叮嚀親切に、平易明瞭に、而かも解し得らるゝ限り詳密に書いたものは、頓と見當らない。

雜誌『英語研究』は實にこの陷缺を充たさんが爲め發行するものである。此叢書を發行する趣旨も矢張同樣の點にある。幸に『英語研究』同樣の歡迎を受くることを得ば、啻に同人一同の光榮計りではない。

學校生徒諸君は『英語研究』と此叢書とを常に左右に置いて、學校て受けた知識の補ひをせられたい。獨學の士は『英語研究』と此叢書とを對照して獨修の困難を比較的輕減せられたい。

此叢書の記事に就きての質疑は永久に歡迎す

る。微力の能ふ限り讀者をして一點の疑問なからしめたいのは同人一同の希望でもあり抱負でもある。されば質疑の答解は成るべく詳にして『英語研究』誌上に掲載する覺悟である。

明治四十一年九月

『英語研究』編輯局

同人謹識

緒言

文法などいふ鹿爪らしき規則詰の學科は、鹿爪らしく六つかしく書けば、幾らでも六つかしく鹿爪らしく書ける。さりとてそれでは徒に學生を威嚇して頭から文法は恐ろしきものと思はしむるやうなもの、所謂興味を以て修學せしむるといふことは到底出來なくなる……と言つて從來坊間に流布する『英文法講義』だの『英文法詳解』など美名を附けて、體裁を手輕にして、鳥渡初心の學生でも手を出して見たがるやう外形を慥へて……そして其中味は……乾燥無味なる直譯流の書き流し、さては各種の學校に最もよく行はれて居る某々氏の文典を當て込んで其字解めいたもの……これでは學生に何の益があらう、イヤ害する所果して何の位であらう。

本書は拙くはあるが飜譯物ではない。無論名の有る文法書の御厄介にはなり、それを參考とした所は少くないが、全體の組立記述は總て著者一個の頭腦から出たものである、だから直譯流の書き流してない事の保證は出來る。主として學生自身の研究資料に宛てようとの考で講述したのだから教科書の順序とは餘程違ふ所がある、だから某教科書を當て込んだものでない事の御受合も出來る。學生が本書を讀んだ所で、假令益少なしとするも些の害毒を及ぼさない事は確に地球大の證印をお附け申す事が出來る。

とは言へ、著者自身の考へてはこれでも斯道の爲め、將た學生の爲め相應の利益はあると自負して居るのである。英文法の一斑を稍詳しく始めて文法といふ事を學ぶ者にも解し得らるゝ樣、說明を平易に而かも詳密にし、引例なども十分六つかしい——中學五年を通じて一二回位しか遭遇しない樣のものを避け、作文、會話、譯解などの方面にも出來る限り連絡を取つて、極めて實用的に記述した考へては居る。

唯(世間の所謂著者なる者の極文句の樣だが)少々日子を急いだが爲め十分の推敲を遣つて居る暇のなかつた事は殘念である。幸に同情深き諸君の御指導により修訂の期を得らるれば大に補正したいと思ふ。

尙ほ一言お斷りして置くが、本書は本叢書中の數冊を以て完結せしむべき豫定の「英文法の話」の其第一冊である。それから普通の文法書には必ず備ふべきものとなつて居る練習課題は、『英文典例題集』と題する別冊を矢張本叢書中のものとして刊行するつもりであるから、本書には全然省くことゝしたのである。

明治四十一年九月

英語研究編輯局に於て

著者識

CONTENTS.

目次

		PAGE.
第一	WORDS と SENTENCES. GRAMMAR の定義...	1
第二	WORDS の種類、PARTS OF SPEACH の名稱...	7
第三	NOUNS の種類	12
I.	PROPER NOUNS	13
	1. Proper Nouns の性質.....	13
	2. 最も普通なる Proper Nouns の例	16
	3. 複數の Proper Nouns.....	18
	4. Proper Nouns と Articles.....	19
	PROPER NOUNS の一覽表.....	27
II.	COMMON NOUNS	28
	1. Common Nouns の性質.....	28
	2. Common Nouns と Number	30
	3. Common Nouns と Articles	30
	COMMON NOUNS の一覽表	37
III.	COLLECTIVE NOUNS	38
	1. Collective Nouns の性質	38
	2. 最も普通なる Collective Nouns の例.....	39
	3. Collective Nouns の種類	40
	4. Collective Nouns の Number 及 Articles...	42

COLLECTIVE NOUNS の一覽表 43
IV. MATERIAL NOUNS 43
1. Material Nouns の性質..... 43
2. 最も普通なる Material Nouns の例 46
3. Material Nouns の Number 及 Articles ... 48
4. Material Nouns の數へ方 52
MATERIAL NOUNS の一覽表 53
V. ABSTRUCT NOUNS 54
1. Abstruct Nouns の性質..... 54
2. 最も普通なる Abstruct Nouns の例 55
3. Abstruct Nouns の Number 及 Articles... 59
ABSTRUCT NOUNS の一覽表 61
NOUN の一覽表 63
第四 NOUNS の變化 64
I. NUMBER, PLURAL NUMBER の作り方 64
1. 規則的 66
2. 不規則的 71
3. Compound Nouns の複數 74
NUMBER の一覽表 76
II. PERSON 77
PERSON の一覽表 79
III. GENDER 80
1. Gender の種類 80
2. Masculine と Feminine Genders 82
3. Common Gender 83

4. Neuter Gender 84
5. 特に注意すべき Gender 84
GENDER の一覽表 86
IV. CASE 86
1. Case の種類 86
2. Possessive Case の作り方 91
3. Possessive Case の意義..... 94
4. Possessive Case の用法 95
5. 特別の Possessive Case 98
CASE の一覽表 101
NOUNS の諸變化一覽表 102
第五 PRONOUNS 102
1. Pronouns の性質..... 102
2. Pronouns の種類 104
I. PERSONAL PRONOUNS 105
1. Personal Pronouns の性質及び變化 105
2. Personal Pronouns の特別用法..... 109
3. Personal Pronouns の順序..... 115
4. Compound Personal Pronouns 116
II. POSSESSIVE PRONOUNS 119
III. ADJECTIVE PRONOUNS..... 121
1. Adjective Pronouns の性質 121
2. 主なる Adjective Pronouns の說明..... 122
IV. RELATIVE PRONOUNS 130
1. Relative Pronouns の性質..... 130

2. Relative Pronouns の意義用法 133
3. Relative Pronouns を省く場合 143
4. Antecedents を省く場合 145
V. INTERROGATIVE PRONOUNS 146
1. Interrogative Pronouns の性質 146
2. Interrogative Pronouns の用法 148
PRONOUNS の一覽表 151

初等英文法の話

第一

Word と Sentence.

英語でも日本語でも同じことであるが、總て文章又は言葉は幾つかの單語が集つて出來るものである。例へば日本語で

私は日本人です。

といふ言葉は、私は、日本人、です、との三つの語の集つて出來たもの、又

余は日本人なり。

といふ文章は、余は、日本人、なり、との矢張三つ語の集つて出來たもの、英語で

I am a Japanese.

はこれで上の「私は日本人です」にも「余は日本人なり」にも當る言葉即ち文章であるが、これも矢張 I と am と a と Japanese と都合四つの語の集つて出來たものである。

---

wŏrd (ウオード) 單語　sĕn'tençe (センテンス) 文章　I (アイ) 私は　ăm (アム).....である　Jăp-a-nēse' (ヂャッパニィーズ) 日本人

〔注意、本書單語の讀方假名中平假名にて書きたる音は他より强く明かに發音すべし〕

鳥渡斷つて置くが、日本語（言葉）と日本文（文章）とは、上の例に見る通り同一でない場合が多い、言葉で「です」とか「であります」「てございます」或は「だ」などいふを、文章では「なり」或は「候」といふ。一方に「私は」といふを一方では「余は」などといふ。所が英語は大抵言文一致で文章も言葉もいつも同一の事が多い、筆で書く場合も口で喋る場合も同じことが多い（或はいつも同じことゝ思つて置いてもよい）。此點は英語の方は日本語より餘程樂である。

扨話は元の筋に戻つて……。總て上の例に見る通り言葉又は文章は幾つかの語の寄り集つて出來るのではあるが、其集り樣には一定の規則がある。そして其規則が日本語は日本語、英語は英語、支那語は支那語、獨逸語は獨逸語と各國により皆違つた點がある（尤も似た點や同一の點も澤山あるが）。日本の如き言文不一致の國では言と文との規則が既に違つて居る。

英語と日本語との違ひは上例を見てもよく解る、日本語では私はといつた次に日本人といひ、それから、ですと並べるを英語は私は (I) の次にです (am) を置き、それから日本人 (Japanese) を置く前に、一つ日本語にない言葉 a といふものを入れる。これでも英語と日本語との規則の違ふ點の實際ある事が解らう。

* * * * * * *

文法 (Grammar) は其國語の規則を說く學問である。日本語には日本語の文法あり（日本文法は俗語文法即ち口語の文法と雅語文法即ち文章の文法と二つある）、英語には英文法 (English Grammar) あり、獨逸語には獨逸文法、佛語には佛文法と、それぞれ其國語に就きて方則を說いたものがある。

Grammar is the science that treat of principles of language.

〔文法は國語の要素に就きて論ずる學問なり〕。

* * * * * * *

文法とは如何なるものかといふ事は上の說明で大體解つたであらう。さらば英語英文を學ぶにも——もつと詳しく言ふと、英語の會話、作文は更らなり讀方、譯解を學ぶにも、聽取、書取、發音、綴字、其他在らゆる英語英文に關する全體の事を學ぶにも是非一と通り文法を研究して置かねばならぬことは、自然お解りになつたであらう。英文法は總ての英語の基礎——とまで行かずとも、少くとも基礎の一部をなし、在らゆる英語英文に直接又は間接の關係を持つて居るものであることもお解りになつたであらう。

尤も中には斯んなに言ふ人もあらう。我等は差支なく

Grăm'mär（グラムマ）文典、文法　En'glĭsh（いングリッシ）英國の　sci'ence（さィエンス）科學　thăt（ザット）……所の　trēat（トリート）論ずる　of prĭn'cĭples（プリンスィプルズ）要素に就きて—of lăn'guage（らンゲッジ）國語の

日本語を話し日本文を書き、日本語及び日本文を解するが、其のために別段日本の文法を學んだこともなく、また學ぶ必要も認めないで居る。さすれば英語英文を學ぶに當ても同樣、別段文法などいふ七面倒なものをやらなくとも差支なく出來る譯ではないか……。と

これは成る程一應は尤もである。併し今少しく考へて見るに、成る程我々は規則立つて日本の文法は知らない併し我々がオギヤと母の胎内を出てから此方聞き覺え言ひ覺えて今日の樣に日本語が出來るに至る迄には常に規則立つた順序や、六づかしい術語などは習はなかつたにしろ、それでも知らず識らずの中に常に文法に關する智識は受けて居る。

私は　です　日本人

と言はず、滿足に

私は　日本人　です

と言へる樣に知らぬ中に其語の順序や性質、換言すれば其文を綴るだけの文法を敎はつて居る。支那人や西洋人の半可通が

私　支那人　あります

など不完全の日本語を操るのは、之に反して日本語の文法にまだ熟達せぬからである。日本人だつて小供はよく不完全な日本語を遣ふ、それは矢張文法に熟達する度が低いからである。

されば英語英文を學ぶにも其通り、我々が日本語を覺えた流儀に順序立てず規則立たせずに出來れば一層よ

い、が併し一と通りだけの英文法は覺えて置かねばならぬ、これを知らないで居ては小供や半可通と同樣、不完全な英語より遣はれない、又完全な英語が悟られない事になる。

所で日本人が日本語、英人が英語といふ風に其自國語を極の小供時代から覺えるには、無論順序立てず規則立たせずにやる流儀がよい、それで或點までは十分に熟達も出來る（それでも後に一度規則立つた文法を修行するに越した事はない）が、外國人が中年から勉強しようといふにはこの自然流儀は何うも行はれ惡い。始終其國の人に接するものとか、日本人でも立派によく出來て旨く敎導してくれる先生のある人とかならば兎に角、さうでなくば、この自然流は兎角遺漏が出來易くて、それのみに依賴して置く事はいけなくなる。傍ら系統的文法を學ぶ必要は外國語を殊に中年から始むる者には大にあるのである。

併し文法が出來ればそれで英語英文は何でも悉く解るといふものではない。文法を學ぶは例へば醫者が生理、解剖の學を習ふ樣なものである。幾ら生理、解剖に關する智識が出來ても、實際刀を振つて人體の組織を實地に研究し、脈を取つて病根の在所を親しく考究しなくては到底醫者たるの資格を得る事は出來ぬ、生理や解剖の學問は醫者が實地に當る時の一つの手引たり參考たるに止る。文法もそれと全然同樣である、會話作文讀方譯解其他の實際に當る時の手引たり參考たるに過ぎぬのである。

されば諸君、諸君は文法を研究しても、これを單に文法の智識として智慧袋の中に秘藏して置かず、常に實際に活用して書物を讀み文を作り話をする際の手引參考に利用せられることが緊要である、文法を學ぶの要は實に全くこゝにある。

この意味より言へば文法上の術語の如き或は定義の如きを覺ゆる爲めに大なる勞力を費すの愚なることは説明を待たずして明白である。併し全然此等の術語や定義を顧みないとまた少からぬ不便不利を見るのである。術語や定義其物に大なる實際上の必要はなくとも、これによつて文法を説明する上にも又之を記憶する上にも大なる便宜を得らるゝのである。

尙ほこの術語は成るべく英語で覺えられるがよい。實は日本語の名稱にはまだ一定したものがなく、人により書物により各勝手の名稱を遣つて居る、例へば Interjection を間投詞と譯する人もある、感歎詞、又は感動詞など譯する人もある。Object を目的詞といふ書物もあり、客詞又は客語などいふ書物もあるといふ風である。それに今一つの理由は英文法を研究する者が始終日本文で書いた書物にのみ依つて居ることが出來ぬ、將來は知らず、今日では完全な英文法書の日本文で書いたものがない。術語を英語で覺ゆる必要はこんな點にある、つまり少しの骨折を吝んで一般に通じない日本名を覺ゆるよりは、始終一貫、總ての人、總ての書物に通有の英語名を覺ゆる方が、始めは多少困難でもあらうが、末始終の爲めを

思へば幾らよいか解らぬからである。

で、本書も第二章以後は術語は總て英語名を採る事とし、初學者の參考として比較的多數に用ゐられて居る日本名を括弧内又は脚註にて示すことゝする考へである。

第 二

Word の 種 類

第一章にも言つた通り word（語）は sentence（文）の基礎である、要素である。依て先づ word に關する研究より始めようと思ふ。

在らゆる英語は大別して次の九つとする。反言すれば何んな英語でも總て次の九種類の中の何れかに屬するものである。

1. Noun（名詞）　2. Pronoun（代名詞）
3. Adjective（形容詞）　4. Article（冠詞）
5. Verb（動詞）　6. Adverb（副詞）
7. Conjunction（接續詞）　8. Preposition（前置詞）
9. Interjection（間投詞）

これを Nine Parts of Speech（九品詞）といふ。Part of Speech（品詞）とは上の九つの種類の通名である、だか

noun（ナウン）　prō'noun（プロウナウン）　ăd'jĕc-tĭve（あッヂクティヴ）　är'tĭ-cle（あーティクル）　vērb（ヴァーブ）　ăd'vērb（あドヴァブ）　con-jŭnc'tion（コンヂァンクシャン）　pre-po-sĭ'tion（プリポズィシヤン）　in-tĕr-jĕc'tion（インタヂクシャン）　nīne pärts ŏf spēech（ナィン、パーツ、オヴ、スピーチ）

ら例へば、It is a dog. といふ sentence（文）に於て it の Part of Speech（品詞）は Pronoun（代名詞）is の Part of Speech（品詞）は Verb（動詞）といふ風にいふ。

文法家に依つて上の Article（冠詞）を Adjective（形容詞）の一種と見做し Parts of Speech（品詞）の數を八とする人、また Verb（動詞）の中より Auxiliary Verb（助動詞）を獨立させて十とする人などある。併し上の通り九つにするが多くの文法家なり文法書の說である。詳しくは其品詞の項に說明しやう。

以上の九品詞の內 Article（冠詞）と Preposition（前置詞）との外は總て日本の文法にもある品詞で、其性質も大體同一である。Article（冠詞）は全然日本の文法にはない品詞、Preposition（前置詞）の方は助詞又は後置詞或はテニヲハなど（文法家により色々名前を附ける）いふに性質はよく似た品詞である。尙ほ次に簡單に九品詞の定義と其說明を擧げよう。

1. **Noun.—A noun is the name of anything.**

〔名詞は在らゆる物の名なり〕。

例へば Togo（東郷）, Washington（ワシントン）, Tokyo（東京）, Japan（日本）, dog（犬）, apple（林檎）, gold（金）, kindness（親切）, sorrow（悲み）の如き有形無形一切の物の名をいふ。

ĭt（イット） ĭs（イズ） dŏg（ドッグ）犬
aux-il'ia-rĭ（オーグズィリアリ） nāme（ネイム）名
an'ĭ-thĭng（えニィシング）在らゆる物
Wash'ing-tŏn（うォシントン） Ja-păn'（ヂャぱン） ăp'ple（あップル）
gōld（ゴゥルド） kīnd'nese（かィンドネス） sŏr'row（そロ）

2. **Pronoun.—A pronoun is a word used instead of a noun.**

〔代名詞は名詞の代りに用ゐらるゝ語なり〕。

例へば I（私）, my（私の）, they（彼等は）, who（誰れ）, what（何）の如き總て名詞を反覆する代りに用ゐる語をいふ。

3. **Adjective.—An adjective is a word used to modify the meaning of a noun or pronoun.**

〔形容詞は名詞又は代名詞の意味を說明するに用ゐる語なり〕。

例へば A large *dog*.（大きな犬）. The *dog* is large.（あの犬は大きい）. I made *him* happy.（私は彼を幸福にした）中の黑字は Adjective（形容詞）で Italics 體（斜體）で示した名詞又は代名詞を說明して居る。

4. **Article.—An article is "a," "an" or "the," used to limit the application of a noun.**

〔冠詞は名詞の適用を制限するに用ゐる a, an 又は the をいふ〕。

英語の Article は a, an, the の三つしかない。其性質も Adjective（形容詞）と同じく名詞の意味を制限（つまり說明）するのだから、前に言つた通りこれを Adjective（形容詞）の一種とする文法家もあるのである。

---

used（ユーズト）用ゐらるゝ in-stĕad'（インスてッド）...の代りに mŏd'ĭ-fy（もディファイ）形容す、說明す mēan'ing（みーニィング）意味 lärge（ラージ）大きな made（メイド）爲した hăp'pĭ（はッピ）幸福に I-tăl'ic（イたリック）伊太利體の
lĭm'it（リミット）制限す ăp-plĭ-cā'tion（アップリけィシャン）適用

5. Verb.—A verb is a word that states action or being.

〔動詞は動作又は有樣を示す語なり〕。

A *bird* flies. （鳥飛ぶ）. *I* am going to school. （私は學校に行くのです）中の黑字の語は斜體の bird や I の動作を示す語、又 *I* am here. （私は此處に居る）*He* is a boy. （彼は小供だ）中の黑字の語は斜體の I や he の有樣を示す語で、何れも Verb（動詞）である。

6. Adverb.—An adverb is a word used to modify the meaning of a verb, an adjective, or another adverb.

〔副詞は動詞、形容詞、又は他の副詞の意味を説明するに用ゐる語なり〕。

She *speaks* softly. （彼女は物やさしく話す）の softly は speaks といふ Verb（動詞）の有樣如何を説明し、He is very *kind*. （彼は甚親切だ）の very は kind といふ Adjective（形容詞）の度を説明し、She speaks very *softly*. （彼女は甚物やさしく話す）では very は softly といふ他の Adverb（副詞）の意味を説明して居るから此等は總て Adverb（副詞）である。

7. Conjunction.—A conjunction is a word used to connect words or parts of a sentence.

〔接續詞は文中の語又は部分を繋ぐに用ゐる語なり〕。

stātes（スティツ）述ぶる、示す　ăc'tion（あクシャン）動作　bē'ing（びーイング）存在、有樣　bīrd（バード）　flies（フライズ）　gō'ing（ごゥイング）　scho̅ol（スクール）　hēre（ヒーア）　ăn-ŏth'ĕr（アなザ）別の一つの　spēaks（スピークス）　sŏft'lȳ（そフトリ）　vĕr'y（ヴェリ）　kīnd（カインド）　con-nĕct'（コンれクト）繋ぐ

You and *I* are friends. （君と僕とは友人だ）の and は you と I といふ語を繋ぎ、*He came* and *I went*. （彼は來た、そして私は行つた）の and は He came と I went といふ文中の二つの部分を繋いで居るからこれは Conjunction（接續詞）である。

8. Preposition.—A preposition is a word used to show a relation of meaning between a noun or pronoun and some other word.

〔前置詞は名詞又は代名詞と他の語との間の意味の關係を示すに用ゐる語なり〕。

I *am going* to *school*. （私は學校に行くのです）で to は Noun（名詞）の school と am going との關係を示し、學校からでも學校はでもなく併し學校へだと意味を明にして居るからこの to は Preposition（前置詞）である。

9. Interjection.—An interjection is a word thrown into a sentence to express some emotion.

〔間投詞は或る感情を表はす爲め文中に投げ入るゝ語なり〕。

Oh! What shall I do! （オー何うしよう）の Oh! は感情を示す語で別段文中の他の語と文法上の關係を持つて居ぬ、これは Interjection（間投詞）である。

pärts（パーツ）部分　frĭends（フレンヅ）友人　cāme（ケィム）來た　wĕnt（ウェント）行つた　shō̅w（ショゥ）示す　re-lā'tion（りれィシャン）關係　be-twēen'（ビトゥィーン）間の　sŏme oth'ĕr（サム、あザ）何か他の　thrō̅wn（スロゥン）投げ込まれたる　in'to（いントゥ）に　ex-prĕss'（エクスプれス）表はす　e-mō'tion（エもゥシャン）感情　Ō̅h!（オゥ）　shal'（シャル）

以上一と通り Parts of speech（品詞）の性質を説明し終つたが、到底あんな荒ぽい説明で初學の方にお解りにはならなからうとは固より承知して居る、唯此後説明を進めて行くに當り、大略なりとも各品詞の名前や性質を知つて居つて頂かないでは少からぬ差支を生じようから、眞の急行列車的に一と通りの説明をしたのである。御會得の行く樣の詳しき説明はこれからのことである。

第三

Noun の種類

Noun（名詞）は前章に述べた通り有形無形一切の物の名の詞である。でこれを二大別して有形名詞と無形名詞との二つにし、有形名詞は更に四種に小別する。即ち次の通り、

- Noun（名詞）
  - I. Concrete noun.（有形名詞）
    - 1. Proper noun.（固有名詞）
    - 2. Common noun.（普通名詞）
    - 3. Collective noun.（集合名詞）
    - 4. Material noun.（物質名詞）
  - II. Abstract noun.（無形名詞）

con-crēte′（コンクリート） prŏp′ĕr（プろッパ） cŏm′mon（こムモン） cŏl·lĕct′ive（コれックティヴ） ma-tē′rĭ-al（マてィーリアル） ăb′strŭct（あブストラクト）

尤も此區分法も文法家に依て一定せぬ。全體の Noun を直ぐ Proper, Common, Collective, Material, Abstract の五つに分類して Concrete といふ名稱を遣はぬ人などは最も多い。又 Proper と Common の二種に分類するに止め Collective 以下は總て Common の中に含めて置く人もある。併し分類法などは何んなであつても結局は同一に歸するのだから、格別力を入れて研究するには當らない。それよりは其實質、其內容の研究に骨を折らねばならぬ。

いでやこれから五種の Nouns（名詞）に就き一つ一つ詳しく研究して行かう。

I. Proper Noun（固有名詞）

1. Proper Noun の性質

A Proper Noun is the name of an individual person or thing.

〔固有名詞は一個の人又は物の名なり〕。

つまり人の名、土地の名の如き其人又は其物限りの名を總て Proper Noun（固有名詞）といふのである。東郷平八郎といへば日露戰爭に名高い名將一個の名で、茫然大將とか將軍とか人間とかいふ如き一般の大將、將軍、人間に共通の名とは違ふ。だから東郷平八郎は Proper Noun

in-dĭ-vĭd′u-al（インディヴィデュアル）一個の pĕr′son（パーソン）人 thĭng（シング）物

（固有名詞）で、大將、將軍、人間の方は Common Noun（普通名詞）である。

又東京といへば日本の首府一個の土地の名であるから、首府とか市とかいふ風の倫敦にも巴黎にも北京にも共通し得らるゝ名とは違ふ。即ち東京、倫敦、巴黎、北京は何れも Proper Noun（固有名詞）で首府、市は Common Noun（普通名詞）である。

所で中には斯んな理屈を言ふ人があらとう思ふ。東郷といふ名前は決して平八郎將軍一人の名前でない、即ち一個特有の名前でない、現に東郷何某といふ少將もあつた、今も海軍省に東郷大佐といふのがある。海軍以外の人間で東郷といふ男を僕は三人も知つて居る、して見れば矢張これもそれ等の人々に共通の名前であるから Proper（固有）でなくて矢張 Common Noun（普通名詞）といふが穩當ではなからうかと。又或人は斯うも言ふだらう、東京といふ名は日本の東京の外に佛領の東京（トンキン）といふのがある、だから東京といふ名前は日本の首府東京の專有ではない。と。

此等の說は一應尤もである、イヤ總て何の學問をするにも斯んな風に色々反對の側からも考へて見て深く研究するが、即ち其人をして確實なる勉强を成し遂げしむる原因になるのだから、誰れしも常に斯んな理屈は考へて見られん事を寧ろ奬勵するのである。

所でこれ等の疑問には斯う答辯すればよい。「元來 Proper Noun（固有名詞）は意味のない語で、Common Noun（普通名詞）の方は意味のある語である。例へば首府といへば誰れしも「一國の君主の居る都市」といふ觀念を胸に浮べる。將軍といへば「大中少將をいふもの」といふ事を悟る。つまり語其物に內容がある、同種の物に共通した意味がある。所で東郷といひ東京といふ Proper Noun（固有名詞）の方にはそんな內容がない、共通の意味がない、問者の言はるゝ通り、東郷といふ名前の人は澤山あるが、決して其人々に共通の性質があるといふ譯はない、佛領の東京と日本の東京と同種のものといふてはない、唯偶然相同じき名が附いて居るといふまで、東郷といふ名を聞けば、學校の腕白者の東郷も、村の東郷爺も大佐の東郷も大將の東郷も一樣に同じ內容、共通の意義ありとは決して言はれぬ。所が Common Noun（普通名詞）の方は先きにも言つた通り、唯其語を聞けば旣に其同種類に共通の觀念が胸に浮ぶ、又實際同一の Common Name（共通の名）を持つ物には總て共通の性質がある。犬といへば黑犬、白犬、洋犬、和犬、大きい犬、小さい犬色々あるが、併し其間に全體の犬なる外形と內容の共通した點を持て居る。又其種類以外のもの例へば猫や鼠とは全然同一でない外形も內容も持つて居る。Common Noun は斯く同一の性質を有するもの全體に通有の名で、Proper Noun は全然他に關係なく其物一個に特に附く名である。されば之れで同一の名が二つ以上あるといふ單なる理由で Proper Noun（固有名詞）も矢張 Common Noun（普通名詞）の一部だといふ事は全然

誤解であるといふことが解つたであらう。

2. 最も普通の Proper Nouns.

凡に Proper Noun とは如何なる Noun を指すか、其最も普通なるものを列擧して見よう。

1. 人の名。—姓も名もあざなも總ていふ。

2. 土地の名。—國名も都市の名も、山の名、川の名、海の名、島の名總て土地に屬する一切の名をいふ。

3. 星の名。—例へば Mars（火星）, Mercury（水星）, Jupiter（木星）, Venus（金星）, Saturn（土星）の類。唯 earth（地球）, moon（月）, sun（太陽）は近頃 Common Noun として取扱ひ小文字で書き始める（Proper は必ず大文字で書き出す）ことになつて居る。これは此三語は始終遣ふ語である所から大文字で書く手數を省きいつの頃よりか小文字で書き出した所からつひ Common の部に入ることゝなつたのであらう。本來は Proper であつた事は勿論である。

4. 七曜日の名、月の名、祭日の名。—例へば Sunday（日曜日）, Monday（月曜日）, March（三月）, April（四月）, The Emperor's Birthday（天長節）, The Kigensetsu（紀元節）, The Christmas（クリスマス、基督降誕祭）の類である。但し季節の名（spring, summer, autumn,

mārş（マーズ） mĕr'cu-rȳ（まーキュリ） jū'pĭ-tĕr（ぢューピタ） vē'nus（ヴィーナス） sāt'ūrn（さタン） ēarth（アース） sŭn（サン） mōōn（ムーン） sūn'day（さンデ） mŏn'day（まンデ） märch（マーチ） ā'prĭl（えィプリル） the ĕm'pĕr-ōr's bīrth'dāy（ジ、えムペラズ、ばースデ）
chrĭst'más（クリスマス） spring（スプリング） sŭm'mĕr（さムマ） ȧ'tŭmn（おータム）

winter）や普通の日の名（the first day=一日 the tenth day 二十日）の如きは總て Common の方であるから混交してはならぬ。以上の Proper Noun は總て前にも鳥渡言つた通り必ず capital letter（大文字）で書き始めねばならぬ。この大文字で書き始めるといふことは Proper Noun 共通の一要件である。所が次の二つは Proper Noun であつて、而かも何故か大文字で書き始むることを必ずしも要求しない、即ち大文字で書き出しても、Common 同樣小文字の儘でも何れでもよいといふ習慣になつて居る。その二つといふは

5. 學問の名。—例へば algebra（代數）, chemistry（化學）, mathematics（數學）, gymnastic（體操）の類。

6. 病氣の名。—例へば cholera（コレラ） diphtheria（ジフテリヤ）, typhus（チブス）, influenza（インフリユエンザ）の類。

此外學校會社の名、官職名、書籍新聞雜誌の名、國民、國語、宗教の名、船舶の名等 Proper Noun の種類は澤山あるが、總て例示せぬ。唯上の 5 と 6 の二種の外は總て大文字で書き始めるといふ事を忘れてはならぬ。

* * * * * * *

win'tĕr（うィンタ） the fĭrst dāy（ザ、ファースト、デェィ） the tĕnth dāy（ザ、テンス、デェィ） căp'ĭ-tăl lĕt'tĕr（かピタルれッタ） ăl'ge-brȧ（あルジブラ） chĕm'ĭs-trȳ（けミストリ） măth-e-măt'ĭcs（マスィまティックス） ġym-năs'tĭc（ジムなスティック） chŏl'e-ra（こンラ） dĭph-thē'rĭ-a（ディフてィーリア） tȳ'phŭs（たィファス） ĭn-flu-ĕn'zȧ（インフリュえンザ）

3. 複數の Proper Nouns.

以上の說明で御了解の通り Proper Noun（固有名詞）は總て一個の人又は物に附する特有の名であるから、從て Proper Noun は總て單數（數一つ）であつて、複數のある道理はない。

所がこゝに例外とでも言へばよいか、複數の形を有する固有名詞が若干ある。それは

1. 國の集り、山の集り（連山）、島の集り（群島）等總て二つ以上のものが寄つて一つの名となつて居るものは複數の形にする。例へば、

The United States of America（亞米利加合衆國）, the Himalayas（ヒマラヤ連山）, the Philippines（フィリピン群島）。

2. 家族全體を指す場合、宗教徒全體を指す場合など多數の集合して一つの名をなすもの（これは 1 と同一の項に入れてもよいが、1 は人間以外のもの、これは人間に關するものと便利の爲め分けたのである）。例へば、

The Tokugawas（德川家、德川の一門全體）, the Christians（耶蘇教徒總體）, the Buddhists（佛教徒全體）。

3. 「……といふ名前の人」と言ふ時、例へば I have three Itos among my friends.（僕の友人に三人伊藤がある）の Itos の類。

the U-nit'ed Stätes ŏf A-mĕr'i-ca（ザ、ユナイテッド、スティツ、オヴ、アメリカ） him-ä'lä-yaş（ヒマーラーヤズ） Phil'ip-pīneş（ふィリップィンズ） christ'ianş（クリスチャンズ） Bud'dhists（ぶーディスツ） a-mong'（アまング） friĕndş（フレンヅ）

4. Proper Nouns と Articles (冠詞)

本來の性質より言へば Proper Noun は特別の一個の名であるから、Article（冠詞）を附ける必要は全然ないのである。何故といふに a や an は（或る一つ）といふ意味だから a Tokyo, an Akamatsu などいふは全然沒常識になる。東京は日本の首府唯一無二のもの、これに a を附けて「或る一つの東京」といふことのあるべき筈がない、an Akamatsu「或る一人の赤松」と人間の名前に an も變だ。又今一つの冠詞 the の方にしても、これも this とか that に似て「あの」「この」といふ意味の語だから the Tokyo, the Togo Heihachiro などいへば「この東京」「あの東郷平八郎」といふ意味になつて、何だか他にも東京や東郷平八郎がある樣に聞える、頗る變妙である。

所が茲に Proper Noun（固有名詞）にも a, an 又は the を附けてよいといふ例外の場合が澤山あるのである。

1. Proper Noun が Common Noun（普通名詞）の意味に用ゐらる時、例へば

Japan is **the England** of East.

〔日本は東洋の英國だ〕。

I hope to become **an Edison.**

〔僕はエディスンになりたい〕。

これは詳しく言へば「日本は東洋の英國の樣な國だ」「エディスンの樣な發明家になりたい」といふ意味で、

En'glānd（いングランド） ēast（イースト）東洋 hōpe（ホウプ）望む。 be cōme'（ビかム）なる。 Ed'i-son（えディスン）

England や Edison は普通の英國、エディスン（人名）といふ Proper Noun の意味より轉じて 國，發明家といふ Common Noun（普通名詞）になつてしまつて居るのである。所で Common Noun の事は後章に詳しく説明するが單數には常に Article（冠詞）を要する語であるから、斯くこれ等にも an 又は the をそれぞれ意味によつて附けることゝなつたのである。尙ほ例を示すと。

Osaka is **the Manchester** of Japan.

〔大阪は日本のマンチェスタである〕

これは大阪はマンチェスタの英國に於けるが如く日本に於ける最大の製造市であるとの意味。

This general is a **Kato Kiyomasa** of Meiji.

〔此將軍は明治の加藤清正だ〕。

加藤清正の如き名將だの意。

尙ほ斯んな風に Common Noun（普通名詞）の樣に用ゐらるゝ場合には Proper Noun も又 plural number（複數）の形を採つて次の例の如くする場合も澤山出來る。

I hope there may be many future Togos among you.

〔私は諸君の間より未來の東郷の多く出てん事を望む〕。

東郷の樣な名將が多く出でん事を望むの意。

Alps on Alps arose in his path.

〔アルプスの上にアルプスが彼の進路に起つた〕。

Măn'chĕs-tĕr（まンチェスタ） gĕn'ĕr-ăl（ぢェナラル）將軍。 plū'răl mŭm'-bĕr（プリューラル、なムバ） māy bē（メィビー） 出來よう。 man'y（めニィ）多くの。 fū'ture（ふューチュア） 未來の。 Alps（アルプス）山名 a-rōse'（アろゥズ）起つた pāth（パース）道

アルプス山の樣な困難が相繼いで起つたの意。

2. 或る家族、國民、宗教徒の一人といふことを表はす場合には Proper Noun に Indefinite Article（不定冠詞）を附ける。

例へば

His father is a Tokugawa, and his mother a Kujō.

〔彼の父は德川家の一人で母は九條家の一人だ〕。

I am a Japanese and a Christian.

〔僕は日本人（の一人）で基督教徒（の一人）だ〕。

He is a Frenchman, and his wife is an American.

〔彼は佛人（の一人）で妻は米人（の一人）だ〕。

3. 「……といふ人」例へば「彼は山田といふ人です」などいふ時は Proper Noun に Indefinite Article（不定冠詞）を附けて

He is a Yamada.

といひ、又「私は阿部といふものです」を

I am an Abe.

といふ。尙ほこれは 2 の（家族の一人）といふ方の「彼は山田家の一人です」「私は阿部家の者です」といふ意味にもとれる。

併しこれが天下に有名な、よく人に知れて居る人、或はよく話などが出て對手の人が其名前を屢々聞いて居る人なれば

ĭn-dĕf'ĭ-nĭte är'tĭ-cle（インでフィニット、あーティクル） fā'thēr（ふァーザ）父 mŏth'ēr（まザ）母 Frĕnch'man（フれンチマン）佛蘭西人。 wīfe（ワィフ）妻。 A-mĕr'ĭ-căn（アめリカン）米國人

He is Yamada.

I am Abe.

と普通にしてよい。

それから若し以前に話の出て來たあの山田さんなどいふ時は Definite Article（定冠詞）を附けて。

This is the Mr. Yamada I referred to the other day.

〔先日鳥渡お話した山田さんは此方です〕。

などいふ事もある。

4. Proper Noun の前に Adjective（形容詞）を附けると必ず其前に Definite Article（定冠詞）を添えねばならぬ。

例へば:—The *famous* Tōgō（有名なる東郷），the *ambitious* Hideyoshi（大望のある秀吉），the *dauntless* Nogi（勇敢なる乃木），the *clever* Taro（悧巧な太郎），the *diligent* Jiro（勉強な次郎）の樣に斜體の語は總て Adjective（形容詞）だから、次は Proper Noun であるが總て the を附ける、若しその Adjective（形容詞）がなくば無論 the も不用になる。

例外:一所が次に列擧する七つの Adjectives（形容詞）は上の規則に從はず、全然 the を附けない。

old（老たる），young（若き），little（小き），dear（親しき），good（よき），honest（正直なる），poor（憐れなる、貧乏なる）。だから

dĕf'i-nite är'ti-cle（デフィニット、あーティクル） Mr.（mĭs'tĕr みスタの略字） re-fĕrred'（りふァード）話した the ŏth'ĕr dāy（ジ、あザ、デェィ）先日 fā'moŭs（ふェィマス）有名なる。 am-bi'tious（アムびシャス）大望ある dauntless（どーントレス）物に恐れぬ clĕv'ĕr（クれッヴァ）悧巧なる dil'i-gent（ディリヂント）勉強家の ōld（オゥルド） yoŭng（ヤング） lit'tle（リットル） dēar（ディーア）

The old Togo, the young Hideyoshi とは言ふに及ばぬ、單に old Tōgō, young Hideyoshi でよい。〔尤もこれは Proper Noun の時で Common Noun（普通名詞）の時は old だつて young だつて總て Article の入用な事は勿論である、故に單に old man, young boy はいけない the old man, the young boy 等としなくてはならぬ〕。

5. 單に英語、日本語といふ時は English, Japanese と article のない儘でよいが「……といふ英語」「……の日本語」など、或る特殊の語を指す時は Definite Article（定冠詞）を其前に附けねばならぬ。

例へば

"Book" is the English for the Japanese "hon."

〔Book といふは本といふ日本語に相當する英語だ〕。

What is the German for the French "est"?

〔est といふ佛語を獨語では何といひますか〕。

此等は「……といふ語」と或る特別の語を指すからである。併し一般の何々語といふ時は Article は全然要らぬ。

He speaks Russian and Chinese.

〔彼は露語と清語を話す〕。

gŏod（グッド） hŏn'est（おネスト） pōor（プーア） bŏok（ブック） fôr（フォー） Gĕr'mân（ヂァーマン）獨逸語 Frĕnch（フレンチ）佛蘭西語 Rŭs'sian（らッシャン）露西亞語 Chī-nēse'（チャィにィーズ）支那語

序だから言つて置くが、「何々國語」といふと「何々國人」といふと「何々國の」と Adjective に遣ふと總て皆同じ語である、即ち

Japanese は 日本語、日本人、日本の
Chinese は 支那語、支那人、支那の
Korean は 朝鮮語、朝鮮人、朝鮮の
Russian は 露西亞語、露西亞人、露西亞の
German は 獨逸語、獨逸人、獨逸の

と三樣に通用する、唯英と佛だけは「人」の時に限り man（單數は）men（複數は）を語尾に附ける。即ち

English は 英語、英國の
Englishman (Englishmen) 英國人
French は 佛語、佛國の
Frenchman (Frenchmen) 佛國人となる。

6. 尙ほ次の Proper Noun には總て Definite Article を附けねばならぬ。

(*a*). 川の名。川の名を言ふには特に River といふ語を附けずとも有名な河ならば唯其名だけをいつてもよいが、その際でも決して Article は省けぬ。つまり川の書き方は次の三樣あつて、適宜何の方式を採つてもよいのである。

(1) **The** River Sumida, **the** River Tone.
(2) **The** Sumida River, **the** Tone River.
(3) **The** Sumida, **the** Tone.

Ko-rē'an（コリーアン） Riv'ĕr（リバ）河

(*b*). 大洋、海、灣、海峽の名。この書き方にも次の如く二通りあるものがある。併し次の (1) と (2) と兩方にないものは書き方が一つと定まつて居るのだ。併し何れにしても the の入用なのに注意して頂きたい。

(1) **The** Sea of Japan（日本海）, **the** Gulf of Mexico（メキシコ灣）, **the** Strait of Gibraltar（ジブラルタルの海峽）

(2) **The** Pacific Ocean（太平洋）, **the** Japan Sea（日本海）, **the** Mexican Gulf（メキシコ灣）, **the** Tokyo Bay（東京灣 bay よりは gulf は通例大きなものに用う）, 此んなに水に關したものは總て the を附けるに獨り Lake（湖）には the がいらない、何故いらぬといふ理屈はない、唯習慣で遣はないのであらうが。で琵琶湖は Biwa Lake でよい、併し **the** Lake of Biwa といふ風に書いてもよい、其時は the がいる。

(*c*). 船や艦隊の名。**the** Mikasa（三笠艦）, **the** Tosa-maru（土佐丸）, **the** Standing Squadron（常備艦隊）といふ風に總て the を附ける。

(*d*) 公設の建築物の名。例へば學校、官衙、病院、神社、佛閣、劇場などは **the** Tokyo Higher Normal School

sē*a*（スィー）海 gŭlf（ガルフ）灣 Mĕx'i-co（めッキスィコ） strā*i*t（ストレイト）海峽 Gĭ-brăl'tăr（ヂィブらルタ） Pa-çĭf'ĭc（パすィフィック） ō'çean（おゥシャン） Mĕx'i-can（めキシカン）メキシコの bā*y*（ベィ） lāk*e*（レィク） stănd'ing squad'ron（すたンディング、スこッドロン）Hig*h*'ĕr Nôr'mal sc*h*ōōl（はィア、のーマル、スクール）

（東京高等師範學校），the Home Department（內務省），the Juntendō Hospital（順天堂病院），the Yasukuni Shrine（靖國神社），the Zōjōji（增上寺），the Kabuki-za（歌舞伎座）の樣に悉く the がいる。公園や停車場などは the Hibiya Park（日比谷公園），the Shimbashi Station（新橋停車場）とするが正式だが、時に此の二つに限り the を略する人もある。

(*e*) 書籍、新聞、雜誌の名。例へば the Kokugo-tokuhon（國語讀本），the Jiji-shimpō（時事新報），the Eigo-kenkyū（英語研究）といふ風にこれ等も the が要る。唯人名や地名を直ちに其名にしてあるものに限り the を略するが普通になつて居る。だからいつか富山房といふ書肆から「漢口」といふ支那の地名を名にした本が出た、又有樂社といふ本屋から小說不如歸の英譯を「浪子」といふ其小說の主人公を標題にして出した。是等は "Kankō," "Namiko" でよい、the はいらぬ。

(*f*) Emperor（皇帝），Empress（皇后）の御名。例へば the Emperor William, the Emprss Josephine とこれも矢張 the が要る、併し king（王）及び queen（女王）は直ぐ其次に名を持つて來れば King George, Queen Victoria の樣に the はいらぬ、但それも of を遣つては

Hōs'pī-tal（ほスピタル） Shrīne（シライン） Hōme De-pärt'ment（ホウム、ディパートメント） pärk（パーク） stā'tion（スてィシヤン） Ĕm'pĕr-ŏr（えムペラ） Ĕm'prĕss（えムプレス） Wil'lī-am（うィリアム） Jō'sĕph-īne（ヂョウセフィン） kĭng（キング） quēen（クウィーン） Geôrge（ヂョージ） Vic-tō'rī-a（ヴィクとウリア）

the King of England, the Queen of Spain などゝするが正式である。

(*g*) 複數の Proper Noun の時（第 18 頁參照）。此時も the がいる。The United States of America（アメリカ合衆國）the Tokugawas（德川家）等の如く。又 the Alps（アルプス連山），the Philippines（フィリピン群島）の如く。併し富士山の如き隱岐の島の如き孤山や孤島には無論 the はいらぬ Mount Fuji（又は Fuji Mount），Oki Island (Island of Oki) の如く。

* * * * * * *

以上て Proper Noun の話はおしまひとする。隨分面倒な規則もあつたから、よく讀みかへして大抵は暗誦する樣にし玉へ。尙ほ便宜の爲め一覽表をこしらへて次に出して置かう。

I. Proper Noun の一般の性質

1. 複數にはならぬ、 2. 冠詞を附けぬ。
3. 大文字で書き出す。

II. Proper Noun の中には特別のものもある

1. 複數になるもの
   1. 國、山、島等の集りを指す時
   2. 家族宗徒等の全體を指す時
   3. 「……といふ人」といふ時

Spāin（スペイン） mount（マウント）山 īs'land（あィランド）

2, 冠詞を附けるもの
- I. A (an) を附けるもの
  - 1. 普通名詞の樣に遣ふ時
  - 2. 家族、宗徒、國民等の一人（いちにんと）いふ時
  - 3. 「……といふ人」といふ時
- II. The を附けるもの
  - 1. 普通名詞の樣に遣ふ時
  - 2. 形容詞の附く時（例外あり）
  - 3. 特殊の國語を指す時
  - 4. 次の名の時 (*a*) 川, (*b*), 海等, (*c*) 船等, (*d*) 學校等, (*e*) 書物等, (*f*) 皇帝等, (*g*) 複數のもの

3. 小文字でも書くもの
- 1. 學科の名
- 2. 病氣の名

II. Common Noun (普通名詞)

1. Common Noun の性質

Common Noun（普通名詞）は一名 Class-name（種類の名）といふ位で、一種類全體の物を總稱して呼ぶ時の名稱である。同時にまた其種類の中の物でさへあれば個々別々の物にも其名稱を附けることが出來る。例へば student（學生）といふ Common Noun は一方には汎く學生社會全般を總稱し「總ての學生」といふ意味に遣はれる、されば其際は大學生も中學生も其他種々の學校生徒も總ての student なる一語の下に總稱せられること

Class'-name（クラスネイム） stū'dent（スチューデント）

になる。所でこれを裏面より言ひ換へると、苟も學生である者は大學生でも中學生でも誰れでもこの student といふ語を遣ふことが出來る、即ち student なる語は、一般に何れの student にも適用することが出來る。これが Common Noun は一面には「其種類全體」といふ意に用ゐられ、一面其種類中の物一個々々別々を示すにも用ゐられる證據である。自分の知る或る一疋の犬も dog ならば、「犬は忠實なものだ」などいふ概念的の犬も dog でよい、つまり Common Noun は兩面の意味に遣はれるのである。

又 Common Noun は Proper Noun と違つて、一定の意味ある語である。これは Proper Noun の時にも說明した通りだが、例へば Proper Noun の Togo は、同じ東鄕といふ名前の人に普通に適用されはするが、其 Togo といふ語に何等の意味があるのでないから、敢て人間と限らず鳥獸にも器具にも何にでも此名を附けて差支へはない、現に東鄕大將の名聲を慕ふ西洋人には自分の愛犬を Togo と名けたものもある、橋の名や會堂の名に Togo を遣つたものもあると聞く、著者の近傍の浴湯（東京麴町有樂町に在り）は現に麗々しく看板を揚げて斯う命名してある、曰く『東鄕湯』!

所が Common Noun の方はさう勝手には適用できぬ、例へば student といふ名は一定の意味ある者でなくては名のることができぬ、即ち第一人間たるもの、第二、一定の學校に一定の學科を學ぶもの、此二箇條の資格なき者は student と名付くる資格なき者である。だから幾ら

學校に居る者でも其處の犬や猫は人間でないから student とはいはれぬ、人間でも小使や給仕は一定の學科を學ぶ者でないから student とはいはれぬ。其代り人間であつて一定の學校一定の學科を學ぶ者は、男でも女でも、又如何な學校でも如何な學科でも差支ない、總て student といふ事が出來る。

されば Common Noun は Proper Noun と違ひ、語其物に一定の內容、意味があるといふのである。

何處の國の言葉でも其中最も數の多いのは Noun（名詞）で、其また Noun の中最も數の多いのは Common Noun である。全數の左樣……七八分は Common Noun と言つて差支はなからう。

定義—**A Common Noun is the name of a class of persons or things.**

〔普通名詞は人又は物の種類の名なり〕。

2. Common Noun と 數

Common Noun は Proper Noun の樣に、或は特別の物の外は Plural Number（複數）にならぬといふ樣のことはない。どれもこれも苟も Common Noun と名の付く語は總て單複兩樣の數に變化する。詳しくは次の Article との關係の所に併せ說明しよう。

3. Common Noun と Article（冠詞）

Proper Noun は Article を附けぬを通例としたが、それに反し Common Noun は之を附けるを通則とする、即

ち或る意味の複數の外は必ず the 又は a, an の冠詞を伴はねばならぬのである。

1. Indefinte Article (a 又は an) を附ける場合。これは Singular Number（單數）の Common Noun の時に限る。何故といふに a 又は an は元來が one といふ語から轉訛したもので「一つ」といふ意味は何處までも含んで居る。だから Plural Number（複數）の Noun に附けて a dogs だの an oxen などゝ遣つては矛盾の極になつてしまう。

所で Singular Number（單數）の Common Noun に Indefinite Article（不定冠詞）を附けるとどういふ意味になるかといふに。

(*a*) 「或る一つの」といふ意味になる、例へば

Here is a boy.

〔此處に小供が一人居る〕

といふ文では、小供は二人以上は居ぬ、一人だといふことを示す、それと同時に其小供は何んな小供かは全然示して居ぬ、何處の小供か、何んな小供かそれ等は頓と解らないのである。

即ち boy といふ class（種類）の總體中より一人を引きぬいて來た事は來たのであるが、誰れを引きぬいたかそれは解らぬのである。

(*b*) 「……はどれもどれも」言ひ換へると「……は總て」と class（種類）全體を示すに a や an を Common Noun に附したものが遣はれることがある。例へば

sĭn′-gu-lăr（スィンギュラ）

A dog is a faithful animal.

〔犬はどの犬もどの犬も忠實な動物だ＝犬は（總て）忠實な動物だ〕。

これは丁度蜜柑を幾つも風呂敷に包んで「此内の蜜柑はどれもどれも上等でござい」といへば、つまりは「皆上等でござい」といふと同じ意味になる、それと同じで dog の總體の中より一つ一つ論じて結局全體をいふことになつたのであるから。

Common Noun に a 又は an を附けて出來る意味は上の二つである。で、英語を讀み又は聞くに當つて A..... とあればそれは上の (*a*) の「或る一つ」の用法か、但しは (*b*) の總體の方か、それは前後の關係などを參酌して自分の頭で考へねばならぬ、形の上では (*a*) も (*b*) も同樣であるから。

序ながら a と an との區別を一言して置く。これは article（冠詞）の篇で詳說する筈ではあるが……。

意味は a も an も全然同一である、少しも異る點はない、唯母音で始まる語に附く時は總て an を遣ひ、其他は a を遣ふまでのことである。だから

ax（斧） egg（卵） inkstand（インキ壺） ox（牡牛） umbrella（蝙蝠傘）

の如き母音で始まる Nouns は勿論、

---

fāith'fụl（ふェイスフル）忠實なる　ăn'ĭ-măl（あニィマル）動物
ăx（アックス） ĕgg（エッグ） ĭnk'stand（いンクスタンド） ŏx（オックス） ŭm-brĕl'lă（アンブれラ）

hour（時） honour（名譽）

の如き綴字は h で始まつても、h は silent（消字）で實際は母音 o で始まるものは總て an の方を遣ふ。併し

house（家） horse（馬）

の如き h を發音するものは勿論

use（入用） one（物）

の如き綴字は母音字で始まつても、實際の發音が ūs*e*＝yụs, on*e*＝wŭn の如く母音で始らぬものは總て a の方を遣ふ。

2. Definite Article (the) を附ける場合。

the といふ語は元來が that の變化したもので、「この」「あの」「その」又は「これらの」「あれらの」「それらの」などいふ意味を持つて居る。だから單複何れの Common Noun（普通名詞）にも附けられる。a や an の樣に Singular（單數）でなくては附けられぬといふ狹いのとは違ふ。

Common Noun に the を附けると a 又は an と同樣次の二通りの意味が出來る。

(*a*) 前後の關係で、其Common Noun の示す物が何物かと聞き手に明らかに解る時は必ず其物の前に the を附ける。

例へば、I have a watch. This is the watch.

〔私は時計がある、これが（その）時計です〕。

の文に於て始めの watch に a を附ける譯はまだ聞き手が

---

*h*our（アゥア） *h*ŏn'oŭr（おナ） sī'lent（さィレント） h.ouse（ハゥス） hôrse（ホース） ūse（ユース） one（wŏn ワン） wạtch（ウォッチ）

何んな時計か又時計を私が持つか持たぬかも何もかも少しも知らないで居るからである。所がこの I have a watch. といふことで時計の話は一度出た事になるから、「それ其時計」はといつても聞き手も了解する樣になつて居る、だから、後の watch には the が附いて居るのである。

斯んな風に一度話しさへ出れば其後は總て Common Noun には the を附ける、單數でも複數でも。

(b) 「……といふものは」と class（種類）全體を指す時に the を遣ふ。これは a（又は an）の (b) の意義と全然同一である。

A dog is a faithful animal.

〔犬はどれもどれも忠實な動物だ〕。

＝The dog is a faithful animal.

〔犬といふものは忠實な動物だ〕。

結局 a（又は an）をつけても the を附けても同じ意味になる。尙ほ斯んな風に class（種類）全體を指すには、今一つ書き方がある、それは

Dogs are faithful animals.

〔犬は總て忠實な動物だ〕。

の樣に Common Noun を Plural（複數）の形にして Article（冠詞）を全然附けないでも矢張、同じ總體のものを指す事になる。丁度風呂敷包の蜜柑を指して。

此中の蜜柑はどれもどれも悉く……といふ意味が a

（又は an）で

包を解いてつ一宛見せて、これもあれも悉く……といふ意味が the

包みの儘そつくり此包の蜜柑は皆……といふ意味が冠詞なしの複數

である。だから結局其三つの書き方は同一の事を意味することになる。

念のため言つて置くが Common Noun を複數にした文はそれに伴ふ Verb（動詞）も他の a や the を附けた單數の文と違つて are とし、其跡も a faithful animal の a を削り animals と複數にせねばならぬから注意せねばならぬ。尙ほ別の例を一つ擧げると

A *lion*, like a *cat* and a *tiger*, sleeps during the day.

The *lion*, like the *cat* and the *tiger*, sleeps during the day.

*Lion*s, like *cat*s and *tiger*s, sleep during the day.

（總ての）獅子は（總ての）猫や（總ての）虎の樣に日中は眠る。

例外　所がこゝにこの規則通り行かぬ例外の語がある。それは man（人、又は男の意）と woman（女）といふ語で、この二語だけは全體の人又は男、女を示すに a や the を附けず

---

lī'on（ライオン）獅子　like（ライク）……の樣に　căt（キャット）猫　tī'gēr（タイガ）　slēep（スリープ）眠る　dū'ring the dāy（デューリング、ザ、デイ）日中は

Man is mortal.

〔總て人間は死すべきものである〕。

Woman is nobler than *man* in many respects.

〔（總て）女は多くの點に於て（總て）男より尊きものである〕。

即ち上の man や woman はそれで class 全體を指して居るのである、其れに a も the もいらない、尤も

Men are mortal.

Women are nabler than men in many respects.

と複數にした分は差支ない、意味は前の單數と少しも異らぬ。

* * * * * * *

Article（冠詞）と Common Noun（普通名詞）との關係はまだ幾らも特殊のものがある、細く話せばまだ々々幾箇條もある。併しそれらは總て Article の章に説明する事にしよう。そして次に以上説明した所だけを二三例によつて練習して見よう。

A bird flies.

この文は (*a*) 鳥が一羽飛んで居る、何んな鳥とは明示せぬが兎に角一羽飛て居る。といふ意味と (*b*) 鳥はどれもどれも飛ぶ。と鳥全體の事を示す意味と二つに解釋出來る。

---

măn（マン） wọm'ăn（ゥマン） môr'tăl（もータル）死すべきもの nō'blēr（のゥブラ）一層尊き thăn（ザン）……よりは in măn'y re-spĕct' （イン、めニィ、リスペクト）多くの點に於て

The bird flies.

この文も (*a*) あの鳥が一羽飛んで居る、と聞く人にも其指す鳥がどれか解つて居て其動作を示す意味と、(*b*) 鳥といふものは飛ぶものだ。と鳥全體を指す意味と二つに解釋が出來る。

以上は bird と單數の Common Noun だが、次には複數にして birds とすると、a birds とは無論言はれぬが、

The birds fly.

とはいへる。この文は「あの鳥共は飛んで居る」と聽く人にも其指す鳥がどれと解つて居る、其二羽以上の鳥の今の現在を示す意味、これ一つにしか解釋は出來ぬ。

Birds fly.

斯んなに Article（冠詞）なしの複數は「鳥は總て飛ぶものだ」と鳥全體の事をいふのである。これもこれ一つしか外の意味には解釋は出來ぬ。Article（冠詞）と Common Noun（普通名詞）との關係は先づこんなことで一段落として置かう。同じ文の二樣の意味に解せらるゝものは前にも言つた通り、前後の關係よりして判斷せねばならぬのである。

* * * * * * *

これて Common Noun の説明も濟んだから、Proper Noun の時の樣に次に一覽表をこしらへて載せて置かう。

I. Common Noun の一般の性質

1. 複數になる。　2. 冠詞を必ず附ける。

3. 大文字で書き出す事はいらぬ。

II. Common Noun に冠詞を附けると……
これは直ぐ前に例によつて詳しく示した儘だから、重ねて示す必要はあるまい。

III. Collective Noun (集合名詞)

1. Collective Noun の性質

Collective Noun（集合名詞）は始め Noun の分類の時にも述べた通り、文法家によつては Common Noun の一種とする位て、其性質は著るしく Common Noun に似て居る、異る點は、Common Noun が個々別々なる單一の物體を指すものなるに反し、Collective Noun は個々別々なる同種類の Common Noun が幾つも集合して一團體を作り、それらが一體として動作をする物體を指すといふ點にある。例へば man（男）, woman（女）, boy（男兒）, girl（女兒）は何れも Common Noun であるが、この四つを引くるめて吾々はこれを人々即ち英語で people といふ、されば people といふ一語の中には澤山の男女老幼が寄り集まつて一團體となつて居るのである。また father（父）, mother（母）, sons（息子）, daughters（息女）は何れも Common Noun であるが、之を總稱して吾々は之を家族即ち family といふ。だから family といふ一語の中にも澤山の男女老幼が含まれて居る。

pēo'plē（ぴーブル） sŏnz（サンズ） dą̆ngh'tērz（どータズ） făm'ĭ-ly（ふァミリ）

斯んな風に同じ種類の Common Noun が一團體を作つたもの、これを名けて Collective Noun（集合名詞）といふのである。元來 Collective といふ語は collect（寄り集る）といふ語から出來たので、つまり多數の同種類の Common Nouns が collect して出來る居るから Collective Noun といふ名が出來たのである。

定義—**Collective Noun is the name of a collection of persons or things.**

〔集合名詞は人又は物の寄り集りの名なり〕。

2. 最も普通の Collective Noun の例

上出の people, family の外最も普通の Collective Noun の例を列擧して見やう

1. fleet（艦隊）—これは例へば三笠、富士、薩摩、高砂と幾隻の戰鬪艦巡洋艦水雷艇等の寄り集つて一つの團體をなすものゝ名だから Collective Noun である。

2. navy（海軍）—これは大將、中將、少將以下數多の士官兵卒が寄り集つて一つの團體となつたものであるから Collective Noun である。

3. army（陸軍）—上の navy と同樣。

4. nation（國民）—貴賤上下の老幼男女幾億乃幾十萬と寄り集つた團體の名だから無論 Collective Noun だ。

5. crew（船員）, 6. clan（黨派）, 7. mob（一揆）,

cŏl-lĕct'（コれクト） col-lĕct'ion（コれクシャン）集合物 flēet（フリート） nā'vy（れィヴィ） ärr'mȳ（あーミ） nā'tion（れィシャン） crew（クルー） clăn（クラン） mŏb（モップ）

8. infantry (步兵), 9. cavalry (騎兵), 10. assembly (會衆), 11. parliament (議會), 12. committee (委員), 13. cattle (家畜), 14. poultry (家禽), 15. peasantry (農民), 16. nobility (貴族), 17. jury (陪審判事), 18. furniture (家具), 19. clothing (衣服), 20. merchandise (商品). これ等は別段理由を述べずとも少しく考へたら Collective たるわけは解るであらう。

いや、こんな風に數へ立てたらまだまだ澤山ある、恐らくまだ三十や五十位はあるだらう。併し以上の語を列擧しただけで Collective Noun の何物たるかゞ解つたであらうと思ふから、さまではと此上數へ立てぬ事にした。

3. Collective Noun の種類

Collective Noun には二つの用法がある。從て Collective Noun を更に二種に區別することが出來る。

其一つは單數の意味に用ゐられ、團體中のもの總てが異體同心になつて行動する時で、他の一つは複數の意味に用ゐられ、團體中の個々別々が各自の行動をする時である。次の例を見よ。

in-fănt'ry (インふァントリ) căv'al-ry (かヴァルリ) as-sĕm'blȳ (アッセンブリ) pär'lia-ment (ぱーリァメント) com-mĭt'tee (コムみティ) căt'tle (かットル) pōult'rȳ (ぽゥルトリ) pĕas'ant-rȳ (ペザントリ) no-bĭl-'ĭ-tȳ (ノびリティ) jū'rȳ (ぢューリ) fūr'nĭ-ture (ふァーニィチャ) clōth'ing (クろゥズィンク) mĕr'chan-dĭse (まーチャンダィズ)

單數の意味の例

1. The **cavalry** *was* victorious. 〔騎兵が勝つた〕。
騎兵の一團を一つの物と見て居る。

2. My **family** *is* small.
〔私の家族は小さい、私は小家族だ〕。
家族を一團として見る。

3. The **assembly** *was* of the same opinion.
〔會衆は同意見であつた〕。
會衆全體を一團と見たもの。

複數の意味の例

The **cavarly** *were* taking dinner. 〔騎兵が飯を食つて居た〕。
一人々々騎兵に就き言つて居る。

My **family** *are* all well.
〔私の家族は皆達者だ〕。
家族の人々一人々々に就き言つて居る。

The **assembly** *were* different in their several opinions.
〔會衆は銘々の意見が違つて居た〕。
會衆を一個々々に就き言ふもの。

こんな風に同じ Collective Noun で同じ形でも一方はそれを一個のものとして見、一方は其中のもの一つ々々に就きに見るとによつて意味が違つて來る。從つて上の例に見る通りそれに伴ふ動詞も一方は is, was などゝ單數で、一方は are, were などゝ複數である。

Collective Noun には斯く二種の性質があるから、之を區別するため、一方複數の意味の方を別に Noun of Multitude (群聚名詞) と名を附け、一方の單數の意味の

vĭc-tō'rĭ-ŏus (ヴィクとゥリアス) 戰に勝てる tăk'ing dĭn'nĕr (てィキンク、でィンナ) 雲飯を食つて smal' (スモール) 小さい wĕl' (ゥェル) 健康で of the sāme o-pĭn'ion (オヴ、ザ、セィム、オぴニャン) 同一の意見で dif'fĕr-ent (でィファレント) ちがつて sĕv'rē-al (せヴァラル) 互の、各の mŭl'tĭ-tude (まルティテュード)

方をのみ Collective Noun（集合名詞）と呼ぶ文法家もある。併し本書には多數の文法家の意味通り兩方共 Collective Noun といふ名の下に一括することにして此後とても説明して行くから其心得で居てもらひたい。

4. Collective Noun と數及冠詞

以上の説明によつて見ても Collective Noun の内別に Noun of Multitude（群聚名詞）といふべき複數の意味のものは、いつもその語自らが複數だから、別段外に複數の形のある道理はない。例へば Common Noun の dog の複數の形は dogs と s を附けるが、これと同じ樣に Noun of Multitude の army を armies などする事はない、army 其れ自身で既に複數であるのだもの。

從て Article（冠詞）も a（又は an）を附ける場合は決してない。a や an は「一つ」の意味であり Noun of Multitude（群聚名詞）は複數の意味だから兩立する筈がない。唯 the の方は附けて差支ない、「あの」「この」と特に指す場合には遠慮なく附けてよい。

單數の意味の Collective Noun の方には單數の形と複數の形と兩方出來る。例へば日本國民を總稱して nation と單數でいふけれど、英國民、佛國民、獨國民等多くの國民を指す時は nations と當然複數にしてよい。第一軍、第二軍など多くの軍を指すには armies といふ。

從て Article（冠詞）は a（又は an）も the も何れも隨意に必要に應じて遣つて差支ない。

以上て Collective Noun の話も終局とし、例に依り一覽表を載せて置かう。

Collective Noun の性質—澤山の Common Nouns が寄り集つて一個の團體となつたものゝ總名。

Collective Noun
- 1. 單數の意味のもの、
  - 1. 複數になる。 2. 冠詞をつける。
- 2. 複數の意味のもの（Noun of Multitude ともいふ）。
  - 1. 複數に出來ぬ。 3. 不定冠詞はつけぬ。

上の 1. 2. 兩方とも大文字で書く事はいらぬ。

IV. Material Noun（物質名詞）

1. Material Noun の性質

Material Noun（物質名詞）は品物を造る材料になるものゝ名である。例へば tobacco（煙草）, iron（鐵）, stone（石）は material Noun である。其譯は tobacco（煙草）は之を材料として cigar（葉卷煙草）, cigarette（紙卷煙草）, long cut（刻煙草）や plug（板煙草）など種々の形の煙草を造る。iron（鐵）は之を材料にして rail（軌道）を造る stove（暖爐）を造る、iron-bridge（鐵橋）を造る、其他樣々の器具を造る。stone（石）は之を材料にして stone-building

to-băc′co（トばッコ） ī′ron（あィアン） stōne（ストゥン） çī-gär′（スィガー） çīg-ar-ĕt′e′（スィガれット） lŏng′-cŭt（ろングカット） plŭg（プラッグ） rāl（レィル） stōve（ストゥヴ） stōne-build′-ing（ストゥンびルティング）

（石造の建物）を建てる、pavement（敷石）にも step-stone（庭石）にも stone-bridge（石橋）にも其他種々の物に造る。斯んな風に品物を造る材料になる Noun（名詞）は總て之を Material Noun（物質名詞）といふのである。

Material Noun にはまだ次の樣な性質がある。

1. 一定の形がなく、且つ如何にそれを大きくし或は小さく切り裂き壞しても、矢張元來の性質を失はぬもの。例へば water（水）, beer（ビール）, gold（金）, silver,（銀）又は chalk（白堊）, ink（インキ）の如き物は一定の形がない、水は方圓の器に從ふといふ諺もある位だから勿論、beer（ビール）や ink（インキ）も其通り、gold（金）, silver（銀）も同樣延板にしても圓棒にしても貨幣にしても器具にしても時計にしても何にしても金は金、銀は銀である。併し金銀本來の形は如何といつても、そんな定まつた形はない、chalk（白堊）は敎場で遣ふものは圓棒の形をして居るが併しあれが白堊本來の形といふのでない、二つに割ても粉にしても白堊は白堊である。斯んな性質を有するものは皆 Material Noun の內に入れる。

前出の stone にも tobacco にも矢張此性質はある、小石のかけも鐵の屑も煙草の粉も矢張同じく stone, iron, tobacco である。

2. Material Noun に屬する品物は總て一つ二つと數を

pāv′ment（ペィヴメント） stĕp′-stōne（ステップストゥン） stōne′-brĭdge（ストゥンブリッヂ）
wa̤′tĕr（ォータ） bēer（ビーア） gōld（ゴゥルド） sil′vĕr（スィルヴァ）
cha̤′k（チョーク） i̤nk（インク）

數へることができぬ。それは其筈だ、上にいふ通り一定の形がないのだから、どれだけを一つと定めることが出來ない、從て數を數へる事の出來ぬのである。尤も水は一杯二杯、ビールは一瓶二瓶、金は一塊二塊、又は一斤二斤といふ風に數へられるといふ人もあらうが、それは人爲的に人間が勝手に基本を定めて數へ得らるゝ樣にしたもので、水本來の性質に何れだけの分量を一杯といひ、どれだけのビールを一瓶とし、どれだけの大さの金を一塊といふと定まつて居るのではない。鉢に一杯でも猪口に一杯でも大壺に一杯でも一杯は一杯、到底人爲的でない基本はない。

以上の三性質 (1) 他の物品を造る材料となり、(2) 一定の形なく、(3) 數へ得られぬ、といふ三性質の一つ又は二つ以上を備へて居る物の名は總て Material Noun である。

gold（金）は Material Noun だが gold coin（金貨）は Common Noun である。金貨は他の物品を造る材料とならぬ、形は定まつて居る、一個二個と數へられるからである。paper（紙）は Material だが book（本）は Common だ、paper は book や其他種々の品物の材料になり、製紙法次第如何樣の形にも出來、又一枚と數へる標準が判然せぬ、所が book の方はこれを材料にして他に品物を造るものでなく、一冊二冊と立派に數へられ、これを壞せ

coin（コィン） pā′pĕr（ペィパ）

ば、紙と表紙と綴絲とに分解されて、もう book とはいはれなくなる。又 tree（樹）は Common で wood（材木）は Material, clothes（着物）は Common で cloth（帛）は Material, fish（魚）は Common で同じ語 fish も（魚肉）の意味になれば Material になる。

併し Material Noun は總て以上の三性質を悉く備へねばならぬといふ譯ではない、其内の一二しか備へて居らぬものでも矢張 Material Noun と言はれる。例へば上の例に出た beer は (1) の性質は備へて居ぬ。即ち beer は材料になつて別の品物を造るものではない、併し (2) (3) の性質があるから Material だ。air（空氣）や gas（瓦斯）, smoke（煙）も (1) の性質はないが (2) (3) の性質があるから矢張 Material だ。尙ほ次に出す例によりよく考へて見玉へ。

定義—A Material Noun is the name of a material.
〔物質名詞は物質の名なり〕。

2. 最も普通なる Material Noun の例

(1) 品物の材料となるもの—例へば metal（金屬）, wood（材木）, timber（材木）, stone（石）, brick（煉瓦）, earth（土）, wool（羊毛）, hair（髪の毛）, ivory（象牙）, glass（硝子）, bone（骨）等。

---

bōōk（ブック） trēe（トリー） wŏŏd（ウッド） clōthes（クロウズ） clōth（クロス） fĭsh（フィッシ）
âir（エア） găs（ガス） smōke（スモウク）
mĕt'ăl（めタル） tĭm'bĕr（てィムバ） brĭck（ブリック） wŏŏl（ウール）

(2) 金屬及び化學的元素の類—例へば gold（金）, silver（銀）, iron（鐵）, copper（銅）, oxygen（酸素）, hydrogen（水素）, nitrogen（炭素）等。

(3) 食料品—例へば sugar（砂糖）, salt（鹽）, bread（パン）, rice（米）, wheat（麥）, meat（獸肉）, fish（魚肉）, soy（醬油）, cake（菓子）等。併し同じ食料品でも apple（林檎）, peach（桃）等果實の名や biscuit（ビスケット）の如き一定の形あるものは Common Noun.

(4) 液體及氣體の類—例へば water（水）, wine（葡萄酒）, beer（ビール）, oil（油）, gas（瓦斯）, smoke（煙）, air（空氣）等。

以上は眞の一端の例に過ぎぬ。但しこれで大抵 Material Noun とは何んなものかとの觀念は作れたであらう。

所で前にも烏渡言つた通り、同一の語も其遣ひ樣、其遣ふ際の意味の如何によつて Material でなく Common Noun になることが往々ある、だから一概に此語は Material と思ふと飛んだ間違が出來る事がある、實際に當つてよく其用法意味より考へて判斷せねばならぬ。次に二三の例を擧げて置く。

---

hâir（ヘア） ī'vo-rĭ（あィヴォリ） glăss（グラス） bōne（ボウン） cŏp'pĕr（こパ） ŏx'ĭ-gĕn（おクスィセン） hī'dro-gĕn（はィドロセン） nī'tro-gĕn（なィトロセン） sug'ar（シュガ） salt（ソールト） brĕad（ブレッド） rīce（ライス） whēat（ホィート） mēat（ミート） soy（ソィ） cāke（ケィク） ăp'ple（あップル） pēach（ピーチ） bĭs'cuĭt（びスキット） wīne（ウァィン） oil（オィル）

Material の例	Common の例
Glass is very brittle. 〔硝子は甚碎け易い〕	Give me a **glass** of wine. 〔葡萄酒を一杯下さい〕。 此の際 glass は杯の意。
We use **paper** to write upon. 〔字を書くに紙を遣ふ〕。	Lend me to-day's **paper**. 〔今日の新聞を借してくれ〕。 此際の paper は新聞の意。
He ate **fish** at dinner. 〔彼は晩食に肴を食つた〕。	**Fish** live in water. 〔魚は水に住む〕。
The handled is made of **bone**. 〔柄は骨製だ〕。	He broke a **bone**. 〔彼は骨を挫いた〕。
Horses eat **grass**. 〔馬は草を食ふ〕。	He studies the **grasses**. 〔彼は草を研究す〕。

まだ幾らも別の例はあるが、此位に止めて置く。

3. Material Noun と Article 及び數

Material Noun は前に說いた通り總て數を數へる事の出來ないものである。さればこれに a や an（一つのの意）を附けたり、又複數にしたりする事の出來ない事は言ふ

brĭt'tle（ブリットル） ūse（ユーズ） to write ŭp-ōn'（トゥ、ライト、アポン） āte（エイト） ăt dĭn'nĕr（アットディナ） hănd'le（ハンドル） is made ŏf（イズ、メイド、オヴ） hôrs'eş（ホーシズ） ēat（イート） grăas（グラス） lĕnd（レンド） to-dāy's'（トゥデイズ） brōke（ブロウク） stŭd'ies（スダディズ）

までもない。元來數のないもの、それが複數になつたり、一つといふ語を冠る筈がない。併し前項に說明した通り、Material Noun が轉じて Common Noun の意味に遣はれる時は前例の通り Give me a glass だの He studies the grasses. だのと a や an も附し、又複數にもする。

所で今一方の Article 即ち the の方は少しも差支なく Material Noun にも附けられる。the は「あの」「この」等の意だから「あの硝子」「この草」と言つて少しも差支ないのだから。

* * * * * * *

Common Noun は單數の形に the 又は a を附けるか、Article（冠詞）なしで複數の形を用ゐると其 class（種類）全體を指す事になる、これは前に詳述した事で諸君も御記憶であらう。所が Material に屬する Noun の class（種類）全體を示す時には全然 Article を附けないでよい（無論單數の儘で）。例へば

I like **meat**. 〔僕は肉が好きだ〕。

この meat は meat の總體、「總て meat なる物を」の意だ。

Meat is better than **fish**. 〔肉は肴よりよい〕。

こゝの meat も fish も其 class 全體を示すのである。若しこの meat や fish を Common Noun の例へば apple と orange にでも換へるとすれば

bĕt'tĕr（ベタ） ŏr'ange（オレンジ） sŏme（サム）

Apples are better than **oranges.**
The apple is better than **the orange.**
An apple is better than **an orange.**

といつた風にせねばならぬ。この區別はよく會得して頂きたい。

次に「幾らか」と分量を制限した事をいふ時は common の方ならば

Give me **some apples.**

〔林檎を幾らか下さい———二つ以上を望む時〕。

Give me **an apple.**

〔林檎を一つ下さい———一つを望む時〕。

の樣に複數ならば some（問の文か否定の文には any を遣ふ、併し some も any も同じく「幾らか」と譯してよし、詳しい區別は Adjective（形容詞）の所で說明する）單數ならば a（又は an）を遣ふ。所が Material の方には無論複數はなく、又 a, an は附けられぬから、次の例の樣に單數の形に直く some（問の文と否定文には any）を附ける。

Will you give me **any meat?**
〔幾らか肉を下さいすまか〕。
Please give me **some meat.**
〔何うか幾らか肉を下さい〕。

この用法の區別もよく覺えねばならぬ。

次にある特殊のもの「あれ」「これ」などの意を示すに、Common は the を遣つて

an'y（エニイ） plēase（プリーズ）

The apple I ate at dinner was very fresh. 〔晝飯に食つた（あの）林檎は大層新しかつた、林檎一個〕。

The apples I ate at dinner were very fresh. 〔意味同上、但林檎二個以上〕。

と單數にも複數にも the を附ける。所で Material の方には複數はないが、單數に同じく the を附けて同樣「あの」「この」の意を示す。

The meat I ate at dinner was very fresh. 〔晝飯に食つた肉は大層新しかつた〕。

だから、つまり Common は都合七種の變つた意味に書き分けられ、Material は唯三種の變つた意味に書き分けらるゝのである。對照の便宜の爲め上例を更に書き並べて見よう。

Material.	Common.
總體を指す時	
I like *meat.*	I like *the apple.* / *an apple.* / *apples.*
數量を制限する時	
Give me *some meat.*	Give me *an apple.* / *some apples.*
特殊の物を指す時	
The meat I ate.....	*The apple* / *The apples* I ate.....

frēsh（フレッシ） wēre（ウァー）

4. Material Noun の數へ方

Material Noun は數を數へる事は出來ぬと上に說明して置いたが、併し詳しく言ふと何か特別の語を持て來て遣る以上は全然數へられぬといふのではない。例へば水は一つ二つと數へられぬが一杯二杯と標準の杯をさへ定めれば絕對に數へられぬ事はない、砂糖も茶も一つ二つとは數へられぬが一斤二斤とは數へられる、gold も silver も同樣一匁二匁とすれば出來る。英語で斯んな數へ方をするには

a cup of water 〔水一杯〕
two cups of water 〔水二杯〕
one *kin* of sugar 〔砂糖一斤〕
two *kin** of tea 〔茶二斤〕

といふ風に Material の前に數と標準にする數の名稱と Preposition（前置詞）の of を持て來て、且つ其數が複數だと、數の名の方を複數の形にする。更に五六の例を出して置く。

a piece of chalk 〔白堊一片〕
two pieces of chalk 〔白堊二片〕
a pound of gold 〔金一ポンド〕
two pounds of gold 〔金二ポンド〕
a bottle of ink 〔インキ一瓶〕

cup（カップ） tea（ティー） piece（ピース） pound（パウンド） bottle（ボットル） * Kin の如き日本語は複數でも s を語尾に附けるに及ばぬ。

two bottles of ink 〔インキ二瓶〕
a glass of wine 〔葡萄酒一杯〕
two glasses of wine 〔葡萄酒二杯〕

* * * * * * *

以上一通り Material Noun を說明し終つたから、例により一覽表を出して置く。

I. Material Noun の性質

1. 物品を造る材料の名。
2. 一つ二つと數へられぬ物の名。
3. 幾ら細くしても同一の物質の名。

II. Material Noun と數及び冠詞

1. 單數ばかり複數は出來ぬ。
2. 冠詞は the を附けるのみ a や an は附けぬ。
3. 大文字で書き出す事はいらぬ。
4. class 總體をいふには冠詞なしのまゝ。
5. 量を限るには some か any を冠詞に代用す。
6. 特殊のものをいふには the をつける。
7. 强て數が言ひたくは "a——of——" "two——s of——" といふ風にする

V. Abstract Noun（無形名詞）

1. Abstract Noun の性質

Abstract とは形態を離れた、抽象的の、無形的の、などいふ意味の語である、つまり今迄の四種の Noun は何れも形が見えて、兎に角一定の姿形を備へて居る物（空氣でも瓦斯でも仕方によつては姿は見える）であつたが、Abstract Noun（無形名詞）は獨り其姿形の眼に見えぬもの、即ち物の性質の名、有樣の名、働作の名などをいふのである。

例へば clever（賢い）high（高い）などいへば物の性質を示す語即ち Adjective（形容詞）であるが、cleverness（賢きこと）height（高さ）といへば其性質の名、即ち Abstract Noun（無形名詞）になる。又 poor（貧乏な）, young（若い）などいふ Adjective（形容詞）は物の有樣を説明する言葉だが、これが poverty（貧乏）, youth（若きこと）となるとこれは Abstract Noun である。read（讀む）, write（書く）は Verb（動詞）だが、これが reading（書む事）, writing（書く事）となると Abstract Noun である。

---

clĕv′ĕr（クれッヴァ） high（ハイ） clĕv′ĕr-ness（クれッヴァネス） heīght（ハイト） pōōr（プーア） yoŭng（ヤング） pŏv′ĕr-ty（ぽヴァティ） yoūth（ユース） rēad（りード） write（ライト） rēad′ing（りーディング） writ′ing（らィティング）

定義—**An Abstract Noun is the name of a quality, action, or state.**

〔無形名詞は性質、動作又は有樣の名なり〕。

2. 最も普通なる Abstract Noun の例

Abstract Noun は總て Adjective（形容詞）か又は Verb（動詞）より出來る語である。次に其最も普通なるものを列擧しよう。

1. 形容詞の語尾に ness と云ふ suffix（接尾語）を添へるもの。

Adjective.	Abstract Noun.
kind（親切なる）。	kindnese（親切）。
happy（幸福なる）。	happiness（幸福）。
idle（怠惰なる）。	idleness（怠惰）。
good（良き）。	goodness（善良）。
sweet（甘き）。	sweetness（甘味）。

2. 形容詞の語尾に th といふ suffix（接尾語）を添へるもの。

Adjective.	Abstract Noun.
true（眞なる）。	truth（眞理）。
long（長き）。	length（長サ）。
wide（廣き）。	width（廣サ）。

---

sŭf′fix（さフィクス） hăp′pĭ（はピィ） hăp′pĭ-ness（はピィネス） ī′dle（あィドル） ī′dle-ness（あィドルネス） gŏŏd′ness（ぐッドネス） swēet（スウィート） swēet′ness（スウィートネス） true（トルー） truth（トルース） lŏng（ロング） lĕngth（レングス） wide（ウィド） wĭdth（ウィズ）

deep（深き）	depth（深サ）。
broad（巾廣き）。	breadth（幅）。

3. 形容詞の語尾に ty といふ suffix（接尾語）を添へるもの。

Adjective.	Abstract Noun.
pure（純粹なる）。	purity（純粹）。
honest（正直なる）。	honesty（正直）。
poor（貧しき）。	poverty（貧困）。
rapid（速かなる）。	rapidity（迅速）。
vain（浮誇なる）。	vanity（浮誇）。

4. 形容詞の語尾に ce といふ suffix（接尾語）を附くるもの。

Adjective.	Abstract Noun.
silent（靜かなる）	silence（靜粛）
obedient（從順なる）	obedience（從順）
diligent（勉强なる）	diligence（勉强）
magnificent（壯麗なる）	magnificence（壯麗）
benevolent（惠ある）	benevolence（仁惠）

dēep（ディープ） dĕpth（デプス） brōad（ブロウド） brĕadth（ブレズ） pūre（ピューア） pū'rĭ-tĭ（ピューリティ） hŏn'est（おネスト） hŏn'es-tĭ（おネスティ） răp'ĭd（らピッド） ra-pĭd'ĭ-tĭ（ラピディティ） vā'in（ヴェイン） văn'i-ty（ヴァニィティ）

sī'lent（さィレント） sī'lence（さィレンス） o-bē'dĭ-ent（オビーディエント） o-bē'di-ence（オビーディエンス） dĭl'i-gĕnt（ディリゼント） dĭl'i-gĕnce（ディリゼンス） mag-nĭf'i-cent（マグにフィセント） mag-nĭf'i-cence（マグにフィセンス） be-nĕv'o-lent（ビれボレント） be-nĕv'o-lence（ビれボレンス）

5. 動詞の語尾に ing といふ suffix（接尾語）を附くるもの。

Verb	Abstract Noun
walk（歩く）	walking（散歩）
read（讀む）	reading（讀書）
write（書く）	writing（習字）
run（走る）	running（競走）
wash（洗ふ）	washing（洗濯）

6. 動詞の語尾に tion といふ suffix（接尾語）を添へるもの。

Verb	Abstract Noun
add（附加へる）	addition（寄せ算）
subtract（減ずる）	substraction（引き算）
multiply（乘ずる）	multiplication（掛け算）
civilize（開化する）	civilization（開化）
imagine（想像する）	imagination（想像）

7. 動詞の語尾に sion といふ suffix（接尾語）を添へるもの。

Verb	Abstract Noun
divide（別つ）	division（割り算）
invade（侵入する）	invasion（侵入）
succeed（續く）	succession（繼續）

wa*lk*（ウォーク） wa*s*h（ウォッシ） ăd*d*（アッド） ad-dĭ'tion（アディシャン） sŭb-trăct'（サブトらクト） sub-trŭc'tion（サブトらクシャン） mŭl'tĭ-plĭ（まルティプライ） mŭl-tĭ-plĭ-cā'tion（マルティプリけィシャン） çĭv'-ĭl-īze（スィヴィライズ） çĭv-ĭl-ĭ-zā'tion（スィヴィリゼィシャン） im-ăg'ĭne（イまジン） im-

suspend（吊下げる）	suspension（中止）
suppress（抑制する）	suppression（抑制）

8. 動詞の語尾に ment といふ suffix（接尾語）を附けたもの。

Verb	Abstract Noun
punish（罰する）	punishment（處罰）
command（命ずる）	commandment（命令）
commence（始める）	commencement（開始）
treat（取あつかふ）	treatment（處置）
judge（判斷する）	judgment（判斷）

其他にも，まだ are, hood, age, ship, cy, ry, ance 等の語尾が附いて Abstract Noun を作るものもあるが、餘り詳細に渡るから略して置く。

以上の外本來 Abstract Noun であつて、他の Parts of Speech（品詞）より變化したものでないものも大分ある。其主なものを例示すると、

beauty（美）, health（健康）, wealth（富）, sin（罪）, law（法律）, nature（自然）, art（技術）, war（戰爭）, peace（平和）,

---

ağ-i-nā'tion（イマヂれィシヤン） dĭ-vīde'（ディヴァイド） di-vĭs'ion（ディヴィヂャン） ĭn-vāde'（インヴェイド） ĭn-vā'sion（インヴェイシャン） sŭc-çēed'（サクスィード） sŭc-çĕs'sion（サクセッスジャン） sŭs-pĕnd'（サスペンド） sus-pĕn'sion（サスペンシャン） sŭp-prĕss'（サップれス） sup-prĕs'sion（サプれッシャン） pŭn'ĭsh（パニッシ） pŭn'ĭsh-ment（パニッシメント） com-mănd'（コムマンド） com-mĕnçe'（コムめンス） trēat（トリート） jŭdğe（ヂャッヂ） beaū'tĭ（びューティ） hĕalth（ヘルス） wĕalth（ウェルス） sĭn（スィン） law（ロー） nā'ture（れィチァ） ärt（アート） war（ウォー） pēaçe（ピース）

mind（心）, time（時）, space（空間）, color（色）, power（力）, might（力）, principle（主義）, system（系統）, industry（產業）, virtue（德）, grace（慈悲）。最も此中にはそれに相當する Verb（動詞）や Adjective（形容詞）のあるものもあるが、それは前の例とは反對でそれから此 Abstract に變化したものでなく、Abstract から却て Verb や Adjective に變化したものである。

3. Abstract Noun と Article 及數

Abstract Noun（無形名詞）は Material Noun（物質名詞）と同樣、Plural（複數）の形はない、いつも Singular（單數）ばかりである。何故といへば例へば clever man, clever woman, clever boy, clever dog などいふものは幾つもあるが、それが抽象的になつた cleverness（賢きこと）といふものには形もなければ數もない、clever man は一人二人と數へられても、cleverness といふ無形のものは一人二人とも、一つ二つとも言はれないから。

從て a 又は an（一つの意）の Article（冠詞）を Abstract Noun に附けることはない、これも Material Noun と同樣である。

併し the の方は Material Noun にも附けることが出來ると同樣、Abstract にも附けられる。さうすると「この

---

mīnd（マインド） tīme（タイム） spāçe（スペイス） cŏl'ŏr（カラ） pow'ĕr（パウア） mīght（マイト） prĭn'çĭ-ple（プリンスィプル） sŷs'tem（スィステム） ĭn'dŭs-try（インダストリ） vĭr'tue（ヴァーテュ） grāçe（グレイス）

……」「あの……」と特殊のある Abstract を指すことになる。例へば

The general praised *the* **bravery** of his men.

〔大將は其兵卒の勇氣をほめた〕。

あらゆる bravery（勇氣）でない、兵卒が現に顯はしたる bravery だから the を附けて特に「その勇氣」といふ事を示すのである。

What is *the* **height** of that mountain?

〔あの山の高さは幾らか〕。

在らゆる高さでなく、「あの山の高さ」であるから the がいる。

次に Abstract Noun は又 Material Noun と同樣に、廣く總體の性質なり、有樣又は動作なりの名を言ふには冠詞なしで置く。例へば

Cleverness is different from **wisdom**.

〔悧口と賢きことゝは違ふ〕。

Contentment is the mother of **happiness**.

〔足るを知る事は幸福の母である〕。

是等の cleverness, wisdom, contentment, happiness は何れも在らゆるものを指すのである。

Material Noun と同一の語が用法によつて Common Noun として遣はるゝと同じく、Abstract も時に用法に

prāīsĕd（プレイズト） brā'vēr-ĭ（ブれィヴァリ） moun'tăin（まゥンティン） wĭs'dom（ゥィズドム）

より Common の意味に遣はれることがある、二三の例を擧げると、

Abstract. (a も an も附けず又複數にも出來ぬ)	Common. (a も an も附けられ複數にも出來る)
Time flies like an arrow. 〔時は矢の如く飛ぶ〕。	These are signs of the **times**. 〔これは時勢の徵候だ〕。
Knowledge is **power**. 〔知識は力〕。	The **powers** are consulting about the affair. 〔列國は事件を協議中〕。
There is no **relation** between them. 〔彼等の間に何の關係もない〕。	He is a **relation** of mine. 〔彼は私の親戚だ〕。
We learn **composition** at school. 〔私等は學校で作文を習ふ〕。	I must write a **composition** to-day. 〔今日作文を一つ書かねばならぬ〕。

* * * * * * *

Abstract Noun はこれで終りとし、例により一覽表を示さう。

ăr'-rōw（あロ） knŏwl'edge（なレッヂ） re-lā'tion（りれィシャン） be-twēen'（ビトゥィン） lĕarn（ラーン） com-po-şĭ'tion（コンポヂィシャン） signs（サィンズ） con-sŭlt'ĭng（コンさルティンク） af-fāir'（アふェア） mine（マィン）

I. Aqstruct Noun の性質

1. 性質の名、2. 有樣の名、3. 時の名（eternity＝永久だの shortness＝暫時の如き）、4. 情の名（love＝愛, hope＝希望, anger＝怒の如き）、5. 心力の名（memory＝記憶力, imagination＝想像力, understanding＝理解力の如き）、6. 働作の名（walking＝散步, writing＝筆記の如き）、7. 技藝の名（drawing＝畫學, music＝音樂の如き）8. 學問の名（philosophy＝哲學, science＝科學, botany＝植物學の如き。尤も此學問技藝の名は時に Proper Noun として取扱ふ事もあろ）、9. 病氣の名（typhus＝チブス, cholera＝コレラの如き、これも Proper Noun と見てもよい。要するに兩方何れに分類してもよいのだ）。以上九種の名を示すものを Abstract Noun といふ、總て形を離れた抽象的のものである。

II. Abstract Noun と數及び冠詞

1. 單數ばかり、複數なし。2. 冠詞は the の外附けぬ。3. 大文字で書き始めるに及ばぬ。4. class 總體をいふには冠詞なしのまゝ。5. 特殊のものをいふには the を附す。

* * * * * * *

e-tĕr′nĭ-ty（イたーニィティ）shôrt′ness（しョートネス）lŏve（ラヴ）hōpe（ホゥプ）ăn′gĕr（あンガ）mĕm′o-rỹ（めモリ）im-a-ĕi-nā′tion（イマヂねィシャン）ŭn-dĕr-stănd′ing（アンダスたンディング）drạw′ing（ドろーインガ）mū′ṣic（むューズィック）phĭ-lŏs′o-phy（フィろソフィ）sçi′ençe（さィアスン）bŏt a-nỹ（ぼタニィ）

以上て Noun の五種の性質用法等を一通り說明し終つた。次に其主なる相違の點を對照比較する一覽表を出して置かう。

Noun					
	Proper（固有）	Common（普通）	Collect（集合）	Material（物質）	Abstract（無形）
性質	人名地名等	種類の名、一個の名	團體の名	材料の名	無形物の名
數	本來は單數のみ	單複共あり	單數のみと（甲）兩方と（乙）二種あり	單數のみ	單數のみ
總數を示す時		the 又は a 又は an を單數に附けるか複數に冠詞なし		單數に冠詞なし	同左
數量等を示す時		a 又は an を單數に附けるか、some 又は any を複數に附す		單數に some 又は any を附す	同左
特殊のものを指す時		the を單複共に附す	the を附す	同左	同左

第四

Noun の Inflection (變化)

Inflection (變化) といふのは、word (語) が種々の遣ひ方に從ひ形を變ずる其變化をいふのである。併し Inflection (變化) は幾ら變化しても Noun はいつも Noun, Pronoun は常に Pronoun で、別の品詞に代ることをいふのではない。或る品詞より別の品詞に變化する變化の方は別に Derivation (轉化) といふ。

例へば Noun の man(男)が men と變り、man's と變るは Inflection で manly (男らしき) と Adjective (形容詞) に代るは Derivation である。Adjective の wise (賢き) が wiser, wisest と變るは Inflection で wisely(賢く) と Adverb (副詞) に變り、wisdom (賢き事) と Noun に變るは Derivation である。Noun の Inflection のことを特に Modification (名詞の變化) と名く。

Noun の Modification (名詞の變化) には Number (數), Person (人稱), Gender (性), Case (格) と四種ある。以下順次に之を說明して行かうと思ふ。

I. Number(數)

日本語の名詞は數一つの時でも二つ以上の時でも大抵

in-flĕc'tion(インフレクシャン) dĕr-ĭ-vā'tion (デリヴェイシャン mān'ly(マンリ) wīse'ly (わィズリ) mŏd-ĭ-fi-cā'tion (モディフィけィシャン) wīs'dom (ウィズドム) nūm'ber (なムバ) pēr'son (ぱースン) gĕn'der (ぜンダ) cāse (ケィス)

其形を變へる事はない、一疋でも犬二疋でも三疋でも、十疋、百疋、千疋でも常に犬である。所が英語の方は一疋なれば a dog だが二疋以上の時は two dogs の樣に dog の語尾に s を附ける。

斯く Noun (名詞) は其表はす數の如何により、其形を變化する、此變化を Noun の Number (數) の Modification (變化) といひ、數一つを表はす Noun を Siugular Number (單數) の Noun といひ、二つ以上を表はすものを Plural Number (複數) の Noun といふのである。尤もこれは一つと二つ以上との變化許りで、二つ以上は幾らでも少しも變化はないのだからよくそれも會得して置かねばならぬ。つまり Singular Number (單數) といへばいつも數一つのこと、Plural Number (複數) といへば二つ以上無限大に至るまで一切の數を含むものと心得て居ればよい。

それから上に Noun は單複により形を變化するといつたが、これは主として Common Noun に就いて言つたことで、其他の Noun は既に說明した通り、總て Plural (複數) にならぬが本體、唯 Proper Noun (固有名詞) が時に二つ以上の集り (例へば連山、群島の如き) の時などに複數の形になり、Collective Noun に時に複數になるものがある位なこと、Material や Abstract に複數は頓とない。

定義—Number is a modification of noun to denote one or more than one.

de-nōte' (ディのゥト)

〔數は一又は一以上を示すべき名詞の變化なり〕。

複數の作り方

單數の Noun を複數に作る方法は大別して 1. 規則的, 2. 不規則的の二つとし、その二つをまた更に幾つかに小別して說明するが便利である。

1. 規則的複數の作り方

この作り方はまた別けて *a.* 單數の語尾に直ちに s を附けるもの、*b.* 單數の語尾に直ちに es を附けるもの、*c.* 單數の語尾に多少の變化を加へて es を附けるものと斯う三つにする。

a. 單數の語尾に直ちに s を附けるもの—これが最も普通の變化法で、全體の Noun 十分七八迄はこの變化法によるのである。

この變化法は例へば

單數	cap(帽)	book(本)	cat(猫)
複數	caps	books	cats
單數	dog(犬)	pen(ペン先)	card(名刺)
複數	dogs	pens	cards

の樣にたゞ直接語尾に s を附ければよいのである。所でこれを發音する時 caps, books, cats の方は何れも s(ス) と澄んでいふが、dogs, pens, cards, の方は何れも s=z (ズ)

と輕く濁つていはねばならぬ。つまり同じ語尾の s が其 s を附けない前の語尾の發音如何により清濁二樣に發音しわけねばならぬのである。

(一) s(ス)と澄んで發音する場合—これは s をまだ附けない以前の語尾が p, f, k, t, 及び th などゝ清音の時

cups(杯) cuffs(カフス) hooks(釣針) boots(長履) hearths(爐)

この s は何れもスと澄むのである。

(二) z(ズ)と濁つて發音する場合—これは前の語尾が

(1) b, v, g, d, th(=dh) などゝ濁音の時

tubs(桶) leaves(葉) dogs(犬) buds(芽) clothes(着物)

(2) 清音中の m, n, ng, r, l (これ等は他の清音の樣にそれに對する濁音がない)を語尾とする場合

names(名) hens(牝雞) kings(王)
cars(客車) hills(小山)

(上の例中 leaves, clothes, names は綴字の上から言へば直接 v, th, m に s が附いたのではないが最後の e は消字で發音しないから發音の上から言へば直接 v, th, m に s が附くのである。總て語尾が何うといふは綴字上の語尾でなく發音上の語尾、即ち消字を省いて實際發音するものゝ語尾をいふのであるから注意せねばならぬ)。

---

cŭf*f*s(カフス) hŏoks(フックス) boots(ブーツ) hearths(ハース) tŭbs(タップズ) lēaves(リーヴズ) bŭds(バッヅ) clōths(クローズ) cärs(カーズ) hil*l*s(ヒルズ)

（3）母音が語尾にある時（これも消字には關せぬ、實際發音する語尾がさうでなくてはならぬ）。

boys（男兒）　eyes（眼）　cows（牝牛）

併し幾ら濁るといつても日本のズの樣に强く言ふには及ばぬ、輕く短くズといへばよい。尙ほ上には便宜上一括して書いて置いたがtとdにsが附いた時は他の時の樣にtとs、又はdとsと二音にならないで、二音が結合つて一音に似た音即ちtsはツ、dsはヅとなつてしまう。他のksがクス gsがグズとなる樣tsてトス dsてドズとはならぬから注意するがよい。

b. 單數の語尾に直ちにesを附けるもの—これは語尾が (1) s, (2) z, (3) x, (4) ch, (5) sh の時。

單數	gas（ガス）	adz（手斧）	box（箱）
複數	gases	adzes	boxes
單數	bench（腰掛）	dish（鉢）	
複數	benches	dishes	

このesはĭsと輕く短く發音するがよい、gás'ĭs（ガッシズ）, bĕnch'ĭs（ベンチズ）の樣に。

（6）また語尾がoの字で其前が父音字の語は矢張其儘esを附ける。

單數	cargo（荷物）	negro（黑奴）	volcano（火山）
複數	cargoes	negroes	volcanoes

---

eyes（アイズ） boys（ボイズ） ădz（アッズ） bŏx（ボックス） bĕnch（ベンチ） dĭsh（ディシ） cär'go（カーゴ） nē'gro（ニーグロ） vol-cā'no（ヴォルけイノ）

單數	hero（英雄）	echo（反響）
複數	heroes	echoes

併しこのesはeが消字で單にsと發音するだけ、即ちcargoes, hē'roes の樣に。

併しこの規則に例外の語が十四許りある。其內 piano（樂器のピアノ）, zero（零）, solo（獨吟）などはよく書物などに出る普通の語だから覺えて置くがよいが、其他は殆ど普通には出く遭はさぬ語で格別覺えるに當らなからうと思ふから、こゝには載せぬ（總てそんな稀れにしか遭はぬ語は今後載せぬことにする）。扨この例外の語は es を附けず單に s をのみ附け pianos, zeros, solos となるのだ。

今一つ語尾のoの語に例外の規則がある。それは calico（キャラコ）, mosquito（蚊）, portico（玄關）の三語で、これは規則通り es を附けても又單に s を附けても、即ち calicoes, mosquitoes, porticoes としても calicos, mosquitos, porticos としても何れてもよいといふのである。

以上の語は總て o で終ても其前が父音字であるもの許りであつた。若しoの前も母音字の時は es を附けず單に s を附ければよいのである。例へば

單數	bamboo（竹）	cuckoo（ほとゝぎす）
複數	bamboos	cuckoos

---

hē'ro（ひーロ） ĕch'o（えコ） pi-ä'no（ピあーノ） zē'ro（ずィーロ） sō'lo（そゥロ） cäl'i-co（かリコ） mos-quī'to（モスくゥィート） pōrt'i-co（ぽゥティコ） bäm-bōō'（バンぶゥー） cuck'oo（くックー）

單數	Hindoo(印度人)	curio(骨董品)
複數	Hindoos	curios
單數	cameo(寶石)	embryo(胚胎)
複數	cameos	embryos

c. 單語の語尾の一部を變へて es を附けるもの—これは單數の語尾 (1) y (2) f 又は fe の場合をいふのである。

(1) 單數の語尾 y で其前の字が父音字の時は y を i に變へて es を附ける、例へば

單數	city(市)	lady(貴女)	beauty(美人)
複數	cities	ladies	beauties

併し y の前が母音で ay, ey, oy, uy(但し quy の時は普通に上の規則に從ふ。又 iy といふ綴字は決してない)の時は其儘單に s を附ければよい。例へば

單數	day(日)	key(鍵)	boy(男兒)	bouy(浮標)
複數	days	keys	boys	bouys

(2) 單語の語尾 f 又は fe の時はそれを v に變へて es を附ける。例へば

單數	leaf(木の葉)	thief(盜賊)	calf(牛の子)
複數	leaves	thieves	calves
單數	wife(妻)	knife(小刀)	life(生命)
複數	wives	knives	lives

Hĭn'doo(ひンドゥ) cū'ri-o(きュリオ) kăm'e-o(かメオ) ĕm'bry-o(えムブリョー) cĭt'y(すィティ) lā'dy(れィディ) beaūt'y(びューティ) kē'y(キー) boy(ブィ) lēaf(リーフ) thēef(シーフ) căll(カーフ) knīfe(ナィフ) līfe(ライフ)

これにも又例外がある。即ち次の語は總て f の儘直ぐ s を附けるのである。reef, reefs の樣に。

reef(卷き帆), chief(酋長), roof(屋根), hoof(蹄), scarf(肩掛), wharf(波止場), dwarf(一寸法師), turf(芝土), gulf(灣), grief(悲み), cliff(崖), cuff(カフス), muff(マフス、手先きを暖むる毛製の圓筒狀のもの), staff(これは參謀の意の時は staffs で杖の時は staves だ)。又 fe で終るものにして例外即ち單に s を附ける語は三つある safe(保證), fife(采領), strife(爭鬪)。

2. 不規則的複數の作り方

英語には此種の變化をする語が可なり澤山あつて初學者を苦むる一つとなるのである。これは讀んで字の通り、全く不規則の變化をするのだから、規則詰に覺えることは出來ぬ。根氣にまかして自分の記憶力を頼みに一々暗誦せねばならぬ。「斯んなに澤山の暗誦！」と烏渡最初は驚きもしよう、「到底！」と失望もしよう。併し遣つて見れば案外雜作はない。併し澤山を一時に覺えようとしては勞多くして効少ないが、ナニ毎日少しづゝ、例へば十語宛も覺えて行けば其中には書物などでも其語に出會はすことも度々あり、案外樂に覺えられるものだ。何しろ「到底！」は禁物だ、毎日少しづゝ撓まず暗記し玉へ。

rēef(リーフ) chēef(チーフ) rōōf(ルーフ) hōōf(フーフ) scärf(スカーフ) whärf(ホーフ) dwärf(ドゥォーフ) tūrf(ターフ) gŭlf(ガルフ) grēef(グリーフ) clĭf(クリフ) mŭf(マフ) stăf(スタフ) sāfe(セィフ) fife(ファイフ) strife(ストライフ)

不規則は英語に附きもので、獨り Noun 許りでない、Verb(動詞)にも誠に澤山ある、Adjective(形容詞)や Adverb(副詞)にも幾らかある。それを諸君は追々に覺えて行かずばならぬのである。今からしつかり腹をくゝつて掛らねばならぬ。

(a) 中間の母音字を變へるもの

其數總て八つある、即ち

單數	man(人、男)	woman(女)	foot(足)
複數	men	women	feet
單數	goose(鵞鳥)	tooth(齒)	louse(虱)
複數	geese	teeth	lice
單數	mouse(二十日鼠)	dormouse(ヤク鼠)	
複數	mice	dormice	

(b) 語尾に en 又は ne を附けるもの

其數總て四つある。

單數	ox(牡牛)	child(小供)	brother(兄弟)
複數	oxen	children	brethren
單數	cow		
複數	kine		

fōōt(フット) fēet(フィート) gōōse(グース) gēese(ギース) tōōth(トゥース) tēeth(ティース) louse(ラウス) lice(ライス) mouse(マウス) mīçe(マイス) dôr'mouse(どーマウス) dôr'mīçe(どーマイス) ŏx'en(おクスン) chīld(チャイルド) chīl'dren(ちルドレン) brĕth'ren(ブれズレン) kīne(カイン)

最も brother は brothers, cow は cows と普通の複數の形もある。cows と kine は何れも同じ意味に遣ふが、brothers は今日では普通骨肉の兄弟で brethren は四海同胞などいふ同胞の意に遣ふ。併し古い書物には brethren を骨肉の兄弟にも遣つて居る。

(c) 單複同形のもの

其數總て十二許りあるが其中普通のものは

單數	deer(鹿)	sheep(羊)	swine(豚)
複數	deer	sheep	swine
單數	cannon(大砲)	fish(魚)	corps(軍隊)
複數	cannon	fish	corps
單數	fowl(家禽)	salmon(鮭)	
複數	fowl	salmon	

この内 fish と fowl は fishes, fowls と規則的複數の形を用ゐてもよい。

* * * * * * *

以上の外 (1) 日本語にラムプ、バケツ、ケットなど外國語より轉訛したものがある樣に、外國語より英語に轉訛した語の複數は總て其元の國の文法通り變化して居るので、其數も少くはない。(2) 又單數の形の時と複數になつた時と意味が違つて居るもの (3) 複數の形が二つ

dēer(ディア) shēep(シープ) swīne(スワイン) căn'non(カノン) côr/ps(コーズ) fowl(ファウル) să/m'on(さモン)

あつて各別の意味になるものなどあるが、大抵は普通に出ない語で骨を折つて覺えた所で其効能は眞に少ないから本書には總て省くことにした。若し知りたくば少し大きな文法書には大抵出て居るからそれに就いて學び玉へ（本書は説明こそやさしくしてあるが、其事項は普通の大文典にも劣らぬ位詳しく書くつもりであるが、世の常の文典の樣に味噌もくそも同一に書き並べる事はしない、普通の英語に殆ど必用ない所はズンダダ省いて必要な點を充分詳しくする覺悟で居る。こゝも其主義で省いたのである）。

此外次の Noun の如きいつも複數の形をのみして單數には遣はれぬものもある。これは鳥渡覺えて置くがよからう。

scissors（鋏）, tongs（火箸、西洋流の二本離れぬもの）, drawers（股引）, trousers（ズボン）, spectacles（眼鏡）, arms（武器）の如き總て二つ又は二つ以上の部分より成立ちて一つになつて居るものである。

尙ほ序ながら言つて置くが、日本語を英語中に入れて言ふ時は複數でも s などを附けず、單數の儘で置く方がよい。two *yen*, three *sen*, four *shō*, five *kan* の樣に。

3. Compound Noun の複數

Compound Nonn（熟語名詞）とは二語以上の語が寄つ

sçĭs'sŏrs（シザズ） tŏngs（トンガズ） drạw'ĕrs（ドろーアズ） trou'sĕrs（トらゥザズ） spĕc'ta-cles（スペクタクルズ） com-pound'（コムぱゥンド）

て一つの語の樣に用ゐらるゝものである。これを複數にするには其中の主な語を一つだけ複數の形に直すのである。例へば

單數	father-in-law（養父）	son-in-law（養子）
複數	fathers-in-law	sons-in-law
單數	mother-in-law（養母）	daughter-in-law（養女）
複數	mothers-in-law	daughters-in-law
單數	step-son（繼子）	step-mother（繼母）
複數	step-sons	step-mothers
單數	hanger-on（居候）	looker-on（見物人）
複數	hangers-on	lookers-on
單數	maid-servant（下女）	foot-man（從者）
複數	maid-servants	foot-men

但し次の如く兩方を複數にするものも少しはある。

單數	man-servant（下男）	woman-servant（下女）
複數	men-servants	women-servants

* * * * * * *

今一つ特別の用法を述べて Number（數）は終りとしよう。それは Noun が Adjective（形容詞）の樣に遣はれる時は次の例の樣に假令複數にすべき所でも單數の儘でよいといふことである。

lạw（ロー） stĕp（ステップ） hăng'ĕr-ŏn（はンガオン） lŏŏk'ĕr-on（るッカオン） măid-sĕrv'ant（メィドさーヴァント） fŏŏt'-măn（ふットマン）

This is an **eight-day** clock.

〔これは八日卷の時計だ〕。

Even a **five year** old child can do this.

〔五歲の小供でもこれは出來る〕。

I gave him a **ten dollar** note.

〔私は彼に十弗の紙幣を遣つた〕。

以上の黑字は意味は複數でも形は單數の儘の例である。併しそれは總て Adjective（形容詞）の役目をして居るからで、さうでなくば同じ語も次の樣に複數の形にならねばならぬ。

It took me eight **days**.

〔私には八日かゝつた〕。

The child is five **years** old.

〔その子は五歲だ〕。

I gave him ten **dollars**.

〔私は彼に十弗遣つた〕。

* * * * * * *

例により Number の變化の一覽表を出して置かう。

1. 規則的複數の作り方
   - *a.* 直ぐ s を附けるもの {（い）s と濁むもの / （ろ）s と濁るもの}
   - *b.* 直ぐ es を附けるもの {（い）語尾 s, z, x, ch, sh の時 / （ろ）語尾 o の時（例外あり）}
   - *c.* 語尾を變へて es を附けるもの {（い）語尾 y の時（例外あり） / （ろ）語尾 f, fe の時（例外あり）}
2. 不規則的複數の作り方
   - *a.* 中間の母音を變へるもの
   - *b.* en 又は ne を附けるもの
   - *c.* 單數と變化なきもの

   其他
3. Compound Noun の複數
   - *a.* 主な語をのみ複數とす（兩方をすべき例外もあり）

ēight'-day（えイトデエイ） clŏck（クロック） ē'ven（いーヴン） five yēar ōld（ファイヴ、イーア、オウルド） dŏl'lar（だラ） nōte（ノウト） tŏŏk（トック）

II. Person （人稱）

Person（人稱）には the First Person（第一人稱）, the Second Person（第二人稱）, the Third Person（第三人稱）と三種ある。the First Person（第一人稱）とは語る人自分を指すもの、the Second Person（第二人稱）とは語る人が其對手を指すもの、the Third Person（第三人稱）とは語る人及び聞く人以外の人及び物を指すものである。

定義—Person is a modification of nouns as to the person speaking, spoken to, or spoken of.

〔人稱は話すもの、話し掛けらるもの、話さるゝものに關する名詞の變化なり〕。

Pronoun（代名詞）はこの Person により、the First は I, we, the Second は you, the third は he, she, it, they 等と

fīrst（ファースト） sĕc'ond（セコンド） thīrd（サード） pĕr'son（パースン）

語が變るから大分研究すべき事項もあるがNoun（名詞）のPerson（人稱）に至つては殆ど研究する必要を認めない。何故といふにNounのPerson（人稱）は十中九分九厘まではthe Third Person（第三人稱）と極つて居るからである。つまり語る人が「我れ加藤清正は……」とても我が名を名のる時は加藤清正といふNounはthe First（第一人稱）であり、「汝熊坂長範め」とても對手の名をいふ時は熊坂長範といふNounはthe Second（第二人稱）であるが、其以外一切Nounを第一、第二人稱に遣ふことはない、いつも第三人稱になつて居るのである。更に詳しく言ふと、

1. 第一人稱のPronounとAppositive（同格）になつて居る時には、其Nounは第一人稱のNounである。

2. Nounが第二人稱のNounとAppositive（同格）になつて居る時には、其Nounは第二人稱の名詞である。

3. 其外の場合にては皆Nounは第三人稱である。

例を擧げると

We **students** should not do any such thing.

〔我々學生たるものはそんな事をしてはならぬ〕。

これはNounのstudentがPronounのweといふ第一人稱とAppositive（同格）であるからstudentと同じく第一人稱である。

ap·pŏs'i·tīve（アッポズィティヴ） shoud'd（シュッド） sŭch（サッチ） nĕv'ĕr（ネヴァ） re-trēat'（リトリート）

I, **Kiyomasa**, will never retreat a step.

〔我れ清正は一歩も退かぬ〕。

Iといふ第一人稱の代名詞と同格だからKiyomasaも第一人稱である。

Thou, **Japan**, art the loveliest thing to me.

〔汝日本は我れの最も愛するもだ〕。

Japanは第二人稱の代名詞thouと同格だから矢張第二人稱。

Where are you going, John?

〔Johnよ汝は何處に行くか〕。

Johnはyouといふ第二人稱代名詞と同格だから矢張第二人稱。

尙ほ注意すべきはは斯くNounは第一、第二人稱に用ゐられる場合でもPronounの樣に語の形を變化する事は決してない、常に同一の形であるといふことである。

* * * * * * *

一覽表

第一人稱——第一人稱の代名詞と同格の時

第二人稱——第二人稱の代名詞と同格の時

第三人稱——其他の場合總てさうである

Nounは總て人稱により語の形を變化せぬ。

stĕp（ステップ） thou（ザウ） ärt（アート） lŏve'lī'-est（らヴリエスト）

III. Gender (性)

1. Gender の種類

Gender (性) とは或る Noun (名詞) が、男性 (牡) であるか、女性(牝)であるか、又は男性、女性のいづれとも言へぬ、中間性のものであるか、それとも又男性とも見られ、女性とも見られ得ると言ふ、普通性のものであるかを、確かに定めるためのものである。

今述べた處によりて、察し得らるゝが如く Gender (性) には四種の別がある。即ち

1. Masculine Gender (男性)。
2. Feminine Gender (女性)。
3. Neuter Gender (中性)。
4. Common Gender (通性)。

一切の Noun は必ずこの四種の何れかに屬するものであるが、其何れの Gender(性) に屬するかを定むるには次の三通りの標準による。

1. Natural Gender. (自然的の性)。
2. Figurative Gender. (比喩的の性)。
3. Grammatical Gender. (文法的の性)。

1. Natural Gender とは天然的に、男女性が種々の物體に、定まつて居る者を本として、物の性を區別するのである。たとへば king (王), man(男), bull(牡牛)等は男(牡)

mās'cu-line (まスキュリン)　fĕm'i-nine (ふェミニィン)　neū'tĕr (にュータ)　cŏm'mon (こムモン)　năt'u-ral (なテュラル)　fig'u-ra-tive (ふィギュラティヴ)　gram-măt'i cal (グラまティカル)　bul/ (ブル)　gĕn'dĕr (センダ)

の名であるゆへ、之れを男性の名詞と言ひ、queen(女王), woman(女), cow(牝牛)等は女(牝)の名であるゆへ、之を女性の名詞と言ひ、又 table(食卓), book(書物), pencil (鉛筆) 等は男とも女とも言へぬゆへ、之を中性の名詞と言ふが如きである。

2. Figurative Gender とは、元來男とも女とも性の區別が無きものを假りに男女の性を附けたものを言ふ。たとへば sun (太陽), time (時), death (死), fear (恐怖), anger (怒), winter (冬), war (戰爭) 等を男性とし、又 moon (月), nature(自然), fortune(運命), knowledge (知識), hope (希望) spring (春), peace (平和)等を女性とするの類である。併し實際を言ふと sun は男だか女だか知れるものではなし、又 moon も男だか女だか解かるものではないが、sun の如く恐ろしくして威光あるものは假りに男性と見たのである、又 moon の如く美しくして優雅なるものを假りに女性と見たのである。之を比喩的 (美文的) の性と言ふのである。

3. Grammatical Gender とは、やはり元來男とも女とも性の區別のないものを、語の形の如何により假りに男女の性を附けたのを言ふので、例へば

a. a, end, ere, ing, dom, had, scipe 等の語尾のある言葉は、男性であると言ひ

b. nis, u, ung, ing 等の語尾のある言葉は、女性であると言ひ

c. ern, lac, en 等の語尾のある言葉は、中性の名詞で

あると言ふが如き分け方をいふのである。
英語の Noun は總て以上三つの標準の内の何れかによつて其性を定める。

定義—**Gender is a modification of Nouns (or Pronouns) to denote sex.**

〔性は性を示す爲めの名詞又は代名詞の變化なり〕。

2. Masculine と Feminine.

Feminine Gender (女性) の語は普通 Masculine Gender (男性)の語と次の標準により區別する。

a. Masculine (男性) の語尾に ess を附け(中には少しく綴字等をも改め)ると Feminine になるもの。例へば

男性	emperor(皇帝)	prince(親王、又は公爵)
女性	empress(皇后)	princess(王妃又は公爵夫人)
男性	marquis(侯爵)	count(伯爵)
女性	marchioness(同夫人)	countess(同夫人)
男性	viscount(子爵)	baron(男爵)
女性	viscountess(同夫人)	baroness(同夫人)
男性	master(男主人)	actor(男俳優) lion(獅子)
女性	mistress(女主人)	actress(女優) lioness(牝獅子)

sĕx(セックス) prĭnçe(プリンス) prĭn'çess(プリンセス) mär'quĭs(まーキス) mär'chi-o-ness(まーキオネス) count(カウント) count'ess(カウンテス) vī's'caunt(ヴァイカウント) vīs'count-ess(ヴァイカウンテス) bär'on(ばロン) bar'on-ess(ばロネス) mĭs'tress(みストレス) ăct'ŏr(あクタ) ăct'ress(あストレス) lī'on-ess(らィオネス)

男性	tiger(虎)
女性	tigress(同牝)

b. 全く別の語を以てするもの。例へば

男性	man(男)	boy(男兒)	father(父)	son(息男)
女性	woman(女)	girl(女兒)	mother(母)	daughter(息女)
男性	brother(兄弟)	husband(夫)	uncle(叔父)	
女性	sister(姉妹)	wife(妻)	aunt(叔母)	
男性	nephew(甥)	king(王)	gentleman(紳士)	
女性	niece(姪)	queen(女王)	lady(淑女)	

c. Common Gender (通性) の Noun の前或は後に sex (性) を表はす語を附けて分けるもの。例へば

男性	man-servant(下男)	he-goat(牡羊)
女性	maid-servant(下女)	she-goat(牝羊)
男性	washer-man(洗濯男)	
女性	washer-woman(同女)	

2. Common Gender (通性)

Common Gender (通性) とは男性とも言はれ、又女性とも言はれるもの、つまり兩方共に通用するものを言ふので、例へば

man 又は woman といふ代りに **person** といひ

men 又は women といふ代りに **people** といひ

tī'gress(たィグレス) hŭz'band(はズバンド) ŭn'cle(あンクル) ănt(アーント) nĕph'ew(nĕv'u れヴュ) niēçe(ニィース) gĕn'tle-man(ぜントルマン) hē'gōat(ひーゴウト) wash'ĕr-man(うォッシァマン) pē'ple(ぴープル)

father 又は mother といふ代りに parent といひ

son 又は daughter / boy 又は girl } といふ代りに child といひ

man-servant 又は maid-servant といふ代りに單に servant といひ

king 又は queen といふ代りに { sovereign / monarch } といひ

bull(牡牛)又は cow(牝牛) といふ代りに cattle といふ其太い體で印刷したNoun は總て Common Gender (通性。である。

3. Neuter Gender (中性)

Neuter Gender(中性)に屬する Noun は前項の Common が男女何れの性ともいはれるといふに反し、これは男女何れの性ともいはれぬものをいふのである。例へば

desk(机), book(本), watch(時計), house(家), newspaper (新聞), magazine (雜誌) の類、總て器具物品等の無生物はこれで、多分全體の Noun の中この Gender に屬するものが一番多からう。

4. 特に注意すべき Gender

以上の説明で Gender(性) の事は一と通り終つたのであ

pâr'ent(ペアレント) sôv'ĕr-eign(サヴァリン) mŏn'arch(もナク) căt'tle(カットル) news-pā'pĕr(ニューズペイパ) mag-a-zĭne'(マガヂーン)

るが、次に尙ほ少しく特に注意すべき變な性を列擧して置かう。

a. 國の名は Neuter (中性) だが、國民の名としてそれが遣はるゝと Feminine(女性) になる。例へば

Japan is but a small country. **It** consists of five principal islands, and **its** climate is generally mild.

〔日本は唯一小國である。五個の主なる島より成立ち、其氣候は概して溫和である〕。

此時の Japan は單に國として遣はれて居るから中性である。其證據にこれを受ける代名詞は總て中性 it, its である。所が

If **Japan** strengthens **her** navy a little more, **she** may be able to protect **her** interests abroad.

〔若し日本が今少しく其海軍を擴張したら、外國に於ける其利益を保護する事が出來よう〕。

こゝの Japan は Japanese nation (日本國民) の意で女性に扱はれて居る、其證據これを受くる代名詞が總て she, her と女性になつて居る。

b. 船は常に Feminine(女性)として取扱はれて居る。

The **Satsuma** was built in **her** own country.

〔薩摩艦は其國で建設された〕。

人間以外の動物は總て Neuter (中性) にして、it を以て

coŭn'trĭ(カントリ) con-sĭsts'(コンスィスツ) prĭn'çĭ-pal(プリンスィパル) ĭs'lands(あィランヅ) clī'mate(クらィメト) gĕn'ĕr-al-ly(ヂナラリ) mīld(マィルド) strĕngth'ens(ストれンクスンズ) ā'ble(えィブル) pro-tĕct'(プロてクト) ĭn'tĕr-ests(いンタレスト) a-brōad'(アブろゥド) built(ビルト) ōwn(オゥン)

受ける。尤も dog に he の Pronoun を遣つて男性の如くし、cat に she を遣つて女性の如くする場合なども屢々あるが、それは上に言つた比喩的の分け方で、即ち dog は強いものだから男性、cat はやさしいものだから女性としたので、通例は總て悉く中性にする。

* * * * * * *

次に一覽表を掲げて Gender の終りとしよう。

Gender（性）
- 1. Masculine(男性)
- 2. Femine(女性)
  - a. 男性の語尾に ess を附け女性とす。
  - b. 全く別の語を用ふ。
  - c. 通性の前後に語を附ける。
- 3. Common(通性)（男女何れでもあるもの）。
- 4. Neuter(中性)（男女何れでもなきものな）。

Gender を區分する標準
- 1. 自然的の性。
- 2. 比喩的の性。
- 3. 文法的の性。

IV. Case（格）

1. Case の種類

此書物の始めに言つた通り。sentence（文）といふは word（語）の寄り集つたものであつて、文中の word（語）は總て他の words に對し何等かの文法的關係を持つて居る。詳しい事は後章の文章論に讓らねばならぬが、今其中の Noun（名詞）のみに就ていふと、(1) Noun は文中に於て Verb（動詞）の Subject（主詞）となり、主人公となつて居るものと、(2) Verb の Object（目的詞）となり、目的物となつて居るものと、(3) 他の Noun と結附いて Adjective（形容詞）の樣な役目をして居るものと、以上三種ある。例を擧げて説明すると、

sūb'ject（さブゼクト）

(a) The **teacher** gave the boy a book.

〔先生が小供に書物を與へた〕。

に於て其書物を與へた主人公即ち Verb の gave の主詞は teacher である、與へるといふ動作をした本人は teacher である。即ちこゝの teacher は上の (1) の役目をして居る Noun である。

(b) The man is said to be a **teacher**.

〔あの人は先生だといはれて居る〕。

この文中の teacher は言はれて居る本人即ち the man と同一の人である、即ち Verb の is said の Subject（主詞）たる the man と teacher とは同一人であるから、こゝの teacher も間接に is said の subject（主詞）で、teacher は矢張上の (1) の役目をして居るのである。

(c) The man is a **teacher**.

〔あの人は先生です〕。

こゝの teacher は上例と同じく Verb の is の Subject（主詞）たる the man と同一人で、も矢張間接に is の Subject（主詞）になり、上の (1) の役目をして居る。所が上の

b' ect(おブゼクト)　tēa'chēr(てィーチァ)　is said(sēd)(イズ、セッド)　to bē(トゥ、ビー)

(*d*) The teacher gave the boy a book.

〔先生は小供に書物を與へた〕。

の中の book といふ Noun は與へるといふ動作の目的物である、gave といふ Verb の Object（目的詞）である。又 boy も同じく gave の Object（目的詞）である、何を與へたか、誰に與へたか、といふことを説明する Noun で總て Verb の Object（目的詞）たるの役目をして居るのである。即ちこゝの book と boy は何れも上の (2) の役目をして居るのである。

所がこの文章を

(*e*) The boy was given a book by the teacher.

〔小供は先生より書物を與へられた〕。

(*f*) A book was given to the boy by the teacher.

〔書物が先生より小供に與へられた〕。

と書くと、結局小供が先生に書物を貰つた事で意味は (*d*) と少しも變らぬが、文章の形より言ふと (*e*) の方は the boy が was given といふ文章の Subject（主詞）で a book と the teacher が Object（目的詞）になつて居る。(*f*) では a book が同じく was given の Subject で the boy と the teacher とが Object になつて居る。即ち (*e*) では boy が上の (1) の役目、book と teacher が (2) の役目、(*f*) では book が (1) の役目、boy と teacher が (2) の役目をして居るのである。又次の文では

was giv'en（ウォズ、ギヴン）

(*g*) This is the teacher's book.

〔これは先生の書物です〕。

この中の teacher's は Verb の is の主人公でも又目的物でもない、何故といふに主人公は this で、book はその this と同一物即ち間接の主人公。目的物は此文章にはない。それではこゝの teacher's は如何なる役目をして居るかといふに book といふ Noun に附き、別人の book ではない teacher の book だと Adjective（形容詞）の樣に Noun の book を説明して居る。即ち上の (3) の役目をして居るのである。

同一の Noun も斯く文章中に於ける他の語との關係如何により三種の異る役目をする。この關係を論ずる事を Case（格）といふ、言ひ替へると Noun が文中の他の語に對し如何なる關係の位置に立つかといふ場合、文法上の言葉では Noun が如何なる Cass（格）にあるかといふのである。

定義—**Case is a modification of Nouns (or Pronouns) to dedote their relation to some other word in the sentence.**

〔格は文中に於ける他の語との關係を示すべき名詞又は代名詞の變化なり〕。

英語の Case は上に述べた三つの役目に從ひ三種に分ち。

(1) の樣に直接間接を問はず Verb の Subject（主詞）たる位置にある時はこれを Nominative Case（主格）の

tēach'er's（ティーチァズ） nŏm'-ĭ-nā-tĭve（のミナティヴ）

Noun といひ。

(2) の樣に Verb の Object（目的詞）たる位置にある時はこれを Objective Case（目的格）の Noun といひ。

(3) の樣に Adjective（形容詞）同樣の役目をする時はこれを Possessive Case（所有格）の Noun といふ。

英語の Noun は Possessive Case の外は Case に依て語を變化する事はない。即ち前の (a) 以下 (g) 迄の例を比較して見ても teacher, book, boy 共總て Verb の Subject であつた時も Object であつた時も同一で、唯 (g) の例に teacher が teacher's と變化して居る、それは Possessive だからである。Possessive Case に於ける變化の規則は次に說明する。

所が日本語は英語に例のないテニヲハといふものがあつて、それが名詞の語尾につき

(1) ハ、ガ、デのテニヲハが附けば主格

(2) ヲ、ニ、ヘ、トのテニヲハが附けば目的格

(3) ノのテニヲハが附けば所有格

といふことになり、先生は，先生が，先生では主格、先生のは所有格、先生を，先生に，先生へ，先生とは目的格と大體定まつて居る。だから英語も日本語に譯して見ると自然其れに附屬のテニヲハが Case（格）により變るからそれに依て何の Case（格）かは推測が出來る。

ob-jĕc'tive(オブゼクティヴ) poş-şĕs'sive(ポゼッスィヴ)

12. Possessive Case（所有格）の作り方

上に述べたる通り Nominative(主格) と Objective(目的格) は Noun の形には少しも變化なく、唯 Possessive（所有格）の時のみ形が變るのであるから、其の變り方を研究すれば、それで Noun の Case の變化は全部研究が出來たといつても然りである。

Possessive を作るには普通 Noun の語尾に ('s) を附けるのである (') 符はこれを Apostrophe といひ、('s) は Apostrophe S と讀む。例へば

主格及目的格	girl	teacher	man	child
所有格	girl's	teacher's	man's	child's

Possessive Case を作る方法はこれだけだと實に簡單で有り難いが、悲しや又例の例外がある、尤もそれも他の場合とは割合に少いから比較的有り難いと言へば言はれる。

例外の場合とは次の三つである。

(1) 語尾が s の複數名詞には單に (') 符だけを附ける。例へば

girls' school（女學校），the teachers' room（教員室）。

注意 1 例し s で終らぬ複數名詞には矢張 ('s) を附けねばならぬ。併へば

The men's clothing（おとなの着物），the children's shes（小供の靴）。

a-pŏs'tro-phe（アポストロフィ） room（ルーム） clōth'ing（クロウジング） shoes（シューズ）

注意 2. s て終ても單數には規則通り ('s) を附けねばならぬ。だから James's shoes の如くいふ。

(2) 語尾が sas, ses, sis, sos, sus ならば單數名詞でも ('s) を附けるに及ばず單に (') 符だけでよい。例へば

Moses' laws（モゼスの法律）, Jesus' teaching（ジーサスの教訓）。

注意 上の注意 2 の如き單に最後の一つだけ s のものはこの規則に入らぬ。

(3) 單數名詞の語尾が s 又は ce で、其次に來る語が sake（……爲め）である時は特に ('s) を附けず單に (') 符の儘にする。例へば

for concsience' sake（良心の爲めに）, for goodness' sake（善の爲めに）。

* * * * * * *

Compound Noun（熟語名詞）の Possessive Case（所有格）は總て語尾に ('s) を附ける。前に Number（數）の時に Compound Noun の複數は其中の主要語を複數にするといつたが、Possessive Csse の方は主要語でなく、單に全體の語尾に ('s) を附けるのたからあれとこれとを混交せぬ樣にせねばならぬ。例へば

His father-in-law's fortune.〔彼の養父の財產〕。

The Emperor of Japan's palace.〔日本天皇の宮城〕。

* * * * * * *

Jāmes'ṣ(jām'ṣĭṣゼィムズィズ) Mōṣ'eṣ(モゥセズ) Jē'ṣus(ヂーサス) sāke(セィク) gōōd'ness(ぐットネス) cŏn'science(shĕns)(こンセンス) fôr'tune(ふォーチン) păl'laçe(ぱレス)

二つ以上の Noun が and で結合された時兩方の Noun に ('s) のある時と、最後の一つにのみ ('s) のある時とで大變意味が替るからよく注意せねばならぬ。總てに ('s) のある時は總ての人の別々の所有物で、最後にのみ一つ ('s) のある時は總ての人の共有物を示すのてある。例へば

別々の所有	全體の共有物
These are Taro's and Jiro's balls.〔これは太郎のボールと次郎のボールだ〕。	These are Taro and Jiro's balls.〔これは太郎と次郎共有のボールだ〕。
Taro's, Jiro's and Saburo's balls are all good.〔太郎のボールも次郎のも、三郎のも皆上等だ〕。	Taro, Jiro and Saburo's balls are all good.〔太郎次郎三郎共有のボールは皆上等だ〕。

* * * * * * *

Nouns in Apposition（同格名詞）の Possessive Case 例へば「僕は兄の太郎の辭書を持つて來た」といふ中に兄と太郎とは同一人を示す語で兩方とも同一の Case（格）にあるから、これを Nouns in Apposition（同格名詞）といふ。斯かる同格語の Possessive Case には ('s) は何れに附けてよからう。兄にか、太郎にか、それとも兩方か。

斯かる場合には二つ並んで居る Noun の後にある方に ('s) を附けるのである。即ち上の邦文ならば。

ap-po-ṣĭ'tion(アッポズィシヤン)

I brought my elder brother **Taro's** dictionary てよい。

序に言つて置くが Nouns in Appossition（同格名詞）は獨り Possessive Case に限らない、他の Case にもある。例へば

Bakin the **novelist** became blind.

〔小說家馬琴は盲目になつた〕。

これは Nominative Apposition の例である。

I like Bakin the **novelist**.

〔私は小說家馬琴が好きだ〕。

これは Objective Apposition の例である。

3. Possessive Case の意義

今まで例に出した Possessive Case（所有格）は大抵「……の所有物」といつた風の所有主を示す例であつたが、實際は Possessive Case はこの所有主を示す外、尙二三別の意義にも遣ふことが出來る。即ち

1. 書籍の著者、器械の發明者等を示すに用ゐる。例、Webster's Dictionary, The Eigo-kenkyusha's English Grammar（以上著者を示す）。Watt's steam-engine（ワットの蒸汽機關、發明者を示す）, Newton's principles（ニユートンの學說、矢張發明者を示す）。

brôught(ブロート) ĕld'er(えルダ) dĭc'tion a-ry(でィクシャナリ) nŏv'el-ĭs(のヴェリスト) blīnd(ブラィンド) Wĕb'ster(うェブスタ) Wa̤t(ウォット) stēam-ĕn'gĭne(スティームえンヂン) New'ton(にュートン) prĭn'cĭ-ples(ぷリンスィプルズ)

2. 使用の目的を示すに用ゐる。例、A girls' school（女學校、即ち girls を敎ふる目的に使用する學校）, a children's hospital（小兒科病院、即ち小供の病氣を治療する目的に使用する病院）, an athletes' shirt（運動家用のシャツ）, watch makers' glass（時計師用の眼鏡）。

3. Abstract Noun（無形名詞）の前に附けて其中に含まれて居る動作を爲すものなることを示すに用ゐる。例、my father's return（我父の歸宅、歸宅する動作は父が爲すを示す）, a child's birth（小供の出產、birth する動作は child がすることを示す）, a baby's death（赤ン坊の死亡）, the minister's resignation（大臣の辭職）, Taro's success（太郎の成効）, O-Hana's failure（お花の失敗）。

3. Possessive Case の用法

Possessive Case（所有格）の Noun を遣ふことの出來るのは人間と動物にのみ限るを通則とする。だからそれ以外例へば

The house's roof（家の屋根）, the town's street（都邑の街）, the garden's fruit（庭の果物）, the cottage's door（小舍の戸）

などいふことは出來ぬ、何故といふに上例に Possessive

hŏs'pĭ-tal(ほスピタル) ăth'lētes' shīrts(あスリーツ、シャーツ) wa̤tch-māk'ĕr(ウォッチめィカ) re-tūrn'(リたーン) bīrth(バース) dĕ*a*th(デス) mĭ-nĭs-tĕr(みニィスタ) rĕs-ĭg-nā'tion(レスィグねィシャン) sŭc-çĕs'(サクセス) fāil'ure(ふェイリュア) town(タゥン) strēet(ストリート) gär'den(がードン) frṳit(フルート) cŏt'tag*e*(かッテヂ) dō*o*r(ドゥア)

Case に遣つた Noun は總て人間や動物以外のものであるからだ。

總て斯る人間及び動物以外の物の Possessive Case を書くには of といふ Preposition（前置詞）を遣つて

The roof of the house, the street of the town, the fruit of the garden, the door of the cottage.

といふ風に書かねばならぬ。

人間及び動物の Posssessive Case は ('s) を遣つても上例通り of を遣つても何らでもよい。即ち

Taro's father（太郎の父）, the man's shoes（あの男の履）, the horse's tail（馬の尾）, the dog's paw（犬の足）としても、又

The father of Taro, the shoes of the man, the tail of the horse, the paw of the dog としても何れでもよいのである。

例外　斯く Possessive Case は人間及び動物外以には遣はれぬを通則とはするが、例により又二三の例外、即ち人間でなく動物でないもので Possessive Case を遣ふことの出來るものがある。それは次の通り。

(1) Personified Object（人間に擬したる物）。一例へば

Fortune's favourite（運命の寵兒）, **Sorrow's** tears（悲哀の涙）, **England's** heroes（英國の英雄）, **Nature's** beauty（自然の美）。

tāil(ティル)　pa̱w(ポー)　pēr-sŏn'ĭ-fied(パーそニィファイド)　fôr'tune(ふォーチュン)　fā'voūr-ĭte(ふェイヴァリット)　sŏr'row(そロ)　tēar(ティーア)　ē'roẹs(ひーロズ)　nā'tur(ねィチァ)

この太き字體の Noun は人間に擬したる用法である。文法上こんな用法を Personification（擬人法）といふ。擬人せられた Noun は Capital Letter（大文字）で書くが通則だが、さうしてない例も澤山ある。

(2) 時間、空間、及び重量を示す名詞一例へば

時間—a day's journey（一日の旅）, two months' holidays（二ヶ月の休暇）, yester-day's dictation（昨日の書取）, to-day's paper（今日の新聞紙）。

空間—a boat's length（一艇身の長さ）, a hand's breath（掌の廣さ）, a hair's breath（毛一本の隙間、間一髪）, a needle's point（針頭）。

重量—a *kan's* weight（一貫目の重さ）, two pounds' weight（二封度の重さ）。

(3) 或る壯嚴な意味を含む名詞一例へば

The sun's ray（太陽の光線）, heaven's will（天の意志）, truth's triumph（眞理の勝利）, ocean's roar（太洋の咆聲）, duty's call（義務の聲）, river's bank（河の堤）。

(4) 最も普通に使用する phrase（句）で語調がよくなる場合一例へば at his wit's end（策に窮して）, at his finger's end（指先で、容易に）, to the journey's end（旅の

pēr-son-ĭ-fi-cā'ti'on(パーソニフィけィシャン)　căp'ĭ-tal(かピタル)　lĕt'ter(れタ)　joūr'neẏ(ぢァーニィ)　hŏl'ĭ-dayẹ(はリデェズ)　bōat(ボォト)　lĕngth(レンクス)　brĕath(ブレス)　hâir(ヘア)　nē'dle(にィードル)　point(ポィント)　weight(ウェイト)　poundẹ'(パゥンヅ)　rāy'(レィ)　hĕav'en(ヘヴン)　truth's(トルース)　trī'umph(トらィアムフ)ū'cean(shân おゥシャン)　rōar(ロゥーア)　băṇk(バンク)　phrāẹe(フレィズ)　wĭt's(ウィッツ)　fiṇ'gēr'ẹ(ふィンガズ)

終るまでに), to the boat's crew（舟子に), with a stone's throw（石を投ぐれば届く程の所に)。

(4) Gerund（動名詞、語尾に ing がある動詞で「……する事」と名詞の意味に遣はるゝものをいふ、詳しくは動詞の所に説明しよう）の前一例へば

On the bell's ringing（鐘が鳴つたので), of the ceremony's being over（式の濟んだ事をば), at his cane's having broken（杖の折れてしまつたのを)。

* * * * * * *

5. 特に注意すべき Possessive Case

1. Possessive Noun が次の例の通り、後に Noun なしの儘に遣はれて居ることかある。

(1) I am going to Ito's.

(2) I bought this book at Sanseidō's.

(3) He went to the shoe-maker's.

これは (1) Ito's house, (2) Sanseidō's store, (3) shoe-maker's shop と house（家), store（店), shop（店）が略されて居るので、從て意味は

(1) 私は伊藤の家へ行く所だ。

(2) 私は此本を三省堂の店で買つた。

crew(クルー) thrōw(スロウ) Gĕr'ŭnd(ゼランド) bĕl/s(ベルズ) rĭng'ing(リンギンク) çĕr'e-mo-ny's(セリモニィズ) bē'ing(ビーインク) ō'vĕr(オウヴァ) cāne's(ケィンズ) hăv'ing(ハヴィンク) brōken(ブロウクン) bôught(ボート) stōre(ストア) shŏp(ショップ)

(3) 彼は靴屋の店へ行つた。

である。總て上の三語（外に palace=宮殿, church 寺院）は Possessive Noun の後には略してよい、略する事が屢々ある。

併し I am going to his house. の如き代名詞の Possessive Case の次の house 等は決して略すことは出來ない。

* * * * * * *

II. 英語英文によく次の樣な句を見ることがある。

A friend of my brother's.

序ながら斯んな風の句の用法を次に説明して置かうと思ふ。既に of……といへば前に言ふ通り一種の Poseessive Case（所有格）であるに、又 brother's に Possessive が重複して居るこれは何ういふ譯であらう。

それは斯う解釋すればよい、意味は「私の兄弟の或る一人の友人」といふことであるが、單にこれを My brother's friend. といつたゞけでは「或る一人」といふ意味は出て居ない、それだといつて「或る一人の」に對する語即ち不定冠詞の a を入れようと思つても (1) A my brother'e friend. も變だし、(2) My brother's a friend. も變だ。何故といふに、Possessive Case の Pronoun（代名詞）例へば my の如き your, his, her, its, their の如きが Noun に附いて居る時は Article は附けられないのが規則であるから上の (1) 即ち A my brother's

chŭrch(チャーチ)

friend. は文法上許されない句法である。といつて同一の Noun を説明する Article と Adjective（形容詞）とある時は Article の位置は Adjective に先たせねばならぬといふ規則があるから（これ等の規則は總て Article の條に詳說す）上の (2) 即ち My brother's a friend も文法上許すことの出來ぬ文章である。仕方がない、何か別の書き方を考へねばならぬ。

そんな所から遂に上の

A friend of my brother's.

といふ文體が出來る事になつたのである。て其意味は

A friend of my brother's *friends*.

〔私の兄弟の友人中の一人〕。

即ち of は「の中の」意味である。

この例より推せば次の樣な文體も解るであらう。

Some friends of my brother's.

＝私の兄弟の友人二三人。

The friend of my brother's.

＝私の兄弟のあの友人。

幾人もある中の特にあの友人と指定する場合。從て

A watch of Mr. Yamada's.

は Mr. Yamada は幾つも時計を持つて居る、其中何れでも一個の時計の意味であり。又

The watch of your father's.

は「君の父の所有するあの時計」と特示する場合である事も解るであらう。

英語の friend といふ語は日本語で「友人」と假りに譯して居るが、其範圍は日本語の「友人」よりは廣い。父、母、兄弟、姉妹其他毎日接する家族の者を始め、先生の如きに至るまで總て friend といふ語の中に含まれて居る、だから人は生れながらにして日本語の所謂友人なるものなきも、英語の所謂 friend なるものかはある譯だ、父及び母即ち其赤ン坊の friend である。だから「彼は私の友人です」などいふ場合、必ず

He is my friend.

などいつてはならぬ、必ず

He is one of my friends.

又は He is a friend of mine.

といはねばならぬ。mine といふ語は Pronoun の所で詳しくいふが「私の（もの）」といふ意味である。

* * * * * * *

Case の一覽表

Case（格）	1. Nominative（主格）	1.	Noun の形に變化なし。
		2.	文中の或る Verb の主題となるもの、又は主題と同一物をいふ（日本語ならば語尾に ハ、ガ、デの附くもの）。
	2. Possessive（所有格）	1.	他の Noun と結附きて Adjective の如き役目をなす物をいふ（日本語ならば語尾に ノの附くもの）。
		2.	Noun の語尾に 's を附す（特例三四あり）。
	3. Objective（目的格）	1.	文中の或る Verb の働きの的などゝなるものをいふ。（日本語ならば語尾にヲ、ニ、への附くもの）。
		2.	Noun の形に變化なし。

Noun の Modification（變化）の一覽表

- 變化
  - I. Number（數）
    - 1. Singular（單數）
    - 2. Plural（複數）
      - 1. 規則的變化をなすもの
        - 1. 單數の語尾に s を附す
        - 2. 同上 es を附す
        - 3. 同上少しく語尾を變じて es を附す
      - 2. 不規則的變化をなすもの
  - II. Person（人稱）
    - 1. The First—話し手自らを指すもの（第一人稱）
    - 2. The Second—話す對手を指すもの（第二人稱）
    - 3. The Third—話の中に出づる人又は物を指すもの（第三人稱）
    - 總て Noun は Person に依り語の變化をなさず。
  - III. Gender（性）
    - 1. Masculine（男性）
    - 2. Feminine（女性）
    - 3. Common（通性）
    - 4. Neuter（中性）
  - IV. Case（格）
    - 1. Nominative（主格）} Verb の主題
    - 2. Possessive（所有格）} 他の Noun を形容するもの（普通語尾に 's を附す）
    - 3. Objective（目的格）} Verb 等の目的

第五

Pronoun（代名詞）

1. Pronoun（代名詞）の性質

Pronoun（代名詞）の pro は for といふ意味の接頭語である、從て Pronoun といふ名稱は for Noun（名詞の代り）といふことである。

つまり同一の文章中幾度も幾度も同一の Noun を繰

返へす不體裁を避くる爲めに Pronoun は出來たのである。例へば

山田君が庭の中で一疋の蛇を見た、君は其蛇は自分を噛みはせぬかと思つたから、手に携へて居た杖でそれを打殺してしまつた。

といふことを、一つも Pronoun を遣はないで書いて見ると斯うなる。

Mr. Yamada saw a snake in the garden, *this snake Mr. Yamada* thought would hurt *Mr. Yamada*. *Mr. Yamada* killed *the snake* with a stick, *this stick Mr. Yamada* had in *Mr. Yamada's* hand.

隨分見苦るしい厭な文章である。所がそれを Pronoun を遣つて書き直すと斯んなに出來る。

Mr. Yamada saw a snake in the garden, *which he* thought would hurt *him*. *He* killed *it* with a stick, *which he* had in *his* hand.

餘程簡潔で口調もよくなる。つまり Pronoun の用法は斯んな風に Noun の反覆を避けて文章を簡潔に調子よくする點にあるのである。

既に斯く Pronoun は Noun の代用物たる以上、之を使用するに當つて次の三條件を守らねばならぬ事は蓋し自然の勢である。

第一　Pronoun は Noun の代りに用ゐらるゝものなれ

Mr.＝Mĭs'ter（ミスタ）　sạw（ソー）見た　snāke（スネイク）　gär'den（ガードン）　thôught（ソート）　wọuld（ウッド）　hûrt（ハート）　kĭlled（キルド）　stĭck（スティック）　hănd（ハンド）　whĭch（ホイッチ）

ば，其代表したる Pronoun と代表されたる名詞とは同一物でなければならぬ。

第二　Pronoun は前に述べられたる名詞の代りを務めて居るものなれば，前に述べられたる名詞があるのでなければ何の關係もなく、突然と現はれて來てはならぬ。

第三　Pronoun は Noun の代理をするものなれば、其代表せられたる Noun と其數に於ても，其性に於ても又其人稱に於ても同一でなければならぬ。

以上の三條件に違背しては代理が代理にならぬ、Pronoun たる役目は出來なくなる。

斯んな次第であるから Noun と Pronoun とは其語の體裁こそ代れ、Number（數）に於ても Person（人稱）に於ても Gender（性）及び Case（格）に於ては殆ど同一の性質用法である。既に Noun に於て此等 Modification（變化）を研究した吾人には別段項目を分ち說明を詳くして再び Pronoun の Modification を說く必要はない。それ故以下各種類の Pronoun 毎に其特徵をのみ說明して行けばよいと思ふ。

2. Pronoun の種類

Pronoun は通常これを五種に分ける。即ち

(1) Personal Pronoun（人稱代名詞）

　　例。 I, you, he, she, they, my, me 等

(2) Possessive Pronoun（所有代名詞）

　　例。 mine, yours, theirs 等

pēr'son-al(パーソナル)

(3) Adjective Pronoun（形容代名詞）

　　例。 this, these, that, such, other, one 等

(4) Relative Pronoun（關係代名詞）

　　例。 who, which, what, that, as 等

(5) Interrogative Pronoun（疑問代名詞）

　　例。 who? which? what? 等

以上の中 Adjective Pronoun の事を文法家に依ては Demonstrative Pronoun（指示代名詞）と名附ける。齋藤秀三郎氏の如き現に其文法書に此名を採用して居る。

又齋藤氏等二三の文法書には以上の五種中の (2) Possessive Pronoun（所有代名詞）を Personal Pronoun の中に入れて一所に說く事とし、總數四つに分類して居る。Nesfield 氏の文法書も其通りである。併し本書は神田乃武氏等の system（組織）に倣ひ上の通り五つに分類したのである。

I. Personal Pronoun（人稱代名詞）

1. Personal Pronoun の性質及び變化

此種の Pronoun を Personal と名附る譯は、他の四種の Pronoun は總て Person（人稱）に依て變化せぬが、この種のものに限り the First Person（第一人稱），the Second

Ad'jĕc-tive(あヂクティヴ)　rĕl'a-tive(れラティヴ)　in-tĕr-rŏg'a-tive(インタろガティヴ)　de-mŏn'stra-tive(ディもンストラティヴ)　Nĕs'field(ねスフィルド)　sȳs'tem(すィステム)

Person (第二人稱), the Third Person (第三人稱) と各形を變化する。それてこの名が附いたのである、Personal といふ語は Person といふ Noun の Adjective の形て（丁度 Grammer は Noun で文法 Grammatical は Adjective で文法の といふと同樣）Personal は 人稱の といふ意味である。

定義—**A personal Pronoun is one that denotes grammatical person.**

〔人稱代名詞は文法的人稱を示すものなり〕。

Person (人稱) の三種は既に Noun の時に說明した。つまり第一人稱は 自稱 で第二人稱は 對稱 第三人稱は 他稱 である。

それから Personal Pronoun は又 Number (數) により、Case (格) により、第三人稱の單數は Gender (性) にもよつて變化する。總ての變化を一覽表にすると斯うである。

			主格	所有格	目的格
第一人稱、各性共	單數		I	my	me
	複數		we	our	us
第二人稱、各性共、單、複數共			you	your	you
第三人稱、	單數	男性	he	his	him
		女性	she	her	her
		通性及中性	it	its	it
	複數、各性共		they	their	them

即ち第一人稱は Number (數) と Case (格) とにより變化

thêir(ゼア)

はあるが、Gender (性) の變化はない。男性、女性、總てに通用する。

第二人稱は Case (格) により變化する許り、それも主格と目的格は變化なく、唯所有格が變る許りである。尤も昔は主格には別に ye といふ語を遣つたのであるが、何時の頃よりか ye は廢れて目的格の you が其代用をする事になつた。

其上第二人稱は Gender (性) の變化は勿論、Number (數) の變化もない、單數の（汝は、汝の、汝を）にも you, your, you. 複數の（汝等は、汝等の、汝等を）にも you, your, you を遣ふ。そしてそれに伴ふ Verb も多くの場合は 例へば

The deer is running. 〔鹿が走る〕(單數)

The deer are running. 〔鹿等が走る〕(複數)

の如く deer は單複により變化のない Noun だが、それに伴ふ Verb の方が、其 deer が單數を示す時と複數を示す時とにより is, are と變化し、それで其處の deer の數を明かにするが、獨り you の時に限つては

You are running. 〔汝は走る〕(單數)

You are running. 〔汝等は走る〕(複數)

と單複により Verb の形を替えない、全然文字の上では單複の區別は明かでないのである。

これは古代の英語には第二人稱の單數名詞には別に thou (主格), thy (所有格), thee (目的格) といふ語があつ

yē(イー) thou(ザゥ) thȳ(ザィ) thēe(ズィー)

て、you, your, you（イヤ詳しく言へば ye, your, you）は獨り複數を示すことにのみなつて居た。それが丁度 ye が you と何時の頃から變つたと同樣、變つてしまつて今では thou, thy, thee は廢れ、you, your, you が單複兩方の場合に兼ね遣はれ、從てそれに伴ふ Verb 迄も複數のものが其儘單數の場合にも遣はれて居るのである。

尤も ye も thou, thy, thee も今は全然遣はれぬといふのではない。日常の會話或は文章には遣はれぬが、特に莊嚴なるべきもの、例へば詔勅、祈禱の語或は詩歌などには依然遣はれて居る、又古書には勿論多く散見する。

第三人稱の單數は Case（格）によりては勿論（唯女性の所有格と目的格とは變化なく一樣に her を遣ひ、中性は主格と目的格とが變化なく共に it を遣ふ）、他の第一、第二人稱の何れにも似ず性によつて變化する、男性は he, his, him, 女性は she, her, her, 中性及び通性は it, its, it と（だから child や baby, 又は parent の如き通性の Noun を受くる語は it, its, it である、人間の child や baby が it は變だと思ふ人もあらうが、實際 child や baby の儘では男か女か判然せぬから止むを得ず、何れにも通用する it を遣ふのである）。

單數はこの通り性により變化したが、複數の方はまた第一人稱や第二人稱と同じく性の變化をせぬ、男性、女性中性を通じて總て they, their, them と格の變化をする許り。

2. Personal Pronoun の特別用法

Personal Pronoun の用法は言はずとも御承知であらう。

(1) I, my, me は話す自分の事

(2) we, our, us は話す自分等の事

(3) you, your, you は話を聞き又は讀む對手一人又は二人以上の事（人間に限らない）

(4) he, his, him は話の中に噂さるゝ男性の人間又はそれに准ずべき者一人の事

(5) she, her, her は同上女性の人間又はそれに准ずべき者一人の事

(6) it, its, it は同上人間以外（又は人間でも通性の Noun 例へば baby, child 等を受ける）のもの一個の事

(7) they, their, them は男女性の人間又はそれ以外のもの一切を通じて二人又は二個以上の事

と、これが普通の Personal Pronoun（人稱名詞）の用法である。

所が Personal Pronoun は此普通の用法の外、又次の如き特別の役目に遣はれる事がある。

(1) we, our, us を特に話す自分等（其場に居る）のみならず、一般的に「我々人間」といふ意味に遣ふことがある。例へば

We must obey our parents.

〔我々人間は其兩親に服從せねばならぬ〕

---

o-bey（オベイ）

We are apt to despise those who are below **us**.

〔我々人間は我々より下の人々を輕んずる事をよくする、往々輕んじ勝てある〕

(2) we, our, us を「我々國民」「我々團體」の如く、或る一團體全部を指すに遣ふ事がある。

We, Japanese, are always proud of **our** fatherland.

〔我々日本人は常に我が祖國を譽りとする」

(3) 一國の君主は常に I, my, me を遣はず we, our, us を遣ふ。

Know ye, **Our** subjects.

〔朕汝臣民に告ぐ〕

(4) 新聞雜誌等の論文に、丁度日本語に「吾輩」「吾曹」など書く樣、記者は常に we, our, us を遣ふ。

We must tell the reason to **our** readers.

〔吾人は讀者に其理由を陳告せざるべからず〕

(5) you, your, you も亦 we, our, us の (1) (2) の特別用法と同じく「一般人間」「一般國民」「一般團體員」といふ意に遣ふことがある。

You should always be prepared for misfortune.

〔人間は不運に對して常に用意して置かねばならぬ〕

この you は we 又は one と直しても同じであつて、何れも「人間は總て」の意。

ăpt (アプト) de-spīse′ (デスパイズ) be-lōw′ (ビろゥ) proud (プラゥド) fā′ther-land(ふァーザランド) rēa′son(りーズン) rēad′ĕrs(りーダズ) shou′ld (シュッド) ȧl′ways(おールウェズ) pre-pâred′(プリペァド) mĭs-fôr′tune(ミスふォーチュン)

What do **you** call this flower in English?

〔此花を英語では何といひますか〕

この you も we 又は one にしても差支ない、「君等英人は」「君等英語を話すものは」の意。

(6) he を「……の人は誰れでも」といふ意味に遣ふことがある。例へば

He who is diligent, will surely succeed.

〔勤勉の人は誰れでも必ず成効す〕

これは Anyone who is……と同じことである。若しこれを Those who are……とすると「勤勉な人達は……」となり、誰れでもとの意はなくなる、つまり意味が弱くなる。

(7) they を「世間の人々は」又は「……の人々は」の意味に遣ふ事がある、例へば

They say that he is going to resign his post.

〔彼は其職を辭すつもりだと世間の人々は言つて居る、……との噂だ〕

Why do **they** not establish a school here?

〔何故當局の人々は此所に學校を立てぬか〕

They export a great deal of rice every year.

〔其商業の人々は毎年夥しき米を輸出する〕

これ等の文を若し Passive Voice (受働態) の文態（「…

---

call′(コール) flow′ĕr(フらゥア) sūre′ly(しュアリ) suc-cēed′(サクすィード) an′y-one(えニィワン) thōse(ゾゥズ) re-sīgn′(りざイン) pōst(ポゥスト) es-tăb′lĭsh(エスたブリッシ) ex-pōrt′(エクスぽゥト) a greāt dēal(ア. グレイト・ディー) ĕv′ĕr-y(えヴァリ) păs′sīve voiçe(パッスィヴ. ヴォイス)

…せらる」といふ文態の事、詳しく Verb の條に說く）に書き直す時はこの they は總て省略する

It is said (**by them**) that he is going to resign his post.

Why is not a school established (**by them**) here?

A great deal of rice is exported (**by them**) every year.

の樣に Passive Voice の時は they が by them と變化するが總て其れは省いてしまう、即ち上に（ ）のしてある理由は省くべきものなることを示す爲めてある

(8) it といふ語には澤山特別の用法がある。其一に天候、距離、時間等の事をいふ時には其 Noun を遣はず始めから it を遣ふが通例になつて居る。

It (*the weather*) is very fine to-day.

〔今日は甚よい天氣だ〕

It (*the hour*) is just ten.

〔丁度十時だ〕

It (*the distance*) is about two miles.

〔二哩位だ〕

の例にて見らるゝ通り本來ならば（ ）の內の語を遣ふ所を、單に it で代用させて置くのである、だから此書の Pronoun の一般の性質を說いた所に

Pronoun は前に述べられたる名詞の代りを務めて居るものなれば、前に述べられたる名詞があるのでなければ、何の關係もなく、突然と現はれて來てはならぬ。

といつた通則に違反した用法である。斯んな風に普通の

wĕath'er(ウェザ) fīne(ふァイン) dis'tançe(ディスタンス)

文法の規則通りにせぬ文章の書き方が英語には澤山ある。それは英語の Idiom（慣用法）といつて Grammar（文法）と並び行はるゝもの、文法書に並びて說明すべきものである。本書などにも「特別の何々」として說明するものは總てこの Idiom（慣用法）の方である。

尙ほ上の如き it は特に「それは」と譯するに及ばぬ「それは丁度十時です」などゝいつてはいかぬ。

(9) it は又特に文章の意味を强むる爲めに遣はれる事がある。次に普通の文と it で强くせられた文とを對照して二三の例を出して見よう。

普通の文體	强き意味の文體
A **boy** killed a frog. 〔或る小供が蛙を殺した〕	**It** was a **boy** that killed a frog. 〔蛙を殺した者は（別人でなく）一人の小供でした〕
I am called Yoshida. 〔私は吉田と申します〕	**It** is **I** that am called Yoshida. 〔吉田と申すのは私です〕
He returned **late in the night.** 〔彼は夜遲く歸つた〕	**It** was **late in the night** that he returned. 〔彼の歸つたのは夜遲くてあつた〕

斯んな風の特に不用の語を遣つて意味を强める方法を Emphatic Construction（强意の文態）といふ。

(10) it は phrase（句）や clause（節）が文章の subject

id'i-om(いディオム) re-tūrned'(りたーンド) lāte(レイト) night(ナイト) em-phăt'ic(エムふァティック) con-strŭc'tion(コンストらクシャン) phrāse(フレイズ) clause(クローズ)

（主詞）又は object（目的詞）となるを代つて其地位に就く事がある。例へば

To tell a lie is not right.

〔虛言を言ふのはよくない〕

Trying to do so is no use.

〔さうしようとして見たつて無駄だ〕

といふ文の中黑字のものはそれて一つの纏つた意味を表はす phrase（句）で、それが文章の subject（主詞）になつて居る。所がこの文は次の樣に it を代りに subject（主詞）の地位に置き、自分は後に引き下がつて次の樣にすることが出來て、文章の體裁もそれてぐつとよくなる。

It is not right to tell a lie.

It is no use trying to do so.

又 That he is died is true.

〔彼の死んだ事は實說だ〕

If he is live is uncertain.

〔彼が生きて居るが何うか不確だ、生死の程は判然せぬ〕

の內の黑字はあれて一つの纏つた clause（節）をして、其文の subject（主詞）となつて居るのてあるが、上例の通りこれらも it を主詞にして次の通り書き替える事が出來て、文體が見よくなる。

It is true that he is died.

It is uncertain if he is live.

lie（ライ） right（ライト） trying（トライイング） true（トルー） un-cer'tain（アンすァーティン）

同樣に phrase（句）や clause（節）が文の object（目的詞）となつて居る時も it に代表せらるゝことがある。

I find it impossible to run.

〔私は走る事の出來ないに氣が附いた〕。

これは本體ならば

I find running (=to run) is impossible

てあるを、it が to run といふ phrase に替つて find といふ Verb の object たる地位に就き、本當の object たる to run は緩々後に出る事になつたのである。又

I find it difficult to study English.

=I find English study difficult.

〔私は英語の研究の六つかしいに氣が附いた〕。

これも同じく it が to study Eaglish なる phrase を代表して find の直接の object となつて居る例である。

I think it quite natural that he says so.

=I think his saying so quite natural.

〔彼のさう言ふのは全く自然てせう〕。

これは that he says so といふ clause を it が代表して think の直接の object になつて居る例である。

尙ほこの類の it の用法は詳細「英作文の話」に說明する考てある。

3. Personal Pronoun の順序

同一の文章中に Personal Pronoun を幾つも同一の Case（格）に並べる時には何れを先にし、何れを後にすべきてあるか。

im-pŏs'si-ble（イムパッシブル） dif'fi-cult（ディフィカルト） quite（クワイト） năt'u-ral（なテュラル） says（sĕz セズ）

其原則としては

第一　2nd Person（第二人稱）
第二　3rd Person（第三人稱）
第三　1st Person（第一人稱）

である。だから

You, he and I
Both you and I
Either you or he

などするがよい、決して He, you and I だの I, you and he など丶並べてはならぬ。

4. Compound Personal Pronoun（熟語人稱代名詞）

Componnd Personal Pronoun の事を文法家により Reflexive Personal Pronoun（反射的人稱代名詞）といふ。それは此種の代名詞は總て「……自身は」「……自身の」といふ風にそれ自らの事を指すこと、丁度光線が反射して再び舊地位に照り還すに似て居るといふので名附けたのである。

この種の代名詞の一覽表は斯うである

	主格（——自身は）	所有格（——自身の）	目的格（——自身を、に）	
第一人稱	myself	my own	myself	單
第二人稱	yourself	your own	yourself	單
第二人稱	(thyself)	(thy own)	(thyself)	單

bōth(ボウス)　ēi'ther(イーザ)　re-flĕx'ive(リフれックスィヴ)

第三人稱	男性	himself	his own	himself	數
第三人稱	女性	herself	her own	herself	數
第三人稱	中性	itself	its own	itself	數
第一人稱		ourselves	our own	ourselves	複數
第二人稱		yourselves	your own	yourselves	複數
第三人稱		themselves	their own	themselves	複數

即ち單數は總て或る代名詞の語尾に self 複數は selves（self と語尾が f 故 v に直し es を附す。名詞の數の所參照）を附けて主格、目的格とし、所有格だけは別に own といふ語を並べて遣ふ。

其 self や selves を附けられ又は own を並べられる語は第一、第二人稱は Possessive Case（所有格）の語で第三人稱に限り Objective Case（目的格）の語であるからこれは注意せねばならぬ。

それから you は單數複數に通じて同じであるがこの Compound（熟語代名詞）に限り單數の意味の you には self を附け、複數の意味の you には selves を附ける。これも他とは例が違ふから注意せねばならぬ、併し own の方は單複同一に your own である。

Compound Personal Pronoun は次の樣に二樣の用法を持つて居る。

(1) 人なり物なりが自分で自分に或る動作を仕掛けて居る時。
(2) 其代名詞を Emphasis（一層語勢を強める）時。

mȳ-sĕlf'(總て self の語尾にあるものは其方を強く發音すべし)　ōwn(オウン)
sĕlves(セルヴズ)　ĕm'-pha-sĭs(エムファスィズ)

第一種の例

1. I hid **myself**. （私は自分の身を隠した）。
2. We hit **our own** heads. （私等は自分で自分の頭を打ちました）。
3. You love **your own** work. （君は御自分の仕事を好んでなさる）。
4. The cats seated **themselves**. （あの猫は自分で席を占めた）。

第二種の例

1. I **myself** saw the lion. （かく申す私が實際其獅子を見たのです）。
2. You **yourselves** saw it. （あなた方御自分で御覽になつたのです）。
3. He **himself** wrote it. （彼が自分で書いたのです）。
4. The walls **themselves** fell. （壁は自然と倒れました）。

II. Possessive Pronoun

（所有代名詞）

諸君は英文を書くに當り、例へば

My **hat** is a nice **hat**.

〔僕の帽子は上等の帽子だ〕

としては同じ語、hat が二つ重つて拙いから、

My **hat** is a nice **one**.

とするか、又は

Mine is a nice hat.

とすべき事を御承知だらう。

My hat is a nice *hat*, but **your** hat is nicer than **my** hat.

は My hat is a nice *one*, but **yours** is nicer than **mine**.

とする方がよい事も御承知だらう。

この my hat（又は my one）の代りに遣ふ mine, your hat（又は your one）の代りに遣ふ yours の類を文法上 Possessive Pronoun（所有代名詞）といふのである。つまり Possessive Pronoun は「……のもの」と Possessive（所有物）を示す時、名詞の示す者の所有物ならば ……'s one（複數ならば……'s ones）とするを、代名詞が示す者の所有物たる時に用ゐる語である。例により一覽表を載せると斯うである。

單數及複數共

主格及び目的格共	mine ours	(thine) yours	his, her, its, theirs

この表で見る通り、Possessive Prououn は mine と thine の外は總て Personal Pronoun（人稱代名詞）の Possessive Case（所有格）の語尾に s を附けたものである、唯 his と its は元の形それ自らが既に語尾 s であるから特に新しく s を附けず元の形の儘で置くのである。

定義—A Possessive Pronoun is one that stands for the

nīçe（ナイス） nī'çēr（ナイスァ） mīne（マイン） thīne（ザイン） ours（アゥアズ）

thing possessed.

〔所有格代名詞は所有されたる物の代用をなす代名詞なり〕。

尙ほ注意すべき事は Possessive Pronoun には

(1) 所有格はない、mine は（私のものは）（私のものを）と主格及び目的格に遣はれるだけて、（私のものゝ）とは遣はれない。

(2) 單數及び複數の別がない、名詞の方は（——のもの）は——'s one,（——のもの等）は——'s ones と單數の別があるが、この代名詞の方にはそれがない。だから my hat も my hats も共に Possessive Pronoun に代用せば mine である。

念のために言ふが mine は（私のもの）ours は（私等のもの）で所有する人間の單複の區別はあるが、所有せらるゝものが mine は單數、ours が複數といふのでないから誤解してはならぬ。

* * * * * * *

A friend of mine 〔私の友人の一人〕。

The watch of yours 〔君のその時計〕。

の如き文體は Noun の Case を說くとき

A friend of my brother's.

The watch of Mr. Yamada's.

などいふ意味を詳解した、あれから容易に推量し得らるゝであらうと思ふ。

III. Adjective Pronoun.

(形容代名詞)

1. Adjective Pronoun の性質

文法家によつてこれを Demonstrative Pronoun（指示代名詞）といふことは既に說明した所である。つまり

This is my hat. 〔これは私の帽子です〕

That is not our school. 〔あれは私等の學校でない〕

の this, that は hat を代表し、school を代表して而かもそれ一語で一つの意味をなして居るから Pronoun であるが、

This hat is mine. 〔この帽子は私のです〕

That school is not ours.

〔あの學校は僕等の學校でない〕

の方では this, that の次に各 hat なり school といふ Noun があつて、それを形容するだけに過ぎないから、從つてこの方の this や that は Adjective（形容詞）である。

こんな風に同一の語で遣ひ方により代名詞とも形容詞ともなる語の事を代名詞になつて居る時は Adjective Pronoun（形容代名詞）といひ、形容詞になつて居る時は Pronominal Adjective（代名形容詞）と名附けるのである。日本語でいふと、これは，あれは などいふ時は前者で、この，あのなどいふ時は後者である。

定義—An Adjective Pronoun is one t

nature of an Adjective.

〔形容代名詞は形容詞の性質を有する代名詞なり〕。

此の種の語(代名形容詞と形容代名詞と兩方になる語)の主なるものは次の通りである。

英語	形容代名詞の時の譯	代名形容詞の時の譯
this	これ	この
these	これら	これらの
that	あれ、それ	あの、その
those	あれら それら	あれらの それらの
the former	前者	前者の
the latter	後者	後者の
both	兩方	兩方の
such	この樣な(もの)	この樣な
each	各	各の
either	各	各の
neither	各……ぬ	各の…ぬ
one	(或る)もの	或る
none	(或る)もの……ぬ	或る…ぬ
another	何か別のもの	何か別の
other	別のもの	別の
any	どれか	どれかの
some	いくらか	いくらかの
all	皆(のもの)	皆の
the same	同じ(もの)	同じの

以上の譯語は了解に便利の爲め大體の意味だけを示したもの、詳しい眞の意味は次第に說明して行かう。

尙ほ以上列擧した內 this, that, each, either, neither, another は常に單數、these, those, both は常に複數、其他は時に應じて兩方に遣はれるから特にこゝに一言して置く。

2. 主なる Adjective Pronoun の說明

(1) this と that

fôrm′er(ふォーマ) lăt′ter(らタ) bōth(ボゥス) sŭch(サッチ) ĕach(イーチ) ēi′ther(いーザ) nēi′ther(にィーザ) nŏne(ナン) an-ŏth′er(アなザ) ŏth′er(あザ)

(*a*) 日本の文法では、此種の代名詞を區別して次の三種にして居る。

近稱—これ (this)
中稱—それ (that 又 it)
遠稱—あれ (it)

近稱と言ふのは、Speaker (話し手) よりして最も近き場所にある者を指示した時に言ふのであり、中稱と言ふのは、Speaker よりして稍や遠き場所にあるものを指示した時に言ふのであり、又遠稱と言ふのは、Speaker よりして最も遠き場所にあるものを指示して言ふものである、故に this は最も近き者を指示し、that は稍遠きものを指し、又 it は最も遠きものを指すのである、但し上の表中にも示した通り、it は中稱の意味にも亦遠稱の意味にも使用せらるゝことを得る。且つ this と that とは相對稱した言葉であるが、it は that (中稱) の意味にも使用せられ又遠稱にも使用せらるゝ事が出來る、併し this や that は this boy, that boy と言ふ風に Adjective としても使用せらるゝも it は Adjective としては用ゐられぬからこれは Adjective Pronoun (形容代名詞) の中に入れないで、Personal Pronoun (人稱代名詞) の中に入れるのである。

(*b*) 前に述べた sentence (文) 又は clause (節) の中に二個の Noun があつて、次に其 Nouns を別々に代表せしめようと思ふ時、二つの內の前に出た方を that、後に出た方を this で代表せしめる。

I like the dog better than the cat ; **this** is not so faithful as **that.**

〔僕は猫より犬が好きが、これ（猫）はあれ（犬）程忠實でない〕。

(*c*) that は前に述べられた Noun の代表者となる。

The climate of Japan is milder than **that**(=*the climate*) of Siberia.

〔日本の氣候は西比利亞のそれ（氣候）より溫和である〕。

(*d*) this 及び that は it と同じく前に述べられたる clause（節）又は sentence（文）全體を代表さすことが出來る。

He always knows his lessons, **and this**(=**which**) shows how diligent he is.

〔彼は常に自分の課業をよく知つて居る。其事て彼れが如何にも勉强家だといふ事を示して居る。證據になる〕。

この this は He.....lessons 迄の clause 全體を代表して居る。

Please write him a letter, **and that** (=*and do so*) at once.

〔何うか彼に手紙を書いて下さい、それも直ぐに願ひます〕。

こゝの that は please.....letter の全 clause を代表して居る。

ōth'ēr(あざ) clī'mate(クライメト) mīld'ēr(まイルダ) Sī-bē'-ri-a(スイビーリア) lĕs'sonş(れッスンズ)

(*e*) like this, like that て thus（こんなに）又は so（あんなに）の意味になる。

The cat has scratched me **like this**(=*thus*).

〔猫が私をこんなに掻いた〕。

How have you been hurt **like that**? (=*so?*)

〔君は何うしてそんなに怪我したのか〕。

(2) **these** と **those**

この二つは this と that の複數、即ち一個のものを this, that が代表する樣に、二個以上のものを these, those が代表する。遣ひ方意義總て this, that に同じだから次に一二の例をだけ擧げて止めて置く。

His fables are interesting as **those**(=*the fables*) of Æsop.

〔彼の寓話はイーソップのそれら（寓話）の樣に趣味がある〕。

(3) **the former**(前者) と **the latter**(後者)。

これは上の this と that の (*b*) と全然同樣の役目をする。

I like the dog better than the cat ; **the latter** (=*this*) is not so faithful like **the former** (=that).

(4) **either** と **neither.**

「二つの内何らのもの」といふ時 either を用ゐ、「二つの内何らのものも……ぬ」と否定の時は neither を用ふ。即ち neither は not either である。

scrăt'ched(スクラッチト) thŭs(ザス) been(bĭn ビン) fā'bleş(ふェイブルズ) ĭn'tĕr-est-ing(いンタレスティング) Æ'sop(いーソップ)

You may take **either** of these two.

〔この二つの内何らを取るもよし〕。

No, thank you ; I will take **neither** (=I will not take either).

〔ありがたう、兩方とも取りますまい〕。

若し三つ以上のものゝ内どれかの時は any を使ふ。

You may take **any** of them.

〔この内どれを取つてもよろしい〕。

(5) **any** と **some**.

any は疑問文と否定文に用ゐ、「たれか」「どれか」の意. some は肯定文に用ゐ同樣の意味を表はす。

Are there **any** who can tell us ?

〔話せる人が誰れかあるか〕。

Yes, there are **some**.

〔ハイ、たれかあります〕。

(6) **one** と **none**.

(*a*) Personal Pronoun の特別用法の所で we や you が「世間の人々」になるといつたが、あれと同じ意味に one も使はれる。

One must not neglect **one's** duty.

=**You** must not neglect **your** duty.

=**We** must not neglect **our** duty.

=**Man** must not neglect **his** duty.

〔人間は其義務を輕んじてはならぬ〕。

neg-lĕct′(ネグレクト) dū′ty(デューティ)

注意すべきは one を主格とした時は其所有格は必ず one's (其の) とせねばならぬ事である。

(*b*) Have you *a knife ?*

Yes, I have **one**.

No, I have **none**. (=No, I have **not one**.)

の樣に indefinite (不定) の Noun を反覆する代りに one (否定には none) を使ふ。

此場合若し代表さるべきものが複數の時は one は語尾に s を附け ones として使はれる。

These are not good watches. Show me better **ones** (=watches).

〔これはよい時計でない。もつとよいのを見せてくれ〕。

(*c*) one に定冠詞 the を附し、the other と並用すると、上に述へた this と that の (*b*) の用法や the former, the latter の用法と同じく、前に出た二つの Nouns を代表する事に使はれる。

I like the dog better than the cat ; **the one** (=the former) is more faithful than **the other**(=the latter).

(7) **another** と **other**.

another は an+other=one other (今一つ別のもの) である。例へば

This is not enough ; please give me **another**.

〔これはいけませぬ、今一つ別のを下さい〕。

in-dĕf′ĭ-nĭte(インデフィニット) ones(wŏns ワンズ)

此場合別のものであればよい、別段に是非別のどれと指定するのでない。若しこれが the other と代つて

This is not enough; please give me the other.

〔この方はいけませぬ、何うかそちらの方を下さい〕。即ち別のどれと定つた時である。

もつと解りよい例を出すと、こゝに甲乙丙三個の書物があるとし、假りに其の中の一冊甲を弟に遣るとすると、其時弟は甲はいらない、乙丙の中ならどちらでもよいが、といふには Please give me another を使ふ。何故といふに甲はいけないが其他の乙丙の内なら別段指定せぬのだから。所が若し甲はいけないから、別のを二冊ともくれろといふには Please give me the others といふ。何故といふに、三冊の内甲がいけないとすれば別のは乙と丙とに定まつて居るから the を附け、乙丙と二冊だから others と複數にするのである。若し甲乙二冊しかなく甲はいけない、そちらの乙の方をといふ時には乙一冊だから單數で Please give me the other といふ。

(8) each と both と all.

each は「どれもどれも」both は「兩方とも」all は「悉く皆」である。詳しくは Personal Adjective の用法を説明する時に一所にする。

(9) each ether と one another.

兩方とも「互に」といふ意味の熟語であるが、each other の方は二つの人又は物互にで one another は三つ以上の人又は物互にである。例へば

e-nough'（イナフ）

The *two* hated each other.
〔兩人互に相憎んだ〕

Don't speak with each other.
〔二人で話し合ふな〕。

Let us *all* love one another.
〔一同總で互に相愛しあはうでないか〕。

Don't speak with one another.
〔銘々で話し合ふな〕。

(10) such と the same. 例へば

He is a villain, and you must treat him as such.(=*as a villain*).

〔彼は惡黨だからさういふ奴の積りて取扱はねばならぬ〕。

Kings are constituted such (=*as kings*) by law.

〔王は法律によりて王たるものとして制定されて居る〕。

以上の例に於ける如く such は前の Noun を受け(單複何れでもよし)「その樣なものとして」といふ意味を表はす。

I am well, and I hope you are the same (=well).

〔私は達者です。君も其通な事を望みます〕。

I want five copies of the "Eigososho." Will you send the same(=*five copies of the Eigososho*) to me soon?

〔英語叢書五冊入用に付同書至急御送り被下度候〕。

以上の例に於ける如く the same は前の名詞を受け（單數何れをも）「その通りを」の意味に使ふ。

hāt'ĕd（ヘイテッド） vil'lain（ヴィリン） trēat（トリート） cŏn'sti-tūt-ed（コンスティテューテッド） want（ウォント） cŏp'ies（カピズ）

以上の外まだ everyone, somebody の如き説明せぬ Adjective Pronoun も少しはある。且つ上の説明も眞の大體を明にするに過ぎない。それは何うせ次篇に Pronominal Adjective を説く時再び説明を要するのだから、其時詳しくする方が双方の便宜と思つたからである。

IV. Relative Pronoun.
（關係代名詞）

1. Relative Pronoun の性質

Relative Pronoun（關係代名詞）は一名 Conjunctive Pronoun（接續代名詞）といふ。何故といふに此種の Pronoun は一方に於ても普通の Pronoun と同じく或る Noun を代表して居ると同時に、又前後の文章を接續して、離れ々々のものを一つに繋ぐ役目をするからである。例へば

I met Mr. A. He told me the story.

〔僕は甲氏に遭つた。氏は僕に其話をした。〕

といふ二つの文を普通の Conjunction（接續詞）で繋いで一文とすると

I met Mr. A, **and** *he* told me the story.

ĕv'ĕr-y-one（えヴァリワン） sŏm'bod-y（さムボディ） con-jŭnc'tive（コンヂァンクティヴ） mĕt（メット） stō'ry（ストゥリ）

となる。所が若し and に代ふるに *who* といふ語を以てすと

I met Mr. A. **who** told me the story.

といふ風に後の he をも who の一語に兼ねさせてしまう事が出來る。又

I bought a dictionary. It is very useful to me.

〔僕は辭書を買つた、それは僕に非常に必要だ〕。

といふ二文を普通の Conjunction（接續詞）and で繋いで一文とすると

I bought a dictionary, **and** *it* is very useful to me.

であるが、若し and に代ふるに **which** といふ語を以てすると

I bought a dictionary **which** is very useful to me.

となり which 一語で and といふ Conjunction（接續詞）と it といふ Pronoun（代名詞）と二つの役目を兼有させる事が出來る。

斯んな風に Conjunction と Pronoun と兩方の役目を一語で兼有するもの、即ち who, which の如きを文法上 Relative Pronoun といふのである。

Relative Pronoun には大抵其 Antecedent（先行語）といふものがある、そは Relative Pronoun が代表する Noun 又は Pronoun（Relative Pronoun より先きにある）をいふので、上例に就きいへば who の antecedent は Mr. A. which のは a dictionary である。

Relative Pronoun の主なる語は次の通りである。

ūse-ful（ユースフル） an-te-cēd'ent（アンティスィーデント）

(1) 人を Antecedent とするもの、即ち前に述べられたる人を代表するもの

主格	所有格	目的格
who	whose	whom

(2) 物を Antecedent とするもの

which	whose 又 of which	which

(3) 人及び物何れをも Antecedent とし先句に制限的意味を附するもの

that	——	that

(4) 物を代表するも別に Antecedent を有せぬもの

what	——	what

(5) 人及び物の何れをも代表して特殊の意義を附するもの

but	——	but
as	——	as

(6) Compound Relative Pronoun (熟語關係代名詞)

whoever	whosever	whomever
whosoever	whosesoever	whomsoever
whichever	——	whichever
whichsoever	——	whichsoever
whatever	——	whatever
whatsoever	——	whatsoever

次に其意義用法を説明しよう。

whoever(who-ēv'er フーえヴァ 此くの如く語尾に ever を附けば ev を強く發音す) whosoever (who-so-ēv'er フーソゥえヴァ、此く soever が語尾に附きても ev を強く發音す) whose(フーズ) whom(フーム)

2. Relative Pronoun の意義用法

(1) who, whose, whom——上に言ふ通り人を Antecedent (先行語) にする時に限り用ゐらるゝもので、其代表する語の Case (格) 如何により who, whose, whom と變化する。例へば前例の

I met Mr. A., **who** told me the story.

は二文に解剖すると

I met Mr. A. **He** told me the story

で、who の代表する語は he と Nominative Case (主格) である。所が

I have employed B. **His** mother is dead.

〔私は乙を傭つた。其母は死んだ〕。

の兩文を繋ぐには his の代りに上例により who を以てしてはならぬ、his は Possessive Case(所有格) であるからそれに代用せらるゝ Relative Pronoun も Possessive Case の whose を以てせねばならぬ。即ち

I have employed B., **whose** mother is dead.

又 I met a rickshawman on the way. I employed **him** as my guide.

〔私は途中で車夫に遭つた、私は彼を案内者として傭つた〕。

を繋ぐには him は Objective Case であるから、こちらも

em-plōyed'(エムプろィド) dēad(デッド) gūide(ガィド)

其 Case のもの即ち whom を以てせねばならぬ、すると

I met a rickshawman on the way, I employed **whom** as my guide.

となるが、こゝに一つ困つた事がある。whom は單に him の代用になる許りでなく I met……といふ文と I employed……といふ文とを繋ぎ合はす役目をせねばならぬ。それには whom が上の樣な位置にあつては其役目が出來ぬ、是非兩方の中央即ち後の文の冒頭に置いて

I met a rickshawman on the way, **whom** I employed as my guide.

とせねばならぬ。

斯んな風に關係代名詞は成るべく繋ぐべき二つの文の繋ぎ目に(反言すれば Antecedent に近く)置くがよい。

(2) Which は丁度上の who, whose, whom が人を代表する樣に物を代表する、唯 which には Possessive Case(所有格)の語がないから、其時は whose を假用するか但しは of which として間にあはして置く。

I brought a dictionary. **It** is very useful to me.

=I bought a dictionary, **which** is very useful to me.

I bought a dictionary. Its cover is red.

=I bought a dictionary, {**of which** / **whose**} cover is red.

〔私は辭書を買つたが其表紙は赤だ〕。

rick'sha(w)-man(リックショマン) cov'er(カバ)

I bought a dictionary. I lent **it** to Mr. A.

=I bought a dictionary, **which** I lent to Mr. A.

〔私は辭書を買つたが、それを甲氏に貸した〕。

序ながら言つて置く、Relative Pronoun で繋いだ結果、二つの文の順序を顚倒させる事が屢々ある。例へば

I received a letter from Mr. C. This is the letter.

〔私は丙氏より手紙を受取つた。これが其手紙だ〕。

を which で繋ぐと

This is the letter **which** I received from Mr. C.

と順序を替えねばならぬ事となる。又

We met a gentleman in the train. He is the gentleman.

〔私等は汽車中或る紳士に遭つた、彼が其紳士です〕は

He is the gentleman **whom** we met in the train.

となる。斯く顚倒して繋ぐ文章には關係代名詞の前に(,)符を附けるに及ばぬ、譯も下からかへつてするがよい、次の二つを比較せよ。

I met a rickshawman on the way, whom I employed as my guide.

〔私は途中一人の車夫に遭ひそれを私の案内者として傭つた〕と上の節より先きに譯す。

He is the gentleman whom we met in the train.

上の如く(,)符なきものは譯を下よりして

〔私等が汽車中に遭つた紳士は彼れです〕。

尙ほ一つ注意すべき事は、次の樣な繋ぎ方だ。

re-ceived'(リスィーヴド)

(*a*) { I live *in* a house.
The house is large.

=The house { *in* **which** I live / **which** I live *in* } is large.

〔私の住む家は大きい〕。

(*b*) { You speak of a person.
The person can not be Mr. A.

=The person { *of* **whom** you speak / **whom** you speak of } can not be Mr. A.

〔君の話をする人は甲氏の筈がない〕。

この (a) (b) の例の如く前置詞の位置は關係代名詞の前に置いても、或は其句だけの最後に置いても差支ない。尙ほ詳しい事は「作文の話」の方で說明しよう。

(3) that——は主格と目的格に許り遣はれる關係代名詞で、所有格を代表する事は決してない。其用法は斯うである。

(*a*) 前にかういふ事をいつて置いた。關係代名詞のついた文章を眞直に譯する場合と逆に譯してゆく分とあるといふ事をいつた。而して前者の場合にては關係代名詞の前に comma があり後者にはないといふ事も曰つて置いた。此 comma のない即溯つて譯する場合の關係代名詞 who, which, whom は *that* を以て代用する事がある。但し所有格の時に決して代用する事が出來ない。又其 that の前には前置詞の來る事も許さないのである。

I wish to read a book **that** is both easy and interesting.

〔たやすくて面白い本が讀みたい〕。

He is the man **that** teaches us English.

〔あの人は僕等に英語を敎へる人です〕。

This is the boy { *of* **whom** I told you / **whom** I told you *of* / **that** I told you *of* } yesterday.

〔これが昨日御話した小供です〕。

(*b*) That を用ひねばならぬ場合。

1. 先行語が最上級のとき。

He is the *bravest* man **that** ever lived.

〔彼は未曾有の勇士だ〕。

He was the *first* man **that** came.

〔あの人が一番はじめに來ました〕。

2. *The only, the same, the very, all, no* の次。

He was *the only* boy **that** failed.

〔落第したのはあの生徒だけ〕。

This is *all* **that** I want.

〔私の入用なのはこれ丈け〕。

3. 人と動物又は物とが先行語のとき。(who and which はをかしいから)

The boy and his dog **that** fell over the cliff were killed on the spot.

〔涯から落ちて小供と犬とは即座に死んだ〕。

ēas'y(いーズィ) ĭn'tĕr-est-ing(いンタレスティンク) yĕs'tĕr-day(イえスタデェ) brāv'est(ブれヴェスト) ĕv'ĕr(えヴァ) lĭved(リヴド) fāiled(フェイルド) clĭf(クリフ) spŏt(スポット)

4. 疑問代名詞の次。(who whom や what which などはをかしいから)

Who is the man **that** is standing by the gate?

〔門の所に立つてる人は誰か〕。

Who **that** has common sense can do so?

〔常識のあるものに誰がそんな事が出來るものか〕。

5. *It is* の次に來るとき

It is you **that** are wrong.

〔考間違をしてゐるのは君だよ〕。

It is I **that** am to go.

〔行く筈になつてるのは僕だよ〕。

此文態に於て注意すべきは that の次の動詞が It に一致せずして that の前にある Subject Complement (主詞の補足詞) に一致する事である。

又此の構造に於て It is.....who とか It is.....which の形を見る事が屢あるけれども that の方が一番に正しき形である

(4) what——what の特色は（先行語＋關係代名詞）である。場合によつて the thing which, those which, all that などの意味になることである。

Do you understand **what** (=*the thing which*) is written on the blackboard?

〔黑板に書いてある事が分りますか〕。

That is **what** (=*the thing which*) I want.

〔それが私の入用なものです〕。

sĕnse(センス) wrŏng(ロンク) blăck'bōard(ブラックボード)

Don't attempt to do **what** (=*the thing which*) is impossible.

〔不可能の事をやらうなどとは企てるな〕。

Lend me **what** books (=*those books which*) you can spare.

〔御あきになつて居る本を貸して下さい〕。

He went to render **what** service (*all* the service *that*) he could.

〔彼はいつて出來得る限りの助力をいたしました〕。

I gave him **what** little money (=*all* the little money *that*) I had.

〔少いながら私の持つてるだけの金を皆やりました〕。

Japan is to Asia **what** England is to Europe.=Japan is *that* to Asia *which* England is to Europe.

〔日本が亞細亞に於けるはなほ英國が歐羅巴に於ける如し〕。

He is not **what** he used to be.

〔彼はもとの彼ではない〕。

He is **what** *they call* a lady-killer.

〔あの人は世間でいふ女殺しさ〕。

(5) but と as——but は普通 Conjunction (接續詞) として遣はれるものだが、時に又 Relative Pronoun (關係代名詞) にもなる。此場合の but は who.....not とか which.....not とかいふ意義を有するものである。例へば

at-tĕmpt'(アッテムト) im-pos'si-ble(イムポッシブル) spâre(スペア) sēr'vĭce(サーヴィス) mŏn'ey(マニィ) A'sia(shā えィシャ) Ēu'rōpe(ゆーラップ) lā'dy-kĭl'lĕr(れィディきラ)

There is nobody **but** has (=*that* has *not*) some ambition.

〔人にして大望を有せぬものはなし〕。

Who is there **but** commits errors?=Who is there *who does not* commit errors?

〔人誰れか過失なきものあらんや〕。

As は普通 Adverb (副詞) として使用せらるゝものだが、時に Relative Pronoun にも遣はる、尤も其時は必ず as の前に such とか the same とか又は別の as とかいふ語がなくてはならぬ。例へば

I like **such** a story as is both instructive and amusing.

〔私は教訓と趣味と兩方を兼有する樣なそんな話が好きだ〕。

You should choose **such** friends as will benefit you.

〔君を益する樣な友を撰ばねばならぬ〕。

He studies **the same** language as I do. (=*that I study*).

〔彼は私が學ぶと同じ語學を學んで居る〕。

As many beggars as came were given some alms.

〔來るだけの乞食が皆施行を受けた〕。

尙ほ注意して置くが the sams .....as と the same..... that との區別を明かにせねばならぬ。

You must obey **the same** rule as our servants.

---

nō′bod-y (のゥボディ)　am-bĭ′tion (アムビシャン)　com-mĭts′ (コムミッツ)　ĕr′rŏrs(えラズ)　in-strŭct′ive(インストらクティヴ)　a-mūs′ing(アミューズィング)　choōse(チューズ)　bĕn′e-fĭt(ベニィフィット)　lăn′guage(らンゲヂ)　bĕg′gärs(ベッガス)　ärms(アームズ)　rule(ルール)

You must obey **the same** rule **that** our servant should obey.

〔君は內の召仕が從はねばならぬ其(同じ)規則に從はねばならぬ〕。

の樣に意味は同じだが、the same.....as の時は後の Subject (主詞、上文では our servants) に對する Predicate Verb (敍述動詞) は略され、the same.....that の時には之を略されぬのである。

(6) Compound Relative Pronoun (熟語關係代名詞)——これは who, whose, whom, which, what に ever 又は soever といふ語を結び附いて一語となつたものである。前に Relative Pronoun の what は先行語と關係代名詞と加はつたものだと說明したが、この Compound の語も矢張りそれと同樣である。唯 ever の附いたものと soever の附いたものとは意味も用法も全然變りはなく何れも、

whoever=whosoever=any one who=誰れでも

whosever=whosesoever=any one whose=誰れのものでも

whomever=whomsoever=any one whom=誰れとでも

whichever=whichsoever=any that 又 either that=どれでも、どちらでも

whatever=whatsoever=any one that=何でも

例を擧げて說明すると

---

prĕd′ĭ-cate(プれディケト)

I will give it to *anyone who* wishes to have it.

今此文を見るに any one は to の次にある目的格であるから whomever を用ふべき場合であると誤解してはいけない。實際此の誤をやる人が多いからよく注意して貰ひたい。anyone が主格であらうと目的であらうとそんな事には少しの關係もない。any one の次に who の來る樣な場合ならば何時でも whoever を用ひ whom の來る場合には常に whomever を用ひてよろしいのである。であるからして上の例も

I will give it to **whoever** wishes to have it.

とするのである。其他四五の列を擧ぐれば

Whoever violates this law shall be punished.

=**Any one who** violates this law shall be punished.

=I will punish **any one who** violates this law.

〔此法律を犯した奴は誰でもかまはぬ罰してやる〕。

Bring **whoever** wishes to attend the meeting.

〔會に出たい人ならば誰なりとも連れて來たまへ〕。

Bring **whomever** you like.

〔誰なりと君のすきな人を連れて來たまへ〕。

Whatever he undertakes succeeds with him.

=He succeeds in **whatever** he undertakes.

〔あの人はやる事毎に成效する〕。

You may take **whichever** you like.

〔君のすきなのはどれをとつてもよろしい〕。

vi'-o-lates (ヴァイオレツ) pŭn'ished (ぱニッシト) mēet'ing (みーティング) ŭn-dēr-tāk*es*(アンダテイクス)

此等の語であつても其次に may が來るときには關係代名詞の性質を失つて「……しやうとも」といふ意味になる。副詞ではあるが whenever, wherever, however も矢張此等と同じ關係がある。

Whoever *may* ask me for it, I will not part with it.

〔誰れが呉れろと曰はうと僕は手ばなしはしない〕。

Whatever he *may* undertake, it is sure to succeed with him.

〔あの人が何をやらうと彼は屹度成效する〕。

However hard you *may* try, you can not master English in a year or two.

〔どんなに勉强しやうと一年や二年で英語に熟達する事は出來ない〕。

Wherever you *may* go, you will find it so.

〔君は何處へ行かうとも矢張さうだといふ事が分ります〕。

3. Relative Pronoun を省く場合

Relative Pronoun (關係代名詞) の前に comma 符 (, 符) のなき場合即ち日本語に譯する時逆に遡つて譯する場合に限り目的格の關係代名詞は隨意に之を省略する事が出來る。例へば

{She is the lady **whom** I met yesterday.
{She is the lady I met yesterday.

com'ma(こムマ)

{This is the watch **which** he gave me.
{This is the watch he gave me.

{This is all **that** I want.
{This is all I want. 〔私の入用なのはこれだけ〕。

動詞の目的になる場合だけではない。前置詞の目的になる場合でも矢張省略が出來る。

The chair *in* **which** he is sitting is called a rocking-chair.

〔あの人の腰かけて居る椅子は搖椅子といひます〕。

當り前ならば He is sitting in a chair といふ順序で in は sitting の次に來べき筈のものである。然るに最後の chair が which となつて前の方へ行つた。in は which に深い關係のあるものであるから which の御蔭であんなに立身したのである。which が主人で in は從者と見ても差支なからう。處が今此主人の which は目的格であるから省略することになつた。主人の存命中にこそ御伴をして行けたとはいふものゝ今や主人に死に別れたからには矢張從者はもとの從者の地位に返らねばならぬ。which を略したからには in も sitting の次へ逆戻りしなければならぬ事になる。

{The chair *in* **which** he is sitting is called a rocking-chair.
{The chair **which** he is sitting *in* is called a rocking-chair.
{The chair **that** he is sitting *in* is called a rocking-chair.
{The chair he is sitting *in* is called a rocking-chair.

〔彼の掛けて居る椅子は搖椅子といふのです〕。

rock'ing-châir（ろッキングチェア）

{The man *of* **whom** he told me is very young.
{The man he told me *of* is very young.

〔あの人のいつた男は非常に若い人です〕。

關係代名詞が主格に用ひてあり乍ら省略してある事を見うける事があるけれども此等は吾々の眞似る事ではない。時を表はす詞の次に來る關係代名詞は其前置詞と共に略し又は其二つの代りに that だけを代用する事がある。

{He died on the very day *on* **which** she was born.
{He died on the very day {**when** / **that**} she was born.
{He died on the very day she was born.

〔彼女が生れた其日に彼は死んだ〕。

{I shall have learned it by the time {*at* **which** / **when** / **that**} you come back.
{I shall have leaned it by the time you come back.

〔君が歸つて來るまでにそれを習つてしまひませう〕。

4. Antecedent を省略する場合

以上大體 Relative Pronoun の説明は終つたから、今一つ言ひ漏した Antecedent（先行語）を略する場合を述べて次章に進む事としよう。

Who の前に先行語の略される事がある。

bōrn（ボーン） a-void'（アヴォイド）

Who (=*He* who; *one* who) can avoid this, must be formidable.

〔之を避け得る人は怖るべき人にちがひない〕。

Who (=*one* who) never climbs will never fall.

〔のぼる事なき人は落ちる事もなからう〕。

(**Whom**=*those* whom) the gods love, die young.

〔神の愛する人は若死する〕。

しかし此等は皆故體で今は詩に用ふるばかりである。

V. Interrogative Pronoun.

(疑問代名詞)

1. Interrogative Pronoun の性質

Interrogative Pronoun (疑問代名詞) とは僅に次の七語をいふので、其れが皆 Relative Pronoun と同じ語ばかりである。即ち

	主格	所有格	目的格
單複數共	who?	whose?	whom?
單複數共	what?	——	what?
單數のみ(複數なし)	which?	——	which?

fôr'mi-da-ble(ふォーミダブル) climbs(クライムズ)

之を、Relative と比較すると Relative の which には Possessive Case に of which 又は whose といふがあつたが、これらにはそれがない。これだけが違ふ點である。

Interrogative Pronoun は大抵文章の最初に遣はるゝものであるが、時に Relative (關係代名詞) の樣に二つの clause (節) の中間に在つてそれを繋ぐ役目をする事がある。唯其時 Relative の方には大抵 Antecedent (先行語) があるに反し、Interrogative には全然これがない、此點に於て兩者は區別される。例へば

二節を繋ぐ疑問代名詞	關係代名詞
I don't know **who** he is.	I like a *man* **who** is kind.
〔彼は誰れだか知らない〕。	〔親切な人は好きだ〕。
Tell me **whose** house it is.	I condoled with *Mr. A* **whose** house had been burnt down.
〔誰れの家だかいつて下さい〕。	〔私は家を燒かれた甲氏を氣毒に思ふ〕。

上例の黑字は疑問又は關係代名詞で Italics (斜體) の語は Antecedent である。

Interrogative Pronoun は丁度 Adjective Pronoun (形容代名詞) が遣ひ方により Pronominal Adjective (代名形容詞) になる如く、時に Interrogative Adjective (疑問形容詞) となる事がある、次の例を見よ。

con-dōled'(コンどゥルド) būrnt(バーント)

疑問代名詞の例

1. **Whose** is this dictionary?

〔此の辭書は誰れのですか〕。

2. **What** did you buy?

〔君は何を買つたか〕。

3. **Which** is the way to the station?

〔停車場へ行く道はどれですか〕。

4. **Which** of those boys struck you?

〔あの小供等の内何れが君を打つたか〕。

疑問形容詞の例

Whose dictionary is this?

〔これは誰れの辭書ですか〕。

What sort of things did you buy?

〔君は何んな種類の物を買ひましたか〕。

Which way leads to the station?

〔どの道が停車場へ行けますか〕。

Which boy struck you?

〔どの小供が君を打つたか〕。

尙ほ各疑問代名詞の意義用法は次に説明する。

2. Interrogative Pronoun の用法

(1) Which——この語は甲乙二個の内、又は二個より多くのものゝ中で何れを選ぶかと言ふ如き、選擇的の意義を有するものである。上に出た最後の二例を見ても解る通り。

(2) What——これは唯漠然と「何が」とか「何を」とか尋ねる時に遣ふ、上例の 2 は buy の目的格の what である。又

sôrt(ソート) bwȳ(バイ) stā'tion(ステイシャン) lēads(リーヅ)

What is your name? 〔君の名は何といひますか〕。

この what は主格の what である。

(3) Who, whose, whom——これも「誰れ」「誰れの」「誰れを」を尋ねる時に遣ふが通常の遣ひ方である。上例の (1) を見よ、尙ほ次をも見よ。

Who are yau? 〔君は誰れか〕。

Whose child is this? 〔これは誰れの子か〕。

Whom did you give it? 〔君は誰れに遣つたか〕。

Who, whose, whom は人間のみを代表す、what は人間及び物體を代表するが、人間を代表する時は其人の身分職業を問ふ義となる。which も亦人間及び物體の兩方を代表するが、前に述べた通り選擇的の意義を有するのである。

(1) **Who** is he?=What is his *name?*
(名を問ふ)。

(2) **What** is he?=What is his *calling?*
(職業身分等を問ふ)。

(3) **Which** is he?=*Which man* do you mean?
(二人以上の内何れかと問ふ)。

だから上の答へは次の如くなる。

(1) He is Mr. A. (名を答ふ)。

(2) He is an officer. 〔彼は士官です〕。

(3) I mean Mr. A. 〔甲氏の事です〕。の類。

* * * * * * *

cal'ing(コーリング) ŏf'fi-çēr(オフィスァ) mēan(ミーン)

What is it **like**? (何んなものですか)。

What are lions like? (獅子は何んな風のものか)。

の樣な What .....like? といふ熟語がある。

(1) I hear you lost a watch. **What** was it **like**?
〔君が時計をなくしたと聞くが、何んな時計だ〕。

(2) **What** is the new teacher **like**?
〔新しく來た先生はどんな風な人か〕。

* * * * * * *

Interrogative Pronoun (疑問代名詞) に Preposition (前置詞) が附屬する事が屢々ある。其時は by, with, to は前に置くが普通、其他は前又は文の最後何れに置いてもよい。例へば

By **whom** were you struck?
〔誰れに君は打たれたか〕。

With **whom** were you conversing?
〔誰れと君は話して居たか〕。

To **whom** does this book belong?
〔此書物は誰れの所有か〕。

以上の前置詞はその位置を動さないが普通である。所が in の時は

In **which** house do you live?
〔どの家に君はお住ひですか〕は
Which house do you live *in?*

lōst(ロスト) con-vērs'ing(コンヴァーズィング) be-lōng'(ビロング)

として差支ない。

* * * * * * *

以上大體 Pronoun (代名詞) の全部を説明し終つた。尙ほ漏れたる點は續篇 Adjective の章其他に於て補充しよう。例に依り次に Pronoun 全部の一覽表を掲げて置く。

Pronoun (代名詞)	1. Personal Pronoun (人稱代名詞)	1. I, my, me の如く格により變化す。 2. I, you, he 等人稱により變化す。 3. 第三人稱單數の外は性の變化なし。 4. Compound (myself, my own, myself の如き形あり)。 5. We, you, he, they, it には特別用法あり。
	2. Possessive Pronoun (所有代名詞)	1. 第一、二人稱は mine と thine の外は總て ours の如く人稱代名詞の所有格の語尾に s を附す。 2. 第三人稱は目的格の語尾に s を附す。
	3. Adjective Pronoun (形容代名詞)	1. 用法により Pronominal Adjective に變ず。this, that, these, those, the former, the latter, both, such, each, either, neither, one, none, another, other, any, some, all, the same の類。

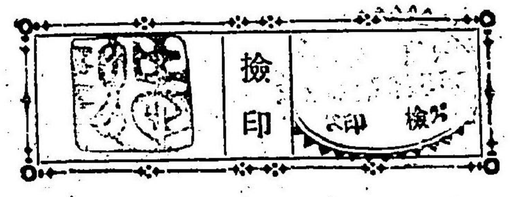
4. Relative Pronoun (關係代名詞)	1.	代名詞と接續詞の用を兼ぬ。who, whose, whom, which, what, that, as, but をいふ。
5. Interrogative Pronoun (疑問代名詞)	1.	用法により Interrogative Adjective に變ず。who? whose? whom? which? what? の五つをいふ。

初等英語叢書第二編

英文法の話

明治四十一年十月十五日印刷 ● 明治四十一年十月十六日發行

不許翻刻 不許漢譯



著作者 英語研究編輯部 代表者 吉田幾次郎

發行者 東京市麹町區富士見町六丁目十番地 小酒井五一郎

印刷者 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 飯田三千太郎

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場

發行所
東京市麹町區富士見町六丁目十番地
英語研究社
郵便振替口座第三〇八五番

定價金廿五錢 郵税四錢

初等英語叢書

英語英文の書籍は澤山ある。併し眞の初學向は頓とない、在つても不親切な大ざつぱな俗受專門のものばかり、本當に讀者の爲めを思つたものは殆どない。此叢書は此陷缺を充すため新に稿を起したもの、これを讀めば英語を解らぬものだの、六つかしいものだのといふ人は、恐らく無くなるだらう。

英語研究記者編著　毎冊約百五十頁　定價各冊金二十五錢　郵稅金四錢

第一編　初等英作文の話

英作文の手ほどきを最も詳密に最も分り易く說明したるもの學生も獨修者も之に依りて容易に困難なく斯道の門戶を開くを得ん、中學二三年は更らなり四五年生にも亦必讀の書なるを信ず。

眞の初學者にも解る　英作文講義　質問隨意

第二編　初等英文法の話

英文典は六つかしくもやさしくも如何樣にも說明の出來るものなり。從來學生の常に英文典に頭を苦めたるは或は之を平易に說明したる書なきに依らざるなきか。敢て大方に本書を薦む。

最も詳しき日本文の英文典なり　質問隨意

第三編　譯註　西洋幽靈の話

當代に於ける讀書社會の人氣者モーパサンの小說を初學にも讀まれる樣の譯文と詳註を加へ、毎頁別に殆ど一語を漏さゞる字引を附せるもの。文章平易事實怪異何人にも面白く讀まるべし。

毎語字引附　辭書不用　對譯註有　質問隨意

發行所　東京市麹町六ノ十　富士見　英語研究社

理想的初等英語雜誌

初等英語研究

第一卷第十號　十月一日發行

▲如期やさしく面白き初等英語雜誌あるか!?

やさしくて詳しくて叮嚀で規切なる日本唯一無二の初等英語雜誌として、今や全國津々浦々至る所に愛讀者を有せざるなき我が『英語研究』を未だ見ざる人ありや。若しありとせば請ふ速に知人の愛讀者に就きて其本誌の爲めに受けたる利益の如何に多大なりしかを問へ。若し斯る知人なしとせば直ちに郵券五錢を本社に投じて見本雜誌を請求せよ。本誌豈冊を熟讀する者はよく嘗て發えざりし英語の興味を解するを得ん。半年よく之を精讀する者は英語を研究する事の案外樂み多き者なる事を悟るを得ん。若しそれ一ヶ年を通じてよく之を愛讀する者あらんか、嘗ては最も不得意なるを憂ひたりし英語を得意に讀みもし書きもし話しもするに至るを得ん。

毎月一回一日發行定價金五錢郵稅五厘一ヶ年分十二冊六十錢但郵稅共

▲號を追ふて愈々益々やさしく面白くなる!!

毎號要目記事

▼次郎のABC（發音綴字の話）
▼和文英譯の公式
▼新案讀本獨り學び
▼空似くらべ（類似語の研究）
▼諳誦用の英語　▼參考書案內
▼太郎の日記　▼新聞の研究
▼やさしい會話　▼ハイカルヲ演說
▼英作文の話
▼先生の手帳（英語の勉强法）
▼英國風俗
▼天眼鏡（課文の批評訂正）
▼オウルドボイズソサエティ（初學英語研究青年會）
▼吾輩は郵便函である（英文手紙の書き方）
▼懸賞試驗問題▼懸賞繪さがし▼懸賞習字▼練習課題

外に毎年二回授賞者三百五十名の大懸賞▼試驗問題を掲載す

【初號以下數版を重れ全部取揃あり】

東京富士見町麹町六ノ十　英語研究社　郵便第三振替口座八五〇

最新式の英作文獨習書

今井信之著

中學 英作文獨習書

近刊

本書の特色

本書は中學程度の學校生徒が是非共知らなければならぬ文法作文の規則及其練習を網羅してある。

本書は易より漸々難に進む仕組であるが故に中學初年級から五年級に至る迄の好參考書となる。

本書にある文法作文の智識がなければ迚も官立學校の入學は六ケしい又立派な中學卒業とも云ない。

本書は勉めて煩雜なる文法上の語句を避け普通の教科書に見當らない「英語の癖」を教へ込むのを目的として居る。

本書の説明は言文一致體で極めて易く書いてある故に獨習には蓋し絶好の書である。

發行所 東京市麹町區十六ノ六 英語研究社

發行所　東京　英語研究社

083271-001-6

特27-997

英文法の話

英語研究社

M41

DAH-0761